白銀の魔女

中富虹輔

プロローグ

　夜の闇の中、セルマは眼前に立つ姉を見つめていた。月の灯りが、二人の黒髪を静かに照らす。　白銀の魔法使い。その称号を得た姉の実力は、長年ともに暮らしてきた妹として、そして同じ師を持つ魔法使いとして、十分すぎるほどに知っている。
　右手の杖を身体の前で構え、いつでも魔法を発動できる姿勢を取っているセルマに対し、姉はその称号の証である白銀の杖を構えようともせず、ただじっと、彼女を見つめていた。
　身動きができない。
　自分よりも優秀な魔法使いたちが束になってかかっても姉を止めることができなかったのだ。自分一人で、そんなことができるわけがない。
　心の中の冷静な部分がそう告げていた。
　けれども。
　姉の暴挙を未然に防ぐことができなかったのは、未然に気付くことができなかったのは自分なのだ。だからせめてその責任は……。
　――たとえ、差し違えてでも。
　自分の中の弱気な部分を心の隅から無理矢理に追い出し、セルマは決意を固めた。たとえ白銀の魔法使いであろうとも、自分の持つ魔力すべてをぶつければ、なんとかなるのではないか。
　セルマは息を吐いた。
　杖を握る手に力を込め、身体の中の魔力を杖へと集中させようとした、その時。
「そこをどいて、セルマ」
　静かに、姉が口を開いた。
　いつもと変わらぬ、おだやかな口調で。
　いつもと変わらぬ、おだやかな表情で。
「姉さん！」
　杖を構えたまま、セルマは姉を呼んだ。
「まだ間に合うわ、姉さん。姉さんが奪ったものを返して、やったことを悔い改めてくれれば……」
「もう、間に合わないのよ」
　白銀の魔女はおだやかに、セルマの言葉を遮った。
「私はもう、里の人たちを何人も殺めてしまった。今さらこれを元に戻したところで、私の罪が許されることはないでしょう？」
「姉さん！」
　セルマはもう一度、姉を呼んだ。
「お願い。もうこんなことはやめにして。そんなものがなくたって、姉さんが優秀な魔法使いだって、みんな認めているじゃない。それ以上、いったい何をしたいっていうの？」
　セルマの必死の訴えは、けれども姉の心を揺さぶった形跡はなかった。白銀の魔女は、小さく首を横に振る。
「みんなに認められればいいとか、そんなことじゃないのよ、セルマ。あなただって魔法使いの端くれなら、そのくらいのことはわかるでしょう？」
「だからって……」
　セルマの言葉は、横から割り込んできた声によって途切れた。年老いた、けれどもその老いには飲み込

まれていない男の声。
「だからといって、禁忌にまで手を出してよいと教えたつもりはなかったのだがな、セシル」
　セルマとセシル、二人の視線が声の方へ向く。二人は同時に「師匠」と声を出していた。
「この期に及んでも、私のことを師匠と呼んでくれるのかね？」
　闇をかき分けて、その声にふさわしい容姿を持った男が現れた。真っ白になった髪を短く刈り込み、背筋を伸ばして直立しているその姿は、とても齢七十を越えた老人には見えない。
　老人は目を細めて、セルマを見た。
「セルマ、白銀の魔法使い相手に、よく頑張ったね。あとは私に任せておきなさい」
　ねぎらうようにいって、ゆっくりと、白銀の魔女へと目を向ける。
「セシル。君が奪ったその石がなんであるかは、もちろん知っているね？」
　その声は、あくまでも穏やかだった。
　セシルは杖を握っていない左手を使い、掌で包み隠せるほどの大きさの球体を取り出した。球体は、淡い青色の光を放っている。
「オムニの宝珠。強力な魔力を秘めた珠。そしてフェルト山の麓、封魔殿に封印された魔人の封印の鍵、でしたね」
　応える声は落ち着いている。自身の師であり、そして同等以上の力を持つ魔法使いを目の前にしてもなお、その表情に動揺の色は見えなかった。
「では、君はその宝珠を手にして、何を為そうというのかね？」
　ごくわずかな間をおいて、白銀の魔女は口を開いた。
「おわかりでしょう。師匠なら」
「魔人サイフェルトの復活、かね？」
　老人の言葉は静かだった。
「魔人を復活させてどうしようというのだね？　二千年前のように使役しようというのか、それとも魔人の力を我がものにしようとでも？」
　数瞬。何かをためらうような沈黙があり、やがてセシルは静かに口を開いた。
「師匠には、関係のないことです」
「ないことはないぞ。魔人の封印を守るのは、この国の魔法使いに課せられた使命なのだからな。それを破ろうというからには、相応の覚悟をしてもらわねばならん」
「承知の上です」
　二人のやりとりを見守りながら、セルマは里の他の魔法使いたちに思いを馳せた。
　姉や師に及ばずとも、里にはセルマよりも優秀な魔法使いは何人でもいる。そういった者たちがここで援護に来てくれれば、姉の愚挙を押しとどめることができるのではないか。
　セルマは対峙している二人の魔法使いを見つめながら、それとなく周囲を探った。しかし、期待しているものが、こちらに近づいてくる気配はない。
　そして、援軍を待つ時間もないままに、姉と師の交渉は、決裂した。
「セルマ、下がっていなさい」
　師の言葉は穏やかだった。その言葉に従うべきか迷っていると、白銀の魔法使いの杖から青みを帯びた光が放たれた。光は魔法使いの杖の動きに合わせてその方向を変え、師とセルマの両者へと襲いかかる。すんでの所でその一撃を躱し、セルマは師へと目を向けた。
　老魔法使いが、杖を構えている。その後方、セシルの魔法を受けた木が一本、真っ二つに裂けていた。裂け目は炭化し、ぶすぶすといやな音を立てている。

「やりおるのう。白銀の称号は、さすがに伊達ではないか」
　老魔法使いはにやりと笑った。対するセシルの表情は変わらない。
「師匠、もう一度いいます。このまま、私を通してください」
「何度いわれても答えは同じだぞ、セシル。ここを通りたければ宝珠を置いて……ぬおっ」
　師の言葉が終わらぬうちに、セシルが動いた。老魔法使いの足下、地面がぼこりと盛り上がる。老魔法使いはよろめきながらも二、三歩後ずさったが、そこを中心に、周囲の地面が地響きとともに数十メートルの距離に渡ってせり上がってゆく。
　それはセルマの足下にまで達し、彼女もまた慌てて後方に跳び退いた。セルマの鼻先、ほんの数センチのところをかすめ、猛烈な勢いで土の壁が出来上がっていく。
　壁は瞬く間に数メートルの高さにまで達し、その向こうにいるはずの姉の姿を隠してしまった。一瞬、魔法の規模の大きさに呆気にとられたセルマだったが、すぐに姉の意図に気付いた。
「師匠！」
　大声で呼ばわり、師へと目を向ける。
「わかっておる！」
　返事はすぐに返ってきた。その声に、珍しく苛立ちの色が混じっている。
「セルマ、こっちに来て力を貸してくれ。私一人ではどうにもならん」
　老魔法使いは、壁に向かって躍起になって杖を振っていた。どのような魔法を使っているのかは判然としなかったが、その魔法が、そそり立つ土壁に対してはさして効果を上げていないのは明白だった。
　セルマは返事をして、師の元へ駆け寄った。

第一話　魔女を追う者

　白銀の魔女の残した土壁の魔法は、あとから集まってきた里の魔法使い十人あまりが協力してようやく打ち消すことができたが、オムニの宝珠を奪った魔法使いの姿は、当然のように消え去っていた。　里の被害も甚大だった。宝珠を取り返そうと果敢に挑んだ者はことごとくが返り討ちにあい、六人は無惨な屍をさらすことになった。かろうじて生き残ることができた者でも、当分は動くこともできない重傷を負っている。
「やれやれ、やってくれおったなあ」
　ため息混じりに師が呟いた。被害の報告をまとめた羊皮紙が、二人の前にうずたかく積み上がっている。
「すみません。私が姉さんの言動にもっと注意を払っていれば……」
「白銀の魔法使いがあんなことをするなど、誰も予想はできんよ」
　羊皮紙の束を持ち上げながら、レイバーグはセルマの言葉を遮った。
「色々あって疲れたろう。今日はもう休みなさい」
　時刻は、すでに深夜を回っている。姉がしでかしたことの償いが少しでもできればとこの時間まで頑張っていたが、もう、セルマにできることは多くはなさそうだった。
　自分を気遣ってくれているのだろう。師の表情はいつもと変わらずおだやかだった。いつもと変わらぬ師の姿を見ていると、この偉大な魔法使いに任せてしまえば、どれほど難しい問題であろうとたちどころに解決してしまうような気にさえなってくる。
　けれども。
「大丈夫です。まだ、なんでもできます。大変な時ですし。急がないと、姉さ……オムニの宝珠を取り返すこともできなくなってしまうでしょうし」
　セルマの強がりにレイバーグは微笑んだ。きみの考えていることはわかっている。師の目がそういっている。
「セシルのことなら心配ない。すぐに手は打つし、明日の早朝にはこの里からも追跡隊を出すつもりだからね」
「追跡隊ですか？」
　師の言葉に、セルマの気ははやった。追跡隊の一員に加わりたい。そして姉を諌め、できうることならばその愚行をやめさせたい。
　そこまで思いを馳せたところで、セルマは厳しい現実に目を向けざるを得なかった。
　白銀の称号を持つ姉を追い、その手から宝珠を奪い返す。それができるのは、多少なりともその魔力に抗しうる能力を持った者に限られる。
　それは相当に厳しい条件だった。自分がその条件を満たしているか、と問われれば、悩む間もなく「否」と応えなければならない。自分が三流の、並以下の魔法使いでしかないことは、自分自身が一番よくわかっていた。
　――私は、やきもきしながらここで師匠と姉さんの帰りを待つことしかできないのだろう。
　セルマは落胆しながら、師が「そうだ」とうなずくのを聞いていた。
「できることならセルマ、君には私とともにセシルの追跡についてきてほしいのだよ。そのために、今日はなるべく早く休息をとって、英気を養っておいてもらいたいのだ」
　セルマはぽかんと師の顔を見つめた。
　師の言葉があまりにも予想とかけ離れていたため、にわかにはその言葉を信じることができなかった。

「本当、ですか？」
　ようやくそれだけの言葉を出すと、レイバーグは小さく笑った。
「危険な旅になるだろうしな。行きたくないのなら、無理に行かなくともよいのだぞ？」
　何もかもをわかっていて、彼女を焚きつけるかのように。師はいたずらっぽくいった。
「行きます。行かせてください」
　セルマは椅子を蹴倒して立ち上がった。レイバーグは、その答えに満足したように微笑む。
「そういってくれると思っていたよ。さあ、そういうわけだから、今日は早めにお休み。明日からは、たぶん長旅になるだろうからね」
「わかりました」
　セルマはうなずいて、その場を辞した。まだどこかから負傷者のうめき声が聞こえてきそうな里の中を、家へと向かう。
　里の被害は甚大だったが、幸いにも、セルマが姉とともに住んでいた家は無事だった。彼女は家を破壊された里の者のために部屋を開放すると、自室へと入った。
　師の言葉に従って、早く休もうと床についたが、彼女の頭の中を様々な思いが去来し、なかなか寝付くことができない。
　なぜ、姉さんはあんなことをしたのだろう。
　姉さんは、どこへ向かうのだろう。
　姉さんの追跡隊に入れてくれるという、師匠の言葉は本当なのだろうか。
　その言葉は方便で、追跡隊は彼女が目を覚ますずっと前……もしかしたら今夜にでも、出発してしまうのかもしれない。
　その可能性は大いに有り得たし、自分が同行を許されない理由も、いくらでも思いついた。
　そしてまた、横になって頭が冷めてくると、様々な不安も頭をもたげてくる。
　私は、姉さんを説得できるのだろうか。
　説得ができずに戦いになってしまったとき、私は、姉さんを相手にすることができるのだろうか。
　そして……私が姉さんの命を奪わなければならない状況になったとき、本当にそれができるのだろうか。
　自分の中で不安ばかりが大きくなっていくことに気付いて、セルマは少し慌てて、心を平静に保とうと努めた。
　心の動揺は、そのまま魔法の不安定化につながる。魔法使いとしての修行を始めたときに一番最初に教えられることで、心を平静に保つ訓練は、いついかなる時でも欠かしてはならないと厳命されている。
　それが重要なことであるというのは頭ではわかっていた。しかし、どうにもセルマはそれが苦手だった。
　――こんなことじゃ、追跡隊のみんなに迷惑をかけてしまう。
　セルマは、自分を遠巻きにして見つめている不安な気持ちを視界の外に追い出すため、大きく深呼吸をした。
　一度、二度、三度。
　四度目の深呼吸で、ようやく気持ちが落ち着いてきた。
　――大丈夫。今は休もう。師匠もいっていた。「明日からは長旅になるだろう」って。
　セルマは目を閉じ、やがて静かな眠りへと落ちていった。

眠りは浅く、セルマは明け方、陽の昇る前に目が覚めていた。部屋を出て、空いた部屋で雑魚寝をしている魔法使いたちを起こさぬように気を使いながら、家の外に出る。
空は明るく白み、東の空には朝日が顔を出していた。
明け方の里は、静寂に包まれている。陽の光の下で見ると、姉が魔法使いの里に残していった傷痕が、生々しく浮かび上がってくる。木っ端微塵に破壊された建物。折れた木。地面に穿たれた穴。
里が元の状態に戻るには、相当な時間が必要だろう。
大きく息をついてもう一度周囲を見回すと、右手から、人影が歩いてくるのが見えた。歩き方や背格好で、彼女はすぐに、それが師であることに気付いた。師はゆったりとした足取りで、こちらへ向かっている。
昨夜の心配が杞憂だったことに、少しだけ安堵した。師の姿から目を離し、八割方姿を現した朝日へと目を向け直す。
「あまり眠れなかったのかね？　そろそろ、迎えに行こうと思っていたところだ」
師が彼女のすぐ隣で立ち止まって声をかけてくるのと、太陽が昇りきるのは同時だった。セルマは老魔法使いの方へ向き直り、「はい」とうなずいた。
「色々と考えていたら、なかなか寝付けませんでした」
「無理もなかろうな」
老魔法使いは小さく微笑むと、先ほどまでセルマが見ていた方へ、顔を向けた。
「それで、色々と考えても、決意は揺るいでいないかね？」
長いつきあいである。師は、セルマの心の揺れを、敏感に見抜いているようだった。
「……はい」
わずかな間をおいて、セルマは応えた。
「よろしい」
レイバーグは、目を細めてうなずいた。
「一応、確認しておこうかね。君は今後兄弟子であり、実の姉でもある魔法使い、セシルと事を構えることになっても、ためらうことなく、彼女に魔法の刃を向けることができるね？」
はっとして、師の顔に目を向ける。
それは、遅かれ早かれ、第三者に対して明確にしなければならない宣言だった。その問いに対して要求されている答えはたったの一つ。そして、そこに躊躇があってはならない。
迷いや躊躇いは、自分自身のみならず、自分と行動をともにする者の生死にまでかかわってくる。
今彼女に求められているのは、いざというときに肉親の情に流されることなく、冷徹に為すべきことを為す、集団の中の一員という立場を貫くことだった。
「はい」
もう一度、セルマがうなずくと。
「よろしい」と、レイバーグは破顔した。
「だがもちろん、それは最悪の事態が起きたときのことだ。私としてもあたら優秀な魔法使いを失うのは本意ではないし、できうるなら、ことを穏便に済ませたいと思っているのだよ。そのために、危険を承知で君を連れていくのだからね」
自分の実力は重々承知している。だから、師が望んでいる自分の役割については、なんとなく予想はできていた。
「全力を尽くします」
セルマは、こわばった表情でうなずいた。師は「それでいい」と微笑んで、

「早速で悪いが、そう時間も多くはない。身支度をして、里の門に集合ということにしたいが、大丈夫だね？」
　セルマは「はい」と応え、「では後ほど」という師の背中を見送った。
　家に戻って旅装を整え、杖を手に取る。特殊な金属に特別な魔力を込めて作られる、魔法使いの杖。その製法は限られた者にのみ伝えられる、秘中の秘とされている。それ故に決してその数は多くはなく、能力に劣る者、独り立ちしたばかりの者は、他の魔法使いが使っていたものを譲ってもらうことも多い。
　セルマの杖も、姉が白銀の称号を得た際に、それまで使っていたものを譲り受けたものだった。姉以外にも相当数の魔法使いがこれを握ったのだろう。杖には、大小無数の傷が刻まれている。
「姉さん……」
　セルマは、杖を見つめて呟いた。
　脳裏に、姉と過ごした日々が去来する。
　落ちこぼれていた彼女に、わかりやすく魔法の手ほどきをしてくれた時のこと。どうやってもできなかった魔法を完成させるために、姉が辛抱強く、何日もつき合ってくれた時のこと。
　なぜ、姉があのようなことをしたのか。
　結局、問題は最後にはそこに行きついた。
　――姉さんに追いつけば、その答えは出るのだろうか。
　大きく息を吸い、そして吐き出す。
　――姉さん。私は姉さんを追います。
　セルマは杖から目を離すと、ゆっくりと、最初の一歩を踏み出した。

　里の入口には、レイバーグともう一人、こちらも主に若手の指導に当たっているモリーという魔法使いが立っていた。里の実力者の大半が重傷を負っている中、被害を受けていない者に、彼ほどの魔法使いが残っていたのは僥倖といえよう。
　それから少し遅れて、若手の中でも力の強い魔法使いが二人やってきた。一人はアイクという名の魔法使いで、セルマと年齢も近く、何度か言葉を交わしたこともあった。がっしりとした体格で、どこか遠方の国のものらしい、セルマの美的センスからはかけ離れた、ひどく派手な柄の服を着ているのが印象的な男だった。
　もう一人は、名前こそ知らなかったが、姉の補佐役として、よく一緒に行動しているところを見たことがあった。イルンと名乗ったその男は、同期の魔法使いの中では、姉に次ぐ実力の持ち主だという。
「といっても、セシルにはとても遠く及ばないけどね」
　端整な顔立ちの金髪の魔法使いは、涼やかに笑った。
　挨拶を交わしたところで、レイバーグが「さて」と口を開く。
「これから我々は白銀の魔法使いを追うわけだが……」
「ちょっと待ってください」
　セルマは、慌てて師の言葉を遮った。レイバーグは怪訝な顔で彼女へと目を向ける。
「あの……こういうのは失礼かもしれませんが、姉を……白銀の魔法使いを追うのに、これだけの人数ではあまりに少なすぎるのではないのですか？」
　無尽蔵の魔力を秘める宝珠を手にしたセシルを相手に、いかに優秀な人材が揃っているとはいえ、わずか五人ではさすがに心許ない。
「君の危惧はもっともだね、セルマ」

　レイバーグは、小さな微笑みを浮かべた。
「確かに、セシルの魔力は強大だし、それに対抗するには、ここに集まってもらった者だけでは、人員が不足していることも、残念だけれども認めなければならない」
　なにしろ、夕べさんざんにやられてしまったからね、と、レイバーグは苦笑しながら付け足した。
「だからといって、打つ手は何もない、というわけではないのだよ。この国には、あと三つの魔法使いの里があるのだし、私たちが組織だって動くことは禁止されているとはいえ、国の政治に関わるな、という決まりはないのだからね」
「それでは、今後何かしらの支援がある、と考えてよろしいのですね？」
　アイクの野太い声がレイバーグに向けられる。老魔法使いは「もちろんだとも。それについては、あとで説明しよう」とうなずいて、もう一度場の全員を見回した。
「他に質問はないかね？　なければ、これからのことを説明したいと思うが」
　レイバーグの問いには、沈黙で応えられた。少しの間、老魔法使いはその場にいる者の発言を待つように皆を見回していたが、やがて「それでは」と、奇抜な着衣の魔法使いへと目を向けた。
「アイク。オムニの宝珠を奪ったセシルが、次に目指すのはどこだと思うかね？」
　唐突な質問に、アイクはいささか面食らった様子を見せたが、数秒ほど、何かを考えるかのように沈黙したあと、
「白銀の魔法使いは、魔人サイフェルトの復活を目論んでいると聞きました。とすれば、彼女が次に目指すのは、西の魔法使いの里だと思います」
　ふむ、とうなずいて、レイバーグは再びアイクに問うた。
「その根拠は？」
「魔人サイフェルトの復活には、この里に保管されていたオムニの宝珠ともう一つ、西の里に保管されているジアスの宝珠を必要とするからです」
「大変よろしい」
　レイバーグは満足げにうなずいた。続けて、その隣に立つ金髪の魔法使いに目を向ける。
「ではイルン。白銀の魔法使いは、ここから西の里まで、どのような道を使うと思うかね？」
　イルンが「そうですね……」と思案顔を浮かべるのを見て、セルマも自分なりの解答を思い描いてみた。
　このアルクフェルトの国は、国土のほぼ中央にフェルト山をいただき、その周辺に都市や町村が点在している。セルマたちの住む東の魔法使いの里は、文字通り国の東端に位置し、西の魔法使いの里も、同様に国土の西のはずれにひっそりと存在している。
　単純な距離であれば、東の里から西の里へ一直線に向かうのが最も短いが、そのためにはフェルト山と、その裾野に広がる広大な森を抜けなければならない。それは時間がかかるばかりでなく、森で迷ってしまえば自身の生命さえも危うくなる。
　安全に西の里へ行こうと思えば、フェルト山の北か南を迂回する道を選ぶことになるわけだが、そのいずれも距離、安全度ともにさして変わりばえはしないはずである。
　結局セルマは結論を出すことができなかったが、金髪の魔法使いには、彼女とは違う考えがあるようだった。
「セシルは、フェルト山を南回りに進むと思います」
　イルンはまっすぐにレイバーグを見つめ、自信たっぷりにいった。その声にはわずかな迷いも含まれてない。セルマには、姉と同年代の魔法使いがそういい切るだけの根拠は一体何なのか、想像もつかなかった。
「ほほう。では、その根拠は何かね？」
　おもしろそうに、レイバーグは問うた。

「はい。セシルは、まずは南の魔法使いの里を目指すでしょう。あそこには、旧代の魔法使いたちが遺した転移魔法装置があったはずです。それを使えば、西の里へわずかな時間で行くことができますし、南の里の魔法使いたちは、直接的な攻撃や防御の魔法はあまり得手でない人が多いですから、彼女一人の力で里を制圧するのも容易だと思われます」
　イルンの言葉は淀みなく、理にかなっており、なんの疑問を挟む余地もないように思われた。
　魔法使いの里のことを考慮に入れなかったのは盲点だった。セルマは北の里にも思いを巡らせた。
　東西の魔法使いの里が、魔人サイフェルトの封印に関わる宝珠を保管し、南の里が旧代の魔法使いの遺産である転移魔法装置を管理している。それと同様に、北の里にも、やはり旧代の魔法使いの遺産が遺されていた。
　魔導の籠手。
　かつて魔法使いたちは、魔法を発現させるための媒体として、杖以外の様々なものを用いていた。その中でも籠手は「腕が自由になる」などの理由から多くの魔法使いが用い、広く出回っていたという。
　また当時は、現在では考えられないほどに強力な魔法を発現させることのできる媒体も研究されていた。
　北の里に保管されている籠手は、その研究の成果の一つだった。それを使えば、同じだけの魔力でより強力な魔法を発現させることができるという。
　――姉さんが、それを目当てに北の里へ行く必要はあるだろうか。
　確かに、籠手によって得られる強大な魔力は魅力的である。姉が本気で魔人の復活を目論み、自分の制御下におこうというのなら、その魔力は強力な武器となるだろう。
　しかし、籠手は北の里の魔法使いたちの監視下にある。そして彼らは、レイバーグからの連絡を受け、籠手の警備を強化しているはずである。そのような危険を冒さずとも、姉は白銀の名を与えられるほどの魔力を、すでに持っているのだ。
　――姉さんは、南へ向かう。
　セルマはイルンの意見が正しいと確信した。しかし、
「私とモリーは、白銀は北へ向かうと思っているのだよ」
　師の言葉は、それを軽々とひっくり返した。師へと目を向けたセルマは、老魔法使いが、状況を楽しんでいるかのように、小さな笑みを浮かべていることに気付いた。金髪の魔法使いはよほど自信があったのだろう。大きく目を見開き、声にこそ出さなかったものの、口が「え」の形に開いてしまっている。
「どどどどういうことですか、それは？」
　口もまわらなくなってしまうほどの勢いでイルンは問うた。レイバーグは金髪の魔法使いの顔をにやにやと見つめ、
「まあそう慌てんでもよろしい。根拠はな、北の里にある魔導の籠手だ」
　セルマは師の言葉を少々意外に思い、「よろしいですか？」と、自分の意見を口にした。レイバーグは、セルマの言葉をうんうんとうなずきながら聞き、白銀の魔法使いの実の妹からの援護射撃を、イルンもまた真剣な表情で聞いていた。
　セルマが説明を終えると、レイバーグは最後にもう一度、大きくうなずいた。
「二人とも、大変いい推測だ。だが、我々の推測にも根拠があってね。まず一つ目に、セルマの考えたとおり、魔人サイフェルトを服従させるためには、強力な魔力を得る必要があること。そして二つ目だが、私たちは、彼女がオムニの宝珠の魔力を利用しようと考えているのではないか、と思っているのだよ」
　二つの宝珠に封じ込められている莫大な魔力。その魔力を有効に使うには、……たとえそれが白銀のものだったとしても……現在の魔法使いたちが持つ杖では、能力が不足している。
　仮に魔人の封印を解くことに失敗したとしても、宝珠の魔力と、その魔力を強力な魔法へと現出させる

ことのできる魔導の籠手とがあれば……。
　純粋な魔力であれば、白銀の名を持つ魔法使いならば制御することは容易だろう。むしろ制御できるかどうかもわからない魔人などよりも、よほど扱いやすいともいえる。
　それを考えれば、厳重に警備されている魔法使いの里を強襲し、籠手を奪うというのも、決して悪くはない選択だった。
　――結局、姉さんがどっちに行ったかを決める確実な手がかりはない、ということね。
　セルマは師の顔を見つめながらもう一度、姉ならばどうするか考えてみたが、その決め手になるような材料を思いつくことはできなかった。
「それで、結局我々はどうするのですか？」
　わずかな沈黙の後、奇抜な衣服の魔法使いが口を開いた。
「このまま議論を続けていても、白銀の魔法使いとの差はどんどん開いていくだけのように思えるのですが」
　レイバーグはアイクに目を向けた。
「それもまた正しい意見だな。では、そろそろ私たちの行動について説明しよう」
　前置きして、老魔法使いはその場に立つ魔法使いたちをぐるりと見回した。
「我々の方針だが、白銀の魔法使いと真っ向から事を構えるつもりはない。まず第一に、我々だけでは戦力が不足していること、そして可能ならば、白銀の翻意を促したいからだ」
　――そのために、私はここにいるのだから。
　師の言葉を聞いて、セルマの表情はこわばった。レイバーグが息をつき、もう一度、一同を見回す。その目がセルマの方を向いたとき、師が小さく微笑んだような気がした。セルマははっと師を見つめ返したが、その目はすぐに彼女を通り過ぎてしまった。
「そして、白銀の魔法使いがどの道を通って西の里を目指すかわからない以上、少々危険ではあるが、我々は二手に分かれて、彼女を追おうと思っている」
　二手に分かれる。
　ただでさえ少ない人数をさらに二つに分けてしまって大丈夫なのか。不安が頭をよぎり、セルマはすぐ隣りに立っていたイルンと目を見合わせた。
「無論、君たちの不安は私もモリーも感じている。だが、現状ではそれが一番だろう、という結論に達したのだよ」
　君たちの考えている事はわかっている。師の声と表情はそういっていた。
「それに、あまり不安がる必要もない。他の魔法使いの里からも支援は受けられる手はずになっているし、全軍というわけにはいかないが、国でも軍を動かして白銀の捜索に当たってくれることになった。また、その一部が、我々に合流してくれることになっている」
　ひゅう。
　口笛を吹いたのは、金髪の魔法使いだった。
「たかだか一人の魔法使いを相手に、ずいぶんと大事になってしまいましたね」
　レイバーグは、イルンの言葉にため息交じりに苦笑した。
「まったく、その通りだよ。さて、組分けだが私とセルマが南の里へ、モリーとアイク、そしてイルンの三人は、北の里へ向かってもらいたい」
　順当で無難な組分けだ。セルマは思った。魔力ではレイバーグに劣るモリー師の元に、若手の優秀な魔法使いを補佐としてつけることで総合力を均等にし、白銀の魔法使いの説得役として、実妹のセルマと、同期のイルンとをそれぞれの組に配する。あとから合流するという援軍を含めれば、事態がどういう方向に進むにせよ、それなりに対応はできるだろう。

「何か、異論はあるかね？」
　レイバーグはぐるりとその場を見回したが、セルマを含めて、異議を唱える者はなかった。
「よし、それでは出発するとしよう。長い旅になるやもしれぬし、非常な困難が伴うことは予測できる。気を引き締めてかかってくれたまえ」

　すぐに姉の姿を見つけることができる、などと期待していたわけではなかった。
　けれども、なんの手がかりもないまま無為に日数ばかりが過ぎていくのは、やはり気分のいいものではない。
　自然、歩みは速くなりがちだった。ふと気づくと、師を何十メートルも先行している、といったことも度々で、またもセルマは、うっかり師を置いてきぼりにしてしまっていた。
　立ち止まってレイバーグを待っていたセルマだったが、ふと、師が周囲を窺うように、あちこちに顔を向けていることに気づいた。
　周囲を窺うというよりは、何かを探しているようにも見える。そのためか、師の歩みはいつにも増して遅い。
　ようやく師が彼女の元にたどり着いた。
「おかしいな」
　首を捻る師の呟きを聞いて、セルマは「どうかなさったのですか」と問うた。レイバーグは「うむ」と渋い顔をして、
「実はな、このあたりで軍から派遣された部隊と合流する予定だったのだが……」
　いいながら、老魔法使いはもう一度周囲を見回した。
「まさか約束をすっぽかすような連中でもないだろうしな」
「本当にこのあたりなのですか？　もう少し先で待っているとか、そういうことでは」
「まあ、その可能性もないとはいえんがな」
　まさか道に迷っているわけではあるまいな。レイバーグは呟いたが、さすがにいくらなんでもそれはないだろう。有事には国の防衛に当たらなければならない軍人が、道を間違うなどということがあったら、それこそ大問題である。
「まあいい。もう少し先へ進んで……」
「待ってください。何か来ます」
　セルマは師の言葉を遮った。
　街道を西から、小勢の集団が一つ、こちらへ向かってきている。その身なりなどから、付近の農村の住民や旅の商人などではないのは明らかだったが、だからといってその集団が本当に国からの援軍なのか、セルマは確信が持てなかった。
　レイバーグも、すぐにその集団に気付いたようだった。
「なんとまあ。あれではまるで敗残兵ではないか」
　集団の様相は、レイバーグの呆れ半分、驚き半分の言葉が端的に物語っていた。まだいくらかの距離があるものの、寄り添うように歩いている小集団の足取りが重く、力無いのは見て取れる。
　やがて集団が近づいてきて、その姿をより鮮明に捉えることができるようになった。
　負傷していない者はない。集団の人員のほとんどが、腕や足、頭などに包帯を巻いた痛々しい姿をさらしていた。それよりも少し遅れて、数人の人間が荷車を押しているのが見えたが、その荷車に乗せられている人物はさらに悲惨な状態だった。頭から足先まで包帯が巻かれ、その包帯も広い面積にわたって赤黒い模様が浮き上がっている。見ているだけで、こちらまであちこちが痛くなってしまう。セルマは思わず顔をしかめた。
　ほどなくして、集団もこちらに気付いたようだった。男たちは何かを話し合い、やがてその中から、比較的負傷の小さい一人の男が前に出てきた。大柄で、日に焼けた肌。真四角な顔に短く刈り込んだ髪。鎧の類は身につけておらず、短衣からむき出しになっている太い腕は、しっかりとした筋肉で引き締まっている。しかし、その左腕と左の太ももに巻かれている包帯が痛々しい。

　男は小走りにセルマたちのところへ駆け寄り、二人の近くで立ち止まった。
「あんたが、魔法使いのレイバーグさんかい？」
　男の声には、思っていたよりも覇気があった。
「いかにも」
　レイバーグは鷹揚にうなずいた。
「では、君たちが国から派遣された援軍ということでいいのかな？」
「ざまぁねえけどな」
　男は自嘲気味に応え、ちらりと後ろを振り返った。
「大の男が十人がかりで、細っこい女となまっちろい男を相手にこのざまだ」
　相手が悪かったのだよ。レイバーグは男を慰めるともなくそういって、小さく首をかしげた。
「いま、生白い男といったな？」
　ああ、と男はうなずいた。
「女の方は、連絡のあった白銀の魔法使いだろう。白銀の杖を持っていたからな。男の方は、めっぽう腕の立つ棒術使いでな。白銀の奴の魔法とそいつの棒術で、正規の訓練を受けてる軍人十人がきりきり舞いだぜ」
　その時のことを思い出しでもしたのか、男は「畜生」と毒づいて、後方の負傷者たちを手招きした。男たちがのろのろとやってくるのを視界の端にとらえながら、セルマは師へ目を向けた。
「姉さんはこちらの道を選んだ、ということでしょうか」
「彼の話によれば、そういうことになるかな」
　レイバーグは何かを考えている様子でうなずいた。
「ちいと急がんと、手遅れになる可能性もあるな。それに、彼のいっていた棒術使いというのも気になる。セシルがどこかでそのような者を仲間に引き入れたのだとしたら、これはますます、油断がならなんぞ」
　そうですね。セルマはうなずいて、目線を師から目の前の男へと移した。男は、こちらに向かってくる負傷兵たちへ目を向けている。
　この男も相当な手練れなのだろうし、彼のいうとおり、その仲間たちも十分に訓練か実戦を積んだ戦いのプロフェッショナルのはずだ。そのような兵士たちが、……その片方が白銀の魔法使いとはいえ……たった二人を相手に手玉に取られてしまったというのは、相当に衝撃的なことだろう。男たちの足取りが重くなるのも無理はない。
　やがて兵士たちが到着すると、男はセルマたちの方へ向き直った。
「俺はハーディ。この部隊の隊長代理だ。一応、あんたらの支援を命令されてはいるが」
　そこまでいって、ハーディは後方を顎でしゃくった。
「ご覧の通りの惨状だ。士気はがたがただし、まともに動けるのは俺一人って有り様でね」
「相手が悪かったのだよ。仕方あるまい」
　レイバーグは、同じ言葉を繰り返した。
「それで、どうするね？　そのような部隊では、私たちを支援するどころか、逆に支援が必要なのではないかね？」
　そうなんだよ。ハーディは唸った。
「まあ、さすがにあんたらの支援を受けるのは、こっちも職業軍人の矜持ってもんがあるからな。そっちの方はてめぇらでなんとかするにしても、とてもじゃないがあんたらの支援まではな」
　だからといって、今から別の部隊に支援を要請しても、対応は遅くなっちまうだろうし、と続けて、ハーディは真顔で、

「で、一つ提案があるんだがな」
「伺おう」
　レイバーグは即答した。
「ま、難しいことじゃねえよ。見ての通り、この部隊でまともに動けるのは俺一人だ。だからといってこれから別の援軍を呼んでいる時間もない。で、だ。あんたらを支援するのは、俺一人でもかまわないか？」
　なるほど、そういうことか。レイバーグは納得した様子でうなずいた。
「自分でこういうのもなんだが、俺は役に立つぜ。棒術野郎には後れはとっちまったが、それだって白銀の奴がいなけりゃ、どうとでもなってたさ」
「それはまた頼もしいな」
　レイバーグは楽しそうに笑い、唐突にセルマへと目を向けた。
「セルマ、君はどう思うね？」
「私、ですか？」
　セルマは困惑して師を見つめた。
　師の意図がつかめない。自分が意見したところで、それが何かの判断材料になるとも思えなかった。返答に困ってハーディに目を向けると、戦士はこちらに向けて片目を閉じてみせた。その仕草の意味がわからず、セルマは慌ててハーディから目をそらした。
　とりあえず、師の問いに応えなければ。セルマは目の前の戦士に同行してもらうことの利益と不利益とを秤にかけた。
「私は、ハーディさんにだけでも、ついてきてもらったほうがいいと思います。ねえ……白銀の魔法使いが、武術の達人を仲間に加えたというのであれば、私たちだけでは、手に余ってしまうでしょうから」
「こんなじいさんと若い娘だけでは、屈強な兵隊十人をこてんぱんにした棒術使いなんぞにかかれば、一捻りだろうからなあ」
　レイバーグは呵々と笑い、ハーディに目を向けた。
「そういうわけだ。ハーディどの。よろしく頼むぞ」
「ハーディでいいぜ、じいさん。それじゃあ、報告してくるから、ちょっと待っててくれ」
　仮にも魔法使いの里の長を「じいさん」呼ばわりするハーディの態度に、セルマは一言文句をいってやろうと思った。しかし、ハーディはさっさと彼女に背を向け、荷車に横たえられている重傷の男の元へと歩み寄ってしまった。感情の持って行き場をなくしたセルマは師へ顔を向けたが、じいさん呼ばわりされた当の本人は気分を害した様子もなく、ハーディの様子を見ている。
　すぐに師は、セルマの視線に気付いたようだった。彼女へと目を向け、小さく微笑みを浮かべる。
「あまり細かいことに目くじらを立てていては、大成できんぞ」
　自分の考えていることなどお見通しなのだろう。セルマは毒気を抜かれて「はあ」とうなずき、ハーディへと目を向け直した。
　ちょうど荷車の上の男と話しを終えたハーディと、視線がぶつかってしまう。戦士はにやりと笑い、セルマは慌てて視線をそらした。
「隊長が、話しをしたいそうだ。ちょっと来てくれ」
　ハーディが手招きをする。その言葉に応えてレイバーグが歩を進め、セルマもその後に従った。
　間近で見る隊長の痛々しい姿をセルマは正視することができなかったが、レイバーグは動じた様子もみせず、荷車を見下ろしている。
「このような醜態を見せてしまい、申し訳ない」
　隊長は、ようやく聞き取ることができるほどの、かすかな、かすれた声でいった。

「お気になさらずに。相手が悪かったのですよ」
　レイバーグは応えると、隊長に目線を会わせるように、その場に膝を落とした。
「このような形の支援しかできなくて申し訳ないが、ハーディは我々の部隊でも一番の戦士です。きっと、レイバーグ様の力になってくれることでしょう。タフな男ですから、少々荒っぽく使っていただいても構いません」
　ひでえなあ、隊長。ハーディが横から茶々を入れてきたが、荷車の上の男は、それに応えている余裕はなさそうだった。
「どうか、目的を完遂されますことを、お祈りしております」
「お心遣い、痛み入ります。我々の起こした不始末、必ずや解決いたします」
　レイバーグの言葉が終わる前に、隊長は意識を手放してしまっていた。レイバーグは少しの間、片膝をついた姿勢で重傷を負った男を見つめていたが、やがてゆっくりとハーディへと目を向けると、彼を見つめたまま立ち上がった。
「急いで設備の整ったところへ運んでやらんと、手遅れになるぞ」
「わかっている」
　ハーディは短く応えると、思い思いの姿で休憩をしている兵士たちに向かって声をかけた。
「そういうわけだ。俺はこのじいさんたちと一緒に白銀野郎を追うから、お前たちは予定通り、エルン砦へ向かってくれ。隊長のことは、よろしく頼むぞ」
　比較的余力のある人員から、「わかりました。ご武運を」と返事が返ってきた。ハーディは少しの間、のろのろと出発準備を始める部隊の様子を見ていたが、やがてそこから目を離し、レイバーグへと目を向けた。
「時間もあんまりないんだろう？　ぐずぐずしてねえで、さっさと出発しようぜ」
　それが賢明だな。老魔法使いはうなずいた。
「では、出発しようか」
　セルマは「はい」と応え、兵士たちの視線を感じながら、ハーディらの後を追った。

　――こんな男の同行を認めるんじゃなかった。
　歩き始めて数時間で、セルマは自分の思考を激しく後悔することになった。
　後方に見えていた部隊の姿が小さくなったあたりで、ハーディは「よろしくな」とセルマに声をかけ、それから延々と――。
　彼女を質問攻めにしたのである。
　生まれはどこか。なぜ魔法使いになろうと思ったのか。魔法使いの修行は厳しくないのか。
　初めのうちは、「旅の仲間のことを知ることも必要だろうから」と律儀に質問に応えていたセルマだったが、やがて質問の内容が髪の手入れの方法……それでも、「きれいな髪だな」などといわれれば、悪い気がしなかったのは事実だったが……や服の好みなどに言及しはじめたあたりから「何かがおかしい」と感じ始め、それが「恋人はいるのか？」「なら惚れてる男はいないのか？」という質問に至ったところで、ついに彼女の我慢も限界に達した。
「いい加減にしてください！　恋人や好きな人のあるなしが、ねえ……白銀の魔法使いを追うのに何か関係があるっていうんですか？」
「そんなに怒るなよ。美人が台無しだぜ」
　大声を出したものの、ハーディは平然とそれを受け流す。その飄々とした態度がますます癇にさわって、

セルマは少し後ろを歩いている師を振り返った。
「師匠も何かいってやってください。いくら腕が立っても、こんなに緊張感に欠けているのなら、姉さんたちに返り討ちにあうのも当然です」
「まあ、そうかりかりするな、セルマ」
　苦笑混じりにレイバーグはいった。セルマは立ち止まって、師が自分の隣に並ぶのを待つ。数瞬遅れて、ハーディもまた足を止めた。
「戦士というものはな、いざ事が起きれば、常に死と隣り合わせという、極限の状態を強いられる。そのような中、弛められるところで弛めておくというのも、彼らにとっては必要なことなのだよ」
　師の言葉を聞きながら、セルマはハーディとは目を合わせないようにして歩き始めた。ハーディもまた、二人が並ぶのに合わせ、再び足を進める。
「わかってるじゃねえか、じいさん」
「だてに七十年も人間をやっておらんよ」
　呵々と笑う師の声を聞きながら、セルマは口をとがらせて歩いていた。確かに師のいうこともっともだろう。だからといって、他人のことを根ほり葉ほり尋いてもいい、などということにはならないはずだ。
　ひどく歳の離れているはずの二人の男は、妙に馬が合うようで、そんなセルマに気付いているのかいないのか、無駄話が弾んでいる。
　それがハーディの戦歴や、戦場で得た武勲といった話であれば、多少なりともセルマも何か感じるものもあったのだろう。しかしその内容といえば、あそこの町のどの料理がうまいだの、あっちの町のこの宿の看板娘がべっぴんだ、だのといった、本当にどうでもいい話ばかりだった。
　聞き耳を立てずとも耳に入ってくる埒もない言葉の応酬に、セルマは次第にハーディばかりでなく、師に対しても苛々が募ってきた。
　――師匠も師匠だ。緊張感がなさ過ぎる。
　一度火がついてしまうと、今度は思い出される師の言動のあれこれにも不満がわき上がってくる。セルマは二人の言葉をなるべく耳に入れないように努めながら、大股で歩き続けた。
　真横から聞こえてきていた声が少しずつ後方へと下がっていっても、意識的にそれを聞かないようにしている彼女は、それに気付くことはなかった。
　やがて。
「おうい、ちょっと待てや」
　声をかけられて、ようやくセルマは自分がずいぶんと二人から先行してしまっていることに気付いた。立ち止まってふり返り、二人が歩みを早めてこちらへやってくるのを待つ。
「気がはやるのはわかるけどよ、あんまり焦っても、意味はねえぜ」
「わかっていますっ」
　ハーディの言葉につんけんと返し、セルマは再び歩き始めた。
　おおこわ。ハーディはそのようなことはまるで思ってもいないような口調でいうと、
「白銀の魔法使いって、お前の姉貴なんだってな」
　セルマははっと戦士の顔を見た。ハーディは、意を得たとばかりににっと笑った。
「どうなんだ？　姉貴が極悪人で、それを追っかける気分ってのは？」
　セルマは目をそらし、顔を伏せた。
「私は……姉さんがあんな事をしたのは、何か理由があってのことだと思っています」
「そりゃ、なんの理由もなしに魔人の封印を解こうなんざ思いやしねえよな、普通」
　ハーディの指摘に、セルマは返す言葉を持たなかった。沈黙を続けていると、

「お前から見て、その姉貴ってのは、そんなことはしそうにない奴だったんだな？」
　セルマは「はい」と断定した。
「セシルは、白銀の名に恥じない、優秀な生徒だったよ」
　彼女の言葉を引き継ぐように、レイバーグが口を開く。
「性格は、そうだな。物静か、というのが一番しっくりくるかな。魔法使いとして優秀なのはいうまでもないことだが、面倒見もよかったから、若い連中……まあ、あいつも相当に若い部類ではあるがな……には慕われていたよ」
「やさしい仮面の下に、悪魔の顔を隠してました……」
「姉さんはそんな人じゃありません！」
　セルマは語気も荒く、ハーディの言葉を遮った。その勢いに驚いたのか、ハーディは目を丸くして彼女を見つめていたが、やがて小さく息をついて肩をすくめ、
「わかったよ。お前さんがそういうんなら、そうなんだろうさ」
　それだけをいって、口を閉ざした。
　それまで延々としゃべり続けていた男が唐突に無口になってしまうと、それはそれで奇妙な気がする。少し歩いてから、セルマはちらりと戦士に目を向けてみたが、その表情からは、なんの感情も読みとることはできなかった。
　周りが静かになってしまうと、苛々や怒りの感情が、少しずつ落ち着いてくる。
　――だから私はだめなんだ。
　ハーディに対して感情の制御ができなかったことを、ようやく反省できるだけの余裕が出てきた。
　――師匠はきっと、私のことを呆れて見ていたのだろう。
　内心でため息をつき、歩を進める。
　そのまま三人は、しばらく無言のまま歩き続けていたが、やがて唐突にハーディが口を開いた。
「なんだかえらく姉貴にご執心みたいだけど、そんなに姉貴が大切なのか？」
「それは……もちろんです」
　ハーディの方は見ずに応える。
「私が幼い頃に、姉妹二人で魔法使いの里に来てからずっと、姉さんと二人だけで生活していたんです」
「姉貴が親代わり、ってことか。そりゃ執着も湧くわな」
　でもよ。ハーディは少しの間をおいて続けた。
「いつまでも姉さん姉さんじゃ、いつになっても独り立ちはできねえぜ。子供はいつかは親元を離れていくんだ。お前だって、もう立派な大人じゃねえか。どこかで、親離れしなきゃいけない時は来るぜ」
「わかっています」
　セルマは短く応えた。
　そんなことは、今さらいわれるまでもなく、もうとっくにわかっている。
　ハーディの視線がこちらに向いていたが、セルマはそれに気づかないふりをしてうつむいた。
「そのくらいのことは、わかっています」
　セルマはもう一度、同じ言葉を繰り返した。
「なら、いいんだけどよ」
　ハーディは小さく息をついて、「ところでよ、セルマ」
　その声はひどく真剣で、セルマは思わず顔を上げ、ハーディの方へと目を向けた。ハーディが我が意を得たとばかりににやりと笑い、
「お前さんはそんなにべっぴんなんだ。お前の姉貴も、かなりもてたんじゃないのか？」

真面目な話を振っておいて、本当に聞きたかったのはそんなくだらないことだったのか。
セルマの中で、何かが切れる音が聞こえたような気がした。
「そんなこと、私が知っているわけないでしょう！」
セルマは大声で怒鳴り、そして金輪際、この男と何か話をするのはやめてやる、と心に誓った。

　セルマの誓いは破られることのないまま数日が過ぎた。
　道中は順調でこれといった障害もなかったが、それは同時に、白銀の魔法使いセシルの影もまったく感じられない、ということでもあった。
　三人の足取りも自然と速くなってはいたが、先行するセシルとの距離が詰まったという手応えもなければ、逆に広がったという気配もない。
　セルマは、焦燥感にじりじりしている自分を、どうしても抑えることができなかった。
　そんな焦りをわかっているのかいないのか、「腕が立つ」と自称する戦士の無駄口はいっこうに減らず、それもまた彼女を苛立たせる原因にもなっていた。この男を怒鳴りつけてやろうと思い、そのたびになんとか自制する、ということを、もう何度も繰り返している。
　結局この日もなんの収穫もないまま陽が沈み、三人は野営の準備を始めた。道沿いに適当な開けた場所を見つけ、火をおこし、簡素な夕食を取る。
　このまま道のりが順調なら、明日の昼過ぎには南の魔法使いの里へ到着するだろう。
　――私は、こんなところでのんびりと休憩していていいんだろうか。
　セルマは焚き火を見つめながら、姿の見えぬ姉へと思いを馳せた。
　出発時点で、姉との間にはほぼ半日の差があった。その差が詰まりも開きもしていないとして、単純に考えれば、白銀の魔法使い一行は、明日の朝には南の里に到着しているということになる。
　無論、南の里でも備えはしているだろうが、相手が相手である。さらに、めっぽう強いという棒術使いまでが加わっているのだ。里の魔法使いが力を合わせればセシルの魔法に対抗することはできるかもしれないが、彼らの中に武術の心得がある者がいることを期待するのは、あまりにも都合がよすぎるだろう。
　考えれば考えるほどに状況の悪さばかりが浮かび上がってくる。
　こんなところで休憩をしているくらいなら、今は多少無理をしてでも、道を先に行くべきではないのか。
「師匠」
　セルマは意を決して、師へと顔を向けた。自分でも思っていた以上に深刻な声が出る。その声に感じるものがあったのか、レイバーグもまた真面目な視線をセルマへと返した。
「南の里も近いことですし、ここでこうしているよりも、道を先へ進んだ方がいいのではないですか？」
「俺も、嬢ちゃんの意見に賛成だな」
　炎の脇で剣の手入れをしていたハーディが口を開いた。
「当座の目的地は近いんだ。ちっと強行軍になるが、対応が遅れるよりはましだと思うぜ」
　ふむ、と声を返して、レイバーグはハーディ、そしてセルマへと目を向けていった。
「私としては、このまま無理をして先に進んで、全力を出すことができないような状態でセシルと事を構えるのは得策ではないと思っているのだがね」
「それも一理あるけどな」
　ハーディは応えて、剣から目を離した。
「知ってるか、じいさん。戦いってのはな、早い方が有利なんだよ。戦争をのんびりやって勝てた国は、世界中探してもどこにもねえんだぜ」
「そのくらい、私だってわかっとるわい」
　馬鹿にするな、といった調子で、老魔法使いは鼻を鳴らした。
「南の里にだって有能な者はいる。確かに魔力ではセシルに劣るかもしれんが、私たちが到着するまで、あいつを押さえておけないことはないはずだ」
「でも姉さんには、腕の立つ棒術使いが仲間になっているんですよね？　里の魔法使いは、姉さんの魔法を防ぐことはできても、棒で殴られたらひとたまりもないのでは」

　セルマの指摘に、珍しく老魔法使いは黙り込んだ。
　炎がはぜる音だけが響く中、ややあってから、レイバーグはゆっくりと口を開いた。
「私も、それは考えていないわけではないのだよ、セルマ。……ただね。ハーディには『甘い』といわれるかもしれんが、私は、信じたいのだよ」
「信じるって、何を？」
　問うたのは、老魔法使いの言葉で引き合いに出された当人だった。
「セシルは、何かやむにやまれぬ事情があって宝珠を奪わざるを得なくなってしまっただけで、本当は、なんとかして私たちに止めてもらいたいと思っているのではないか、とね」
「それで、俺たちが里に着くまで、白銀は里に近づくことはないだろうってか？　甘えな」
　ハーディはレイバーグの予想を裏切らない言葉で締めくくった。老魔法使いは「確かに、自分でも大甘だと思っておるよ」と小さな苦笑を返し、大きく息をついた。
「今回は、君たちの意見に従うとしよう。出発の準備を」
「はい」
　セルマはうなずき、立ち上がった。
　準備といったところで、さしてすることもない。火を消して、それほど多くはない荷物をまとめ、三人は夜の街道へ戻った。
　空を見上げれば月は明るく、整備された道を歩くだけならば不便はない。しかし、それでは不十分と感じたのだろう。レイバーグの指示で、セルマは杖に明かりを灯し、先頭に立って歩き始めた。
　一行の足は、自然、速くなっていった。そうして、一時間ほども歩いた頃。
「おい、ありゃなんだ？」
　最初にそれに気づいたのは、ハーディだった。セルマの脇をすり抜け、魔法使いの里へと通じる道の向こうを凝視する。セルマは手元の明かりをそちらの方へ向けてみたが、ハーディが発見したものを見つけることはできなかった。
「嬢ちゃん、その光を落とすことはできねえか？　明るすぎてわからねえ」
　ハーディが道の先を見つめながらいった。その意図を察して、セルマは魔法の光量を落とした。周囲を煌々と照らしていた白い光は、申し訳程度に彼女の周辺に影を落とすだけになる。
　セルマはもう一度ハーディが見ている方に目を向け、ようやく、戦士がいっていた何かの姿を確認した。
　恐らくは、今、彼女が杖に灯している光と同じ種類のものだろう。松明やカンテラの炎とはまったく違う白い光が一つ、道の向こうからこちらへとやってきている。
　南からやってくる魔法の光。
　それが意味するものに気づいて、セルマは師を呼んで振り返った。
「どうやら、私の考えが甘かったようだな」
　レイバーグはため息混じりにうなずくと、「行こう。君たちの予想通りなら、緊急事態のはずだ」
　師の言葉を待たずに、セルマは駆け出した。すぐにハーディがそれに続き、それから少し遅れて老魔法使いも走る。
　南からやってくる光もまた、セルマたちに気づいたようだった。こちらへ向かってくる速度が上がり、二人はほどなくして、光の持ち主と合流した。
　セルマとそう歳の変わらない男。相当に急いでいたのだろう。着衣は乱れ、呼吸は荒く、表情には疲労が色濃くにじんでいる。
「白銀……の……魔法使い……が……」
　男はやっとの事で、といった様子で切れ切れに声を出した。

「お前らの里を襲っているんだな？」
　後を引き継ぐようにハーディが問うと、男はぜいぜいといいながらうなずいた。
「白銀の奴は、他に誰か連れていたか？　奴一人か、もう一人か、もっといたのか？」
　男は切れ切れに、もう一人、棒を武器に使う男がいた、と応えた。
　少し遅れて、ようやくレイバーグが到着した。セルマが南の里の魔法使いの言葉をそのまま伝えると、師は大きく舌打ちした。
「やはり、私の考えが甘かった、ということか」
「今さら後悔したって仕方がねえさ。とりあえず、今できることをやる以外にねえだろ」
　呟きを聞きつけたのか、ハーディがレイバーグを見る。
「じいさんの体力じゃ、里に着くまで時間がかかるだろう。とりあえず俺だけでも、先に行こう」
「そうしてくれるか」
　レイバーグがうなずく。ハーディは、今度はセルマへと目を向けた。
「嬢ちゃんは……」
「私も行きます」
　セルマはハーディの言葉を遮った。体力的に明らかに劣る自分がいては、戦士の足を引っ張ってしまうことは明白である。けれども、ここで師と共に押っ取り刀で南の里へ向かえば、白銀の魔法使い……姉とまみえる機会を失ってしまう可能性もある。
　もう一度姉と直接会って話をして、その真意を問いたかった。
　じっとハーディを見つめる。
　ハーディは目を丸くしてセルマを見ていたが、やがてにやりと笑った。
「ついてこれなかったら置いてくぜ。あとで泣き言をいっても知らねえからな」
「わかっています」
　セルマは決然とうなずいた。
「よし、よくいった。急ぐぞ、遅れるなよ」
　ハーディはそれだけをいうと、月明かりの照らす道を南へと駆け出し、セルマもそれに続いた。

事態は、決していいとはいえないようだった。

　壮絶な魔法戦があったのだろう。里の入り口は地面のあちこちがえぐれ、門は焼かれてそのほとんどが炭になっている。その門のそばには、数人の男が骸となって倒れていた。
　里の奥で、真っ赤な光が閃いた。続いて腹の底にまで響いてくるような轟音が聞こえ、同時に地面がわずかに揺れる。
　その地響きも収まらぬうちに、今度は青い閃光が立て続けに二度起きた。悲鳴とおぼしき声がいくつも、青い光に重なって、セルマたちのところへ届く。
「ハーディさん！」
「嬢ちゃん！」
　二人は互いを呼び合い、同時にそちらへ駆け出した。状況を考えれば、その閃光と轟音、そして悲鳴の源は明らかである。
　いくらも走らぬうちに、二人は、そこにたどり着いていた。
　位置的には、里のちょうど中央になるだろうか。少し開けた広場。
　広場のそこここに魔法の明かりが煌々と輝き、周辺は真昼と変わらないほどの光量があった。
　そしてその中央に、二人の人間が、セルマたちに背を向けた格好で立っている。
　一人は女。細身の身体を群青のローブで包み、その手には白銀色に輝く杖が握られている。
　一人は男。セルマの背丈ほどもありそうな、黒光りする金属製の棒を右手に持ち、短衣を身にまとっている。
　男の体格は、決していいとはいえない。身長こそ高いものの、その身体は細身で、隣に立っている女と変わり映えがないように見える。短衣から覗いている腕や足も、太さならばハーディの方が圧倒的だった。
　だが、その男はハーディら訓練された兵士十人を相手に、圧倒的な力を見せつけたのだ。その外見に油断すると、手痛い目を見ることになるのだろう。
　男の持つ棒は単純な黒色ではなく、光を反射すると、わずかに濃い緑色が混じって見えた。
　その二人の向こう側には、十人を超す魔法使いが決死の形相で杖を構えている。そしてその後方には大きな建物が、この場の混乱など無関係な顔をしてそびえていた。
「姉さん！」
　セルマは、大声で姉を呼ばわった。
　セシルはゆるゆると首を後ろに向け、小さく目を見開いた。その口が「セルマ」と動いたのを、セルマは見逃すことはなかった。
　白銀の魔女は、隣に立っている男に何事かをささやくと、身体をセルマの方へと向ける。
「思っていたよりも早かったのね。まさか、あなたが来るとは思わなかったわ」
　姉は小さく微笑んだ。その口調は、やはりセルマの知っている姉以外の何ものでもない。セルマは胸の中に熱いものがわき上がってくるのを押さえることができなかった。
「姉さん！」
　セルマはもう一度、姉を呼んだ。
「もうこんなことはやめて。姉さんが何をしたいのかは知らないけど、こんなことをしてまでしなければい

けないことなの？」
　セルマの問いに、セシルは小さく微笑んだ。
「そうね、セルマ。あなたから見れば、私のしようとしていることは、こんなにたくさんの人の命を奪ってまで、することではないのかもしれないわね」
「わかってんじゃねえか、白銀」
　姉の言葉にセルマは何かを応えようとしたが、それよりも早く、隣にいたハーディが口を開いた。
「魔人サイフェルト、つったよなあ？　二千年も昔の、お前たち魔法使いがもっと力を持っていた時にも手に負えなかったような代物なんだろ？　お前さんがどんだけ強い魔力を持っているかは知らねえが、何人も、何十人も人を殺してまでそいつを復活させて、どうするつもりなんだ？」
「あなたには、わからないでしょうね」
　ハーディの長口上にも、セシルはさして感銘を受けた様子ではなかった。だが、戦士もどうやらその程度の言葉で白銀の魔女の気持ちをどうこうできる、などとは思っていないようだった。
「ああ、わからねえね」
　ハーディはいい捨てると、腰の剣を抜いた。
「俺がわかるのは、魔人なんてモンが復活したら、えらいことが起きるだろう、ってくらいさ。……だから、力ずくでも止めさせてもらうぜ」
　ハーディは厳かに宣言し、剣を構える。輝く刃を目にしても、白銀の魔女の様子は変わらなかった。
「やめなさい。あなたの剣が届く前に、あなたは私の魔法で塵になっているでしょう」
「試してみるかい？」
　挑発するように、ハーディが問う。セシルは無言のまま、ゆっくりと杖を構えた。戦士の目つきが鋭くなり、その眼光が白銀の魔女を射抜く。
　対する魔法使いは、気の弱い者ならばそれだけで卒倒してしまいそうな戦士の眼光を、涼やかな、けれども一分の隙もない表情で受け止めていた。ハーディの筋肉は張りつめ、セシルの目は、油断なく戦士の動きを追っている。
　ごくわずかなきっかけで崩れてしまいそうな均衡の中、セルマはあらん限りの声を振り絞った。
「姉さん、お願いだからもうやめて！　もうすぐ師匠もここに来るわ。姉さんは本当に、この里の魔法使い全員と、師匠を相手にして勝てるつもりでいるの？　もし勝ったとして、その後はどうするの？　魔人を復活させて、それで何がしたいの？　そんなことをしたって、なんの意味もないじゃない！」
　その剣幕に気圧されたのか、白銀の魔女にわずかな隙ができる。それは戦士にとっては絶好の機会のはずだったが、しかしハーディは動かなかった。
　セシルは油断なく杖を構えたまま、実妹へと目を向けた。
「あなたにいわなかったかしら、セルマ。もう私は、後戻りのできないところへ足を踏み入れてしまったの。あとはもう、前に進むしかないのよ」
　白銀の魔女はうっすらと微笑むと、隣に立つ棒術使いに短く声をかけた。棒術使いが、建物の守備隊に向かって駆け出す。魔法使いたちの間に動揺が走るが、ハーディは手をこまねいてそれを見ていることはしなかった。
「白銀は任せたぞ！」
　セルマに声をかけ、棒術使いを追って駆け出す。
　突然に動き出した事態に、彼女はわずかな間、逡巡した。
　ハーディに反応したセシルが魔法を放つ。魔法はわずかに狙いを逸れ、戦士の足下の土を派手に吹き飛ばした。戦士はそれには頓着せずに、棒術使いとの間合いを詰める。

ようやく、セルマは自身の思いを振り切った。
棒術使いを援護するためだろう、白銀の魔女は戦士へ向けて杖をかざしたが、それよりも一瞬だけ早く、セルマの魔法が発現する。
杖の先から、白い光の帯が放たれた。光の帯はセシルの手足にからみつき、その自由を奪う。しかし、白銀の魔女はその名に恥じぬ魔力をもって、セルマの放った戒めを粉砕した。続けざまにセシルが杖を振るうと、セルマの足下の土が爆ぜる。彼女はそれに足を取られ、数歩、後ずさった。
セルマへの攻撃でできた隙を、里の魔法使いたちは見逃さなかった。いくつもの魔法がセシルをめがけて放たれる。しかし、その攻撃は予期していたのか、白銀の魔女が杖を一振りすると、里の魔法使いたちの放った魔法は、見えない壁に受け止められて消滅した。
戦いは、ハーディと棒術使い、そして里の魔法使いたちと白銀の魔女という、二つの組み合わせとなった。戦士と棒術使いは激しい戦いを繰り広げ、さしものセシルも、魔力に劣るとはいえ、数を頼みにした魔法使いたちの波状攻撃に防戦を強いられる。
状況は五分と五分のまま、互いに一歩も譲らぬ激しい戦いが続いた。しかし。
「うおっ」
ハーディの悲鳴が上がる。長さで勝る棒術使いの武器が、戦士の右腕を打擲した。ハーディは剣を取り落とし、それと見るや、棒術使いは手近なところにいた魔法使いの一人を問答無用で殴り倒す。重い金属の棒を胴に打ち付けられた魔法使いは、悲鳴を上げる間もなくその場に倒れ伏した。
白銀の魔女に抗する人員が一人減ったことで、魔法使い同士の争いも、また均衡が破れることとなった。白銀の杖が火を噴き、一人の男が火だるまになる。さらに別の魔法使いを棒術使いが打ちのめすと、たちまちのうちに攻守が逆転した。
それまで棒術使いと互角の戦いを繰り広げていたハーディは、先の一撃で右腕が使えなくなったようだった。左手に剣を持ち替えて、棒術使いへと躍りかかるが、明らかに先ほどまでとは動きが違っている。
棒術使いは戦士をいいように翻弄し、隙を見ては里の魔法使いへと致命的な一撃を加えていく。
セシルの魔法と棒術使いの棒。わずか二人の人間によって、十人を超す魔法使いたちがばたばたと倒れていく。
――あの棒術使いだけでも止めなければ。
武術の達人を相手に、学究にいそしむ魔法使いたちではいかにも分が悪い。頼みの綱のハーディも負傷してしまっていては、不利はなおさらである。しかし、何らかの方法で棒術使いを牽制できれば、負傷したハーディでも互角に渡り合えるのではないか。
自分が三流の魔法使いであることは重々承知している。だが、魔法が使えない相手であれば、少しは役に立つこともできるだろう。
セルマは、姉を相手に苦戦を続けている魔法使いたちからあえて目をそらし、右腕を使えないままでも果敢に棒術使いへと挑みかかっているハーディへと目を向けた。
利き腕が使えないせいだろう。ハーディは、棒術使いの長いリーチの前に、近づくこともできなくなっている。
セルマはそちらへ向けて駆け出した。
「ハーディさん！」
声をかけ、同時に杖を振るって魔法を発動させる。姉の身体を数瞬だけ縛った魔法の帯が、今度は棒術使いへと向かう。
魔法が棒術使いをとらえようとしたその瞬間。棒術使いは、襲いくる魔法をその手に持つ棒で両断した。
魔力の帯はちょうど中央から二つに分かれ、一瞬で消え去る。

――そんな馬鹿な。
セルマは我が目を疑った。
魔法消去。特に高度なものに属する魔法と同じことを、この男は棒でやったというのか。
もう一度、セルマは同じ魔法を棒術使いに向けたが、棒術使いはまたもそれを棒でなぎ払った。
あの棒には、高度な魔法が封じ込められてでもいるのだろうか。
考えている暇などなかった。二度の魔法を受けたことで、セルマを明らかな障害と認識したのだろう。棒術使いは彼女へ目を向け、こちらへ向かって駆け出してきた。
セルマにはなすすべもなかった。男は見る間に接近し、彼女の目の前で金属棒を振るう。セルマは本能的に手足を縮めて身を守ろうとしたが、棒術使いの棒が、無慈悲に彼女の左半身へと打ち付けられた。
激しい衝撃。セルマはそのまま右半身から地面に激突した。
「嬢ちゃん！」
ハーディの声が聞こえる。意識を失わなかったのは我ながら立派だと思ったが、次の瞬間に左腕を襲ってきた激痛に、セルマはたまらず声を上げた。
彼女の戦闘力を奪うのはそれで十分とでも思ったのか、棒術使いはすぐに踵を返し、未だ激しい戦いを繰り広げている魔法使いたちの方へと駆け出す。セルマは痛みをこらえながらどうにか立ち上がったが、腕が折れでもしたのか、激痛のため、腕を動かすことはおろか、そこから歩くことすらままならない。無論、魔法を使うどころではなかった。
――このままでは、姉さんが……。
戦いは、攻守が決まって一方的になりつつあった。里の魔法使いたちはばたばたと倒れ、その中を白銀の魔法使いと棒術使いとが、悠々と大きな建物へと向かっていく。
――また、何もできずに姉さんを見送るだけなの？
己の無力は十分承知していたが、今度ばかりはそれが恨めしい。
去りゆく姉の姿を歯がみしながら見つめていた、その時。
「しっかりしてください。無理に動かないで」
まだ若い……というよりは、むしろ幼いといった方が正しいか……女の声が、セルマの後方から聞こえた。
痛みをこらえながら振り返ると、そこには声の印象の通りの少女が立っていた。
歳は、どれほど大きく見ても十四、五歳といったところだろう。身長こそ、小柄なセルマよりも頭半分ほど高いものの、その顔にはまだあどけなさが残っている。くりくりとした大きな目に、栗色の、長く伸ばしたふわふわの巻き毛。その手には魔法使いの証である杖が握られていたが、この少女には、それがひどく不似合いなものに見えた。
少女はにこりと微笑むと、セルマの左腕に杖の先を当てた。少女が大きく息を吐くと、杖から淡い黄色の光が放たれる。
同時に、激痛の走っていた左腕から、瞬く間に痛みが引いていった。
――治療術師。
その存在はセルマも知っていたし、この南の里は、治療術師をはじめとした、特別な能力を持つ魔法使いを育てている場所である、という知識もあった。が、実際にそのような魔法に接するのは初めてだった。
ほどなくして、セルマの腕の痛みは完全に引いた。
「ありがとう」
少女に声をかけ、建物へと歩み寄っていく姉たちに目をやる。セルマは二人を追おうとしたが、少女はその肩をつかんで、彼女を制した。

　目を向けると、少女はゆっくりと首を振った。
「もうすぐ、レイバーグ師がいらっしゃいます。白銀の魔法使いを追うのは、それからになさった方がいいと思います」
「師匠が？」
　はい、とうなずく少女の顔を見て、セルマはその言葉に従うことにした。そうしている間にも、セシルと棒術使いは、必死の抵抗を続ける里の魔法使いを軽々と退けていく。
　やがて二人に抵抗できる者はいなくなった。ひどく静かになった広場を、二人は悠然と建物へと向かう。
　――姉さん。
　大きく息をついて、少女に目を向ける。少女はセルマの意を察したのか、小さくうなずいた。
「あちらの戦士の方も、治療が必要ですね？」
　ええ、お願い、とうなずくと、少女はハーディの元へと駆けていった。もう一度大きく息をついて、少女のあとを、ゆっくりとついていく。

　少女がハーディの治療を始めると、わずかに遅れてレイバーグが姿を現した。
「遅えぞ、爺さん」
「すまんな、これでもかなり急いだつもりだったのだがな」
　ハーディの憎まれ口に、レイバーグは素直に謝罪の言葉を出した。
「で、こちらのお嬢さんは？」
「治療術師のエリィと申します。レイバーグ様のお供を仰せつかっています」
　老魔術師の問いに、少女ははきはきと応えた。ハーディがひゅうと口笛を吹き、レイバーグは小さく笑った。
「こいつはまた、ずいぶんと思い切った人選じゃねえか。お嬢ちゃん、ほんとに大丈夫なのか？」
　ハーディの言葉に気を悪くした様子もなく、少女はにこにこしながら戦士に応えた。
「こう見えても、治療術には自信があるんですよ」
　確かに、魔法使いの能力に年齢はそれほど関係はない。少女の治療術に助けられたセルマは、彼女のその能力の高さがはっきりとわかっていた。
　――少なくとも、私なんかよりはずっと彼女のほうが役に立つだろう。
　セルマは自嘲気味に思った。
　ほどなくして、ハーディの治療が終わった。戦士は右手を握ったり開いたりしながら、エリィに目を向ける。
「こいつは大したもんだ。嬢ちゃんが百人もいれば、ひっくり返っていた負け戦なんて、そこら中にごろごろしてるぜ」
「あいにく、治療術師はなかなかに貴重な存在なのだよ。それに私たちは、組織だって動くことは禁じられているからね」
　ハーディの言葉に応えて、レイバーグは一同を見渡した。
「準備ができたのなら、出発しよう。これで白銀を止めることができなかったら、大変なことになってしまうからね」
　銘々がレイバーグの言葉にうなずき、四人は白銀の魔女が入っていった大きな建物へと向かった。
　建物は、それがまるまる一つの部屋になっている、大きな空間だった。ハーディが驚きの声を上げ、話にしか聞いたことのなかった魔法転移装置を初めて目にしたセルマもまた、好奇心を隠すことができない。
　部屋は二十メートル四方はあるだろうか。その中央には直径五メートルほどの複雑な魔法陣が描かれ、そのすぐそばには木製の台に乗せられた石板が置かれている。
　部屋の壁と床は、入り口を除いたすべての面に、石とも金属ともつかない板材がはめ込まれていた。板材は、今は失われて久しい、高度な魔法によって作られたもののはずである。
　そして部屋の四隅と、その対角線を結んだ線上にある、魔法陣に面した四カ所に、これも高度な魔法によって作られたものとすぐにわかる、濃い緑色をした直径五十センチメートルほどの石柱が立てられている。この石柱一個を作るだけでも、現代の魔法使いたちでは、途方もない労力が必要になるだろう。
　きょろきょろと周囲を見回すセルマとは対照的に、レイバーグはまっすぐに部屋の中央の魔法陣を目指して歩いていった。師の様子に、自分たちが何を優先すべきなのかを思い出し、セルマは小走りに師の元へと向かう。そんなセルマに気づいてか、エリィとハーディが、少し遅れて続いた。
　一足先に魔法陣に到着したレイバーグは、真っ先にその近くに置かれている石板へと目を向け、ひどく渋い表情を浮かべた。
「セシルめ、考えおったわい」
　セルマたちの到着を待って、レイバーグは三人へと目を向けた。

「どうやら、私たちの予想は、全員が半分ずつ当たりだったようだぞ、セルマ」
「どういうことですか？」
　レイバーグは石板をとんとんと手で叩き、
「魔法転移装置はこの石板で操作するのだがね。行き先はどこになっていると思うね？」
「西の魔法使いの里じゃねえのか？　宝珠の片割れがあるっていう」
　問いに答えたのはハーディだった。
　セルマも最初は同じことを考えた。しかし、師がそのような問いをしたということは、姉が向かった先は別の場所だということではないのだろうか。
　セルマは改めて思考を巡らせた。
「予想は全員が半分ずつ当たり」だったという師の言葉。そして、姉の行き先は、西の魔法使いの里ではなかったという事実。
「北の魔法使いの里ですか？」
「その通りだ。あやつめ、里の警戒が厳しくなるのを見越して、直接里の中へ転移先を設定しおった。はっきりとはわからんが、恐らくは北の里の秘宝が安置されている部屋へ、直接乗り込んだのだろう」
　何から何までやってくれるわい。レイバーグは忌々しげに呟いた。
「このまま同じ場所に転移すれば、うまくいけばセシルたちの目の前へ直接出られるかもしれん。急ぐぞ」
　レイバーグはセルマたちに魔法陣の中に入るよう指示すると、石板に向けて杖をかざした。ほどなくして、石板が淡い緑色の光を放ち始める。光が徐々に強くなり、それに連動して、魔法陣の近くにあった四本の石柱が、そして部屋の四隅の石柱が、それぞれ光を放ち始める。
　光は部屋の壁へと伝播し、やがて部屋は緑色の輝きに包まれた。視界に入るのは緑色ばかりとなり、セルマは一切の視界を失った。
「ゆくぞ。目の前でセシルが待ちかまえているかもしれん。油断するでないぞ」
　師の言葉が聞こえた、次の瞬間。
　部屋に満ちていた緑色の光が一瞬にして引くと、セルマの目の前の景色は、先ほどまで自分たちがいた部屋とは、まったく違う場所になっていた。
　辺りを見回すと、すぐそばにはレイバーグとエリィ。そして後方にはハーディ。皆が立っている位置は、先ほどまでとまったく変わりない。
　そこは……。
　やはり、部屋のようだった。転移魔法装置の部屋よりも少々狭いものの、軽い運動をするには十分な広さを持っている。
　一体、どういう建物の、どういう部屋なのだろう。部屋は壁も床もすべて石造りで、窓らしきものは一つもない。
　それでも部屋の中が明るいのは、天井から魔法の光が降ってきているためだった。
　セルマたちが立っているのは、部屋の中央だった。彼女の左手には、部屋の出口らしき扉。そして、右手には……。
　セルマの右手。部屋の一番奥に、まるで祭壇のように設えられた一角があった。そこには何かを安置する台のようなものがあったが、その台の上には、今は何も乗っていない。
　祭壇のすぐそばに、二人の男女が立っていた。
　一人は、セルマの背丈ほどもある長さの、黒光りする金属の棒を持った男。
　そしてもう一人。
　その女の足下には、白銀色に輝く杖が、無造作に転がっていた。

　女は杖を持つ代わりに、右手に白い籠手をはめていた。籠手は女の上腕の中程から掌までをすっぽりと覆い、そしてその掌には、淡い青色の光を放つ球体が握られている。
「意外と、早いお着きでしたね」
　静かに、白銀の魔女はいった。その表情は落ち着き、どのような感情もうかがうことはできない。
「そうのんびりもしておられんのでな」
　老魔法使いはゆっくりと言葉を返した。
「どうかね、セシル。白銀の名を与えられた聡明な君のことだ。そろそろそのような無体な真似をやめる決心をしてくれる頃だと思うのだがね」
　白銀の魔女は、まっすぐに師の顔を見つめていた。
「私を説得しようというのなら無駄ですよ、師匠。ついさっきも、妹と、そしてそこにいる戦士さんとも話をして、決裂したばかりですから」
「そうか、それは残念だよ、セシル。では残念だが、私は君を力ずくでも止めねばならん」
　残念、という言葉を、レイバーグは繰り返した。だが、師のその言葉を聞いても、白銀の魔女の落ち着いた態度は、変わることはなかった。
「無駄ですよ。いかに師匠が強い魔力の持ち主でも、オムニの宝珠とマークの籠手を得た私には、敵わないでしょう」
　セシルは、宝珠を持った腕を大きく振った。瞬間、巨大な火炎がその腕から吹き出し、セルマたちへと襲いかかる。しかしレイバーグが悠然と杖を振ると、その炎は一瞬にして消え去った。
「何度も教えただろう、セシル。いたずらに力を誇示するばかりが魔法ではない。そのような魔法を使う者は、三流の魔法使いだと」
　レイバーグは、白銀の魔法使いに油断なく目を向けながら、声をひそめた。
「セルマ、エリィ。君たちはこの部屋を出て、里の魔法使いたちに助けを求めるのだ。残念だが、私一人では長く持ちそうにない」
「わかりました」
　セルマとエリィは同時にうなずいた。二人が駆け出すと、それを追うように棒術使いも走り出す。同時に、ハーディもまた動きだした。
「さっきはよくもやってくれやがったな。倍にして返してやるぜ！」
　ハーディは鼻息も荒く棒術使いの前に立ちふさがり、棒術使いはやむなくといった様子で戦士へと向き直る。それだけを確認して、セルマはエリィとともに部屋を飛び出した。
　彼女たちがいた部屋は、地下室だった。扉を出たところからまっすぐに、人が三、四人は並んで歩けるほどの広さの石造りの通路が続き、その先には上りの階段がある。二人は同時にそちらへ駆け出し、一足飛びに階段を駆け上がった。
　階段を上りきったところには、木製の扉があった。先頭に立っていたセルマが扉を開けようとしたが、扉には外から鍵がかけてあるのか、がたがたと動きはするものの、開く気配がない。様子を見ていたエリィがそこに加わり、二人で扉を動かしてみたが、やはり扉は開こうとはしなかった。
『そこに誰かいるのか？』
　扉の外から、くぐもった男の声が聞こえてきた。外に誰かがいるらしい。セルマは扉を力一杯叩くと、あらん限りの声を出した。
「開けてください！　中に白銀の魔法使いがいるんです！」
　扉の外が騒がしくなるのがわかった。ほどなくして外側からがたがたという音が聞こえ、扉がきしみながら開く。

　そこから顔を覗かせたのは、精悍な顔つきの、三十そこそこの男だった。奥には他に数人の男がいて、セルマが事情を話すと、男は青くなって他の者に指示を下した。一人が里長のところへ、もう一人は援軍を呼びに走っていったが、それを待たずに、男はセルマたちに「ここにいて、あとから来る魔法使いたちと一緒に来るんだ」といい置いて、地下へと降りていった。
　残されたセルマとエリィは顔を見合わせ、わずかに迷ったのち、セルマは再び地下への階段を駆け下りていった。
　その後ろから、エリィが続く足音が聞こえる。
　そして、セルマが階段を下りきった、その瞬間だった。
　通路を進んでいた魔法使いたちを、真っ白な光が襲った。先を急いでいた男たちは、その不意打ちに対して何一つ抵抗ができないまま、塵一つ残さずに消滅する。
　その光が徐々に収束していく中、純白の光をかき分けるようにして、二つの人影が現れた。

　先頭に立っているのは、棒術使いだった。そして、その後に続いて、白い籠手をはめた魔法使い。
　セルマはとっさに二人の進路をふさぐように立って杖を構えた。
　しかし、先ほどの白い光が襲ってくればひとたまりもなかったろうし、そもそもセシルの前を走る棒術使いにすら、彼女は一撃でねじ伏せられてしまうだろう。
　無駄と知りつつ、セルマは棒術使いに向けて魔法を放った。彼女の杖に魔力が収束し、それは数本の光の矢となって棒術使いを襲う。
　棒術使いは飛来する魔法の矢を、その手に持つ棒でなぎ払った。後ろにいたエリィが「うそ？　魔法を止めるなんて」と驚愕の声を出すのが、奇妙なくらい明瞭に聞こえる。
　棒術使いは瞬く間にセルマの真正面まで迫ってきた。
「どけ」
　棒術使いは短くいうと、セルマに向けて棒を振るう。とっさにセルマは杖を両手で持ち、その一撃を受け止めた。金属と金属のぶつかるいやな音がして、火花が散る。
　しかし、セルマにできたのはそこまでだった。力負けした彼女はそのまま横に吹き飛ばされ、通路の壁にしたたかに背中を打ち付けた。強烈な衝撃に肺の空気が押し出され、セルマは杖を取り落とし、その場にくずおれて咳き込んだ。後方からエリィの悲鳴も聞こえたが、どうすることもできない。
　ようやくのことで立ち上がり、エリィへと目を向ける。
　治療術師の少女は、無事のようだった。棒術使いから直接打撃を受けたのではなく、悲鳴を上げてしゃがみ込むなりなんなりして、二人をやり過ごしたのだろう。それはそれで賢明なやり方だった。
　エリィはすでに立ち上がって、こちらへと駆け寄ってきている。
「大丈夫ですか？」
「ええ、なんとか」
　セルマは咳き込みながら応え、足下にある杖を拾おうとして、その動きを止めた。
　彼女の杖が……姉から譲ってもらった杖が、棒術使いの打撃を受けた部分から、へし折れてしまっている。
　高度な魔法によって作られる魔法使いの杖は、基本的には壊れることはない。通常の方法では、切断することはおろか、どのような力を加えようとも曲げることすらできない……はずだった。
　それが、男の棒の一撃を受けただけで。
　すぐにエリィも、セルマの杖の惨状に気づいた。
「なんですかそれ？　なんで杖が折れちゃってるんですか？」

「そんなの、私の方が知りたいわ」
　セルマはため息をつきながら、二つに折れてしまった杖を拾い上げた。試しに魔法を使ってみたが、やはり折れてしまった杖では、魔法を発現させることはできない。
　――これ、どうしよう……。
　途方に暮れていると、通路の奥の方から「おおい」という声が聞こえた。見ると、レイバーグとハーディが駆けて来ている。
「師匠、無事でしたか」
「なんとかな」
「まったく、ひでえ目にあったぜ」
　セルマの問いに、師とハーディは思い思いの言葉を返した。
「白銀はどうなった？」
「魔法使い何人かを消滅させて、上へ。追おうと思ったのですが……」
　セルマは応えて、二本になってしまった自分の杖に目を向けた。その視線を追ったレイバーグとハーディは同時に声を出した。
「これはまた……」
「なんだそれ？」
「あの棒術使いにやられました」
　セルマはため息混じりに応えた。
「すげえな、その杖って、折れるものなんだな」
「普通は折れないんですけどね」
　ハーディの感嘆の声に、セルマは暗澹と応える。
「まあ、昔からあいつのやることは非常識だったからな」
　二人のやりとりに、レイバーグが楽しそうに応えた。それを聞いて、セルマは師へと目を向けた。師の口ぶりは、明らかにあの棒術使いを知っているようだった。
「じいさん、あの棒術使いのこと、知ってるのか？」
「まあな。詳しいことはあとで話そう」
　同じことを思ったらしいハーディの問いを、レイバーグはさらりとかわした。
「それよりも、セルマに代わりの杖が必要だな」
　老魔法使いは腰のベルトに挟んでいた一本の杖を手に取った。
「この杖を使うといい」
「それは……」
　セルマは絶句して師の手の中の杖を見た。見覚えがある……どころの話ではない。その杖は、つい先ほどまで彼女の姉の手の中にあった、白銀の輝きを放つ杖だったのだ。
　セルマはもう一度、まじまじとその杖を見つめた。しかし、どれほど見つめたところで、その杖の色が褪せることはなかった。
「私には……その杖を持つ資格はありません」
　自分の魔力が、姉に及ばないどころか三流であることは十分すぎるくらいにわかっている。そんな自分がその杖を持つというのは、もはや「白銀の魔法使い」の名への冒涜である。
　いかに選択の余地がなかろうと、それを手にしてはいけない、というくらいの分別はセルマにもあった。
「それでしたら師匠がその杖を持って、私が師匠の杖を……」
「残念だが、セルマ。私の杖は特別製でね。おいそれと持ち替えることができないのだよ。仮に私がその杖

を持って、君に私の杖を渡しても、君はまともに魔法を使うことはできないだろう」
　セルマは今度はエリィに目を向けたが、エリィは「とんでもない！」と杖を持っていない左手をぶんぶんと振った。
「セルマさんにそれを持つ資格がないのなら、私なんかそれを見ることだって畏れ多いですよ」
　力一杯拒否されてしまい、セルマはやむなく、師の持つ白銀の杖へと目を向け直した。
「どのみち、当面は杖が必要なのだ。あとで余裕ができたら新しい杖を君に見繕ってあげよう。それまでの辛抱だと思って、この杖を使いなさい」
「別にいいじゃねえか、持ってる杖で人間が変わるわけじゃねえんだし。それに、急がねえとまたあいつらに逃げられちまうぞ」
　レイバーグに諭され、そしてハーディに急かされ。
　セルマはやむなく、その杖へと手を伸ばした。
「本当に、あとで私にふさわしい杖を探してくださいますね」
「約束しよう」
　師の言葉を聞いて、セルマは白銀の杖を握りしめた。レイバーグは満足そうにうなずいて手を離し、
「では、白銀の魔法使いを追うぞ」
　宣言すると、通路を出口へ向かって駆け出した。

　セシルが奪った籠手が安置されていたのは、北の魔法使いの里の奥まったところにある小さな建物だった。
　セルマたちが外に出ると、ここもやはり、たった二人の闖入者を相手に大混乱に陥いっていた。恐らくは里からの脱出を目指しているのだろう。騒ぎの中心は、徐々にセルマたちから遠ざかっている。
「ゆくぞ」
　レイバーグの声で、四人は騒ぎが起きている方へと向かって駆け出した。直後、少し離れたところから、豪快な火柱が巻き起こる。火柱の熱風はセルマたちにも押し寄せ、四人は立ち止まって近くの家の陰に隠れ、それをやり過ごした。
「やりおるのう。もうマークの籠手を使いこなしておる」
「感心してる場合じゃねえだろ、じいさん。ほんとにあんなのとやり合えるのか？」
「なんとかするしかあるまい」
　珍しく弱気な声を出したハーディに短く応え、レイバーグはセルマ、エリィと順に目を向けた。
「白銀の魔法使いは、マークの籠手を得てさらにその魔力を増している。もしも彼女と直接向き合う勇気がなければ、ここに残っていてもよいぞ」
「いえ、行きます！」
　先に応えたのはエリィだった。
「里長からは、過酷な旅になるだろう、といわれています。このくらいは覚悟の上です」
　よくいった。レイバーグは力強くうなずいた。そして老魔法使いはセルマへと目を向け、
「セルマ、君は大丈夫かね？　無理はしなくてもいいぞ」
「……大丈夫です。行きます」
　セルマはわずかな沈黙の後、師の言葉に応えた。姉と自分の魔力の差など、最初からわかっていたことだった。今さらそれがさらに開いたところで、抗すべくもないのは変わっていない。であれば、とにかく全力を出して姉に当たるのが、今自分にできる精一杯のことだった。
　レイバーグはセルマの目を見つめ、やがて小さくうなずいた。
「よし、ゆくぞ」
　再びレイバーグは声をかけ、里のはずれへと移動していく騒ぎの中心を追って駆け出した。セルマたちもそれに続く。
　やはり、魔法の籠手を得たとはいえ、大勢の敵を相手にしては、さしもの白銀の魔法使いの歩みも遅くならざるを得ないようだった。セルマたちは徐々に騒ぎの中心へと近づいてゆき、ついに視界の先に、二つの人影をとらえた。
　セシルと棒術使いは、大勢の魔法使いによって周囲を三方から取り囲まれていたが、しかし明らかに劣勢なのは、里の魔法使いたちだった。
　白銀の魔女が、白い籠手をはめた腕を振るう。
　二人の正面に並んでいた魔法使いたちの前で巨大な爆発が起きた。そこに立っていた者たちが七、八人ほど、その爆発の直撃を受けて地面に倒れ伏す。
　続けてセシルが何か魔法を使うそぶりを見せたが、それよりもほんの少しだけ早く、レイバーグの魔法が発現した。
　老魔法使いの元から、白銀の魔女に向かって無数の光の矢が飛んでゆく。
　それは最前、セルマが地下通路で使ったものと同じ魔法だった。しかし、レイバーグの放った魔法は、セルマの魔法の十倍以上の数があった。
　光の矢の大半は棒術使いが叩き落としたものの、それでも十本を超える矢が白銀の魔女を襲う。セシル

は魔法を中断して防御魔法を発現させ、セルマたちへと目を向けた。
「セシル！　逃がしはせぬぞ！」
　一体どこからそんな声が出るのかと思うほどに大きな声で、レイバーグは白銀の魔女を呼ばわった。しかしセシルはそれには応えず、彼女を遠巻きにしていた里の魔法使いに向けて、新たな魔法を放つ。籠手の先から雷撃がほとばしり、また里の魔法使いがばたばたと倒れた。
「セルマ、援護を。ハーディ殿は、あの棒術使いを抑えてくれ。エリィはいざというときのためにここで待機。よいな」
　レイバーグは矢継ぎ早に指示を繰り出した。
「セシル！」
　もう一度大音声で白銀の魔女を呼ばわり、そちらへ向けて駆け出す。
「じいさん、あぶねえぞ！」
　ハーディが慌てて後を追い、セルマもまたそれに続いた。「援護を」といわれたところで、自分に何ができるとも思わなかったが、とにかく無我夢中だった。
　それと見て取ったか、棒術使いが三人に向かって突進してくる。
「ちっくしょう！」
　ハーディが速度を上げた。レイバーグを追い越し、棒術使いに先制の一撃を加える。しかしその剣は、巧みな棒捌きによって受け流された。
　ほぼ同時に、今度はレイバーグたちに向かってセシルの魔法が発現した。白銀の魔女へ向かって駆け寄るセルマたちの目の前に、突然漆黒の霧が現れる。レイバーグの少し後ろを走っていたセルマはかろうじてのところで立ち止まったものの、レイバーグは、そのまま霧の中へと突っ込んでしまった。
　それはごく初歩的な、ただの目くらましのようだった。しかし、その霧のせいで、向こうにいるはずの姉の姿も見えなくなった。セルマはその霧を払う魔法を編み上げ、杖を振るって発現させる。
　漆黒の霧は一瞬にしてすべてが吹き飛び、その中にいたレイバーグの姿をあらわにした。
　これ以上はないというくらい完璧な魔法の発現だったが、セルマは自分自身で、これほど完璧に魔法が発現したことに驚いていた。
　初歩の魔法とはいえ、曲がりなりにも白銀の魔法使いが作り出したものである。魔力では圧倒的に劣るはずのセルマが、それをたった一度の解除魔法でまとめて吹き飛ばすことができるなど、通常ではあり得ないことだった。
　――この杖の……おかげ？
　セルマは手の中にある、白銀色に輝く杖を見た。
　それ以外に考えられない。
　魔法の杖は、使い手の魔力を蓄え、増幅し、魔法として発現させる。当然杖の能力が高ければ、同じ魔法でもより強力なものを発現させることができる。
　頭ではわかっていたことだが、杖を変えただけでこれほど違うものだとは。
　セルマはしばし、まじまじとその杖を見つめた。
「油断するな！　次が来るぞ！」
　レイバーグの声に、セルマは我に返った。同時に白銀の魔女が籠手をはめた腕を振るう。姉が何の魔法を使ったのか見極める余裕もないまま、セルマは魔法障壁を自分の前に作り出した。初歩の防御魔法で、その能力は限定的ではあるが、それ故に魔法の発現は速い。セシルの魔法が発現したその瞬間には、遅れて魔法を使ったセルマの障壁の方が先にできあがっていた。
　白銀の魔女から放たれた魔法は、無数の輝く球体となってセルマとレイバーグを襲う。しかし、白銀の

杖がセルマの魔力を底上げしているためだろう。あるものは障壁にぶつかって進路を変え、あるものは障壁に受け止められてそのまま消滅した。そして、障壁を乗り越えてセルマの元へたどり着いたものも、その威力が大幅に削がれている。
　直撃していればただではすまない怪我を負っていたのだろうが、障壁によって極端に威力を弱められた魔法の球体は、セルマの服を小さく焦がし、あるいは彼女の肌にごくわずかな傷を作っただけで終わった。
　――師匠は、最初からこれを見越して私にこの杖を……。
　光球をやり過ごしたところで、セルマは師の元へと駆け寄った。
「上出来だ、セルマ。これなら、なんとかセシルとも互角にやり合えるだろう」
「……はい」
　セルマは複雑な思いでうなずいた。叶うものならば、こんな風に繰り広げている魔法戦を即座にやめて、姉に翻意を促したかった。
　しかし、姉の説得は、最初の時点でも、そして南の里でも失敗してしまっている。もはや、姉を止める方法は力によるしかないのだろうか。
　セルマは歯がみして、今は里の魔法使いたちを相手にしている姉へと目を向けた。セシルの魔法で、また里の魔法使いの命がいくつも奪われる。
「のヤロォ！」
　唐突に、ハーディの声が響いた。ついにハーディが棒術使いをとらえ、その身体に剣を叩き込もうとしている。
　棒術使いはかろうじてのところでそれを躱したが、ハーディの優勢は明らかだった。続けざまに二撃、三撃と打ち込まれ、棒術使いはついに防ぎきれなくなったか、数歩後退して、ハーディと距離をとる。
　同時に。
「ダン・エリック！」
　白銀の魔女が、棒術使いを呼ばわった。棒術使いはちらりとセシルを見る。
「分が悪い。引きましょう」
　いうなり、セシルは後方を固めていた里の魔法使いに向けて、魔法を発現させた。数メートルにわたって炎が巻き起こり、悲鳴を上げる間もなく魔法使いたちが消し炭と化す。続けざまに、セシルは新たな魔法を発現させた。ダン・エリックへ向かっていたハーディを魔力の矢が襲い、セルマたちを炎の魔法が襲う。それは防御魔法を展開してやり過ごせたが、ハーディは打ち倒され、セシルたちとの距離は大きく開いていた。
「逃しはせぬといったはずだ！」
　レイバーグが杖を振るうと、その身体が十センチほど宙に浮いた。
「ハーディはエリィに任せておきなさい。私たちは奴を追うぞ」
　いうなり、師の身体が猛烈な速度でセシルたちをめがけて翔ける。セルマは慌てて、それを追って駆け出した。
　師の魔法は、莫大な魔力を必要とする、難度の高いものだった。それゆえに魔法の持続時間もそう長くはなかったが、レイバーグはそのわずかな時間で、セシルたちとの距離を一気に詰めた。
　着陸するや否や、老魔法使いは再び杖を振るった。
　セシルたちの先数メートルのところにある土が、派手に巻き上がる。その程度では、二人に直接的な打撃を与えることはできなかったが、二人の行く手を遮るには十分だった。
　セシルと棒術使いは急停止した。二人は巻き上がる土砂を避けて進路を変えたが、レイバーグは、すでに次の魔法を放っていた。

先ほどと同じく、地面の土が派手に舞い上がった。今度は、白銀の魔女のすぐ足下で。
セシルはそれに足を取られて転倒し、それと気づいた棒術使いが素早く向きを変えたが、それでも棒術使いとセシルとの間に、数メートルほどの距離が開く。
三たび、レイバーグの魔法が放たれた。南の里でセルマも使った、魔力による束縛の帯が白銀の魔女へと襲いかかる。しかし、無様に地面に倒れながらも、セシルはその魔法を打ち消した。
少し遅れて、セルマが師の元に到着する。
棒術使いが転倒しているセシルの横をすり抜け、レイバーグたちをめがけて突進した。レイバーグが次の魔法を準備しているのを見て取り、セルマは棒術使いへ向けて魔法を放つ。
白銀の杖によって魔力が底上げされた今ならば、自分の魔法も棒術使いに通用するかもしれない。そんな期待を込めての魔法だった。
セルマの魔法が棒術使いの右足をとらえてその動きを封じる。転倒こそしなかったものの、棒術使いはたたらを踏んでその場に立ち止まった。
棒術使いは、そこにかけられている魔法を確認するかのように、二、三度右足を動かす。そしてセルマと自分の右足とを見比べると、右足のすぐそばの地面に、その棒を勢いよく突き刺した。
そして棒術使いは、具合を確かめるかのように、その右足を持ち上げた。
――だめか。やっぱり。
魔法が強力になっても、この棒術使いには魔法が効かない。セルマは続けて光の矢の魔法を棒術使いに向けて放った。いつもよりも多くの光の矢が出現し、棒術使いへと襲いかかるが、そのことごとくはいとも簡単に迎撃されてしまった。
棒術使いがこちらへ向かって駆け出そうとしたその時。
「ダン・エリック、下がって！」
セシルの声が響き、同時にセルマたちに向かって青白い光が放たれた。棒術使いはぎりぎりのところでそれを躱し、標的となったレイバーグは、魔法の障壁を作り出してそれを受け止める。
白銀の魔女が立ち上がり、レイバーグと対峙していた。
セシルの魔法がひとまず途切れたと見るや、棒術使いは猛然とセルマたちへと向かって走ってきた。セシルの魔法はなんとか相手にできても、七十歳を超す老人と小柄な娘一人では、武術の達人相手には赤子も同然。しかも、頼みの綱の魔法も相手には通用しない。
――だめ。このままでは。
対処するすべも見つからないまま、棒術使いが迫り来るのを見ていたセルマの横を、大柄な人影が疾風のごとく駆け抜けていった。人影はそのまま棒術使いに向かって剣の一撃をくれたが、しかしその攻撃は謎の金属でできた棒に受け止められてしまう。
「こいつは任せろ！　じいさんたちは白銀野郎を！」
頼もしい援軍の登場に、レイバーグは「任せたぞ」声をかけ、今度はセルマを呼ばわった。
「セルマ、手を貸すのだ。もはや奴は白銀の魔法使いではない。私たちの敵だ」
師の声は厳しい。そして、それと対峙している姉は隙を窺っているのか、右半身をやや引き気味にして宝珠を持った右腕を少し持ち上げ、レイバーグを見つめている。
「……はい」
セルマは苦渋の思いで応えた。
姉の説得は、もはや不可能だろう。そしてこの状況下、本気を出して彼女を相手にしなければ、こちらの命が奪われてしまう。
――姉さん。どうして……。

　セルマは師にならい、姉へ向けて杖を構えた。本当にこれでいいのか、こうする他に方法はないのか。他の可能性を考えながら、しかしセルマに閃きが訪れることはなかった。

　対する白銀の魔女は、セルマとは違い、妹を相手にすることにいささかもためらいを感じている様子はなかった。
「レイ・ヴァースは知っているな？」
　レイバーグは短く問うた。
　いにしえの大魔法使いの名を冠した魔法。それは究極の破壊魔法とも呼ばれている。その別称の通り、莫大な魔力を具現化した紫色の光線は、わずかにかすめただけでも岩を砕き、人間を蒸発させてしまうほどの威力を持つという。
　その威力故に禁忌とされている魔法は、強大な魔力を得た白銀の魔法使いを倒すにはふさわしいだろう。
　しかし。
「私には、その魔法は無理です」
　いかに白銀の杖による増幅があったとしても、セルマにその魔法を放てるだけの魔力はない。そもそも、彼女に禁忌とされている魔法の知識などあろうはずもなかった。
「君は私の魔法に同調して魔力を送ってくれるだけでいい。魔法は、私が使う」
　レイバーグはセルマに応え、ゆっくりと杖を引いた。
　普通では想像できないような魔力が集まっているのだろう。レイバーグの持つ杖が紫色の輝きを放ち始める。
　それに同調するように、対する白銀の魔女も行動を起こしていた。右手にはめた籠手が、師の杖と同じ紫色に輝き始める。
　――姉さんもレイ・ヴァースを？
　たまたま二人の選択した魔法が一致してしまったのか、それとも師がその魔法を使うのを見て取って、かつての弟子も同じ魔法で対抗しようとしたのか。姉の意図はわからなかったが、旧代の魔法使いが遺した魔導具を二つも得ている姉が、純粋な魔力では師を上回っているのは目に見えている。セルマは精神を集中し、自身の魔力を杖へと導いた。
　少し離れた場所で攻防を繰り広げていたハーディと棒術使いが、その柄物を打ち合わせた。鈍い金属音が周囲に響き、そしてそれが、合図となった。
　師と弟子。二人の強大な魔法使いが、同時にその魔力を解き放つ。
　レイバーグの杖から。そしてセシルの籠手から。
　一条の紫色の光が伸び、それは惹かれあう恋人たちのように真正面から激突した。互いの魔法が互いの魔法を打ち消しあい、魔法同士が衝突したその場所が激しい光を発する。
　魔法の衝突が拮抗していたのはほんのわずかな間だった。やはり古代魔法使いの遺産を手にしたセシルの魔力は、当代一とうたわれている老魔法使いのそれをも凌いでいる。レイバーグの魔法は瞬く間に押され気味となり、セルマは慌てて師の魔法に自らの魔力を同調させた。彼女の杖から放たれた魔力が、レイバーグの杖から発せられる紫の光に絡み合う。新たな魔力を得た師の魔法はその勢いを取り戻し、魔法の衝突は互いに一歩も譲らぬ、一進一退の攻防となった。レイバーグの魔法が押したかと思えば次の瞬間にはセシルが押し返し、さらにそれをレイバーグが押し戻す。
　しかし。
　二人の魔力を持ってしても、やはりセシルの魔力は強大だった。レイバーグの額には汗が浮かび、セルマにも疲労が積み重なり、徐々に魔法の維持が困難になってくる。

――このままでは。
セルマの脳裏を、いやな予感がかすめていく。それと同時に、ハーディのくぐもった声が聞こえ、続けてどさりとなにかが倒れる音がした。セルマの視界の隅に入ってきたのは、巨漢の戦士が地面に倒れ伏す光景だった。
迷っている暇はなかった。このままではこちらの敗北は確実である。
――姉さん！
彼女は思わず、自分の持つ杖の元の持ち主へと呼びかけてしまっていた。
――私に力を！
セルマは、師の魔法へ力を送るのをやめた。セルマの援護を失い、レイバーグの魔法はついに押される一方となる。両者の中間よりもややこちらよりだった魔法同士の衝突点が、見る間にこちらへ迫ってくる。
セルマは、これ以上はないというほどの集中力を発揮し、導けるだけの魔力を杖へと導いた。白銀の杖はセルマの魔力を忠実に増幅し、いつにないほどに魔力が高まる。
――行って！
裂帛の気合いと共に、杖を振るう。杖から放たれた魔力は炎の球となって、白銀の魔女へと一直線に向かった。
それと気づいた棒術使いが進路を変え、セルマの魔法を打ち落とそうと金属棒を振りかざす。
――いくらなんでもこの魔法を撃ち落とせるわけはない。
――いや。あるいはこの男だったらやりかねない。
二つの思いが交錯し、セルマは息を飲んだ。
棒術使いは火球に追い付き、その武器を振るった。魔法の軌道と金属棒の軌跡とが交差する。
わずか一瞬の差で、棒術使いの試みは失敗に終わった。振り回された金属棒は空を切り、火球はまっすぐにセシルを襲う。
魔法は白銀の魔女のすぐ脇で、凝縮されていたエネルギーを解放した。
人間一人を軽く包み込むほどの爆発が起きる。魔法に集中していた白銀の魔女にそれを防ぐすべはなく、その爆風を左半身に直接浴びることとなった。
身体が数メートルも吹き飛び、それからわずかに遅れて、それまでセシルが立っていた場所を、レイバーグの放った究極の破壊魔法が通り過ぎてゆく。
白銀の魔女にとどめを刺すのならば、これ以上はない絶好の機会だった。しかしセルマには、もうこれ以上魔法を使うだけの余力は残っていない。
魔法の直撃を受けて吹き飛ばされたセシルは、ふらつきながらもその身体を起こした。セルマはレイバーグへと目を向けたが、師もまた己の限界を超えた魔法を使ったためか、姉の様子を見守る以外にはできないようだった。次の魔法を使う余裕もないようで、杖を地面に突き立て……文字通りの杖として……立っているのが精一杯の様子だった。
白銀の魔女の元へ、棒術使いが駆け寄る。棒術使いはセシルになにかをささやきかけると、その身体を支えて里の出口を目指して移動を開始した。
――ここで姉さんを逃がすわけにはいかない。
頭はではわかっていたが、魔力を使い果たしてしまった身体は、思うように動いてくれない。セルマはただ、去りゆく姉の姿を見つめることしかできなかった。
その去り際に、姉が、こちらへと目を向けた。
その目は怒りと憎しみに満ちていた。かつての優しく、穏やかだった姉の目は、完全に失われている。
――姉さん……。

もう、姉は以前の姉ではないのだ。
彼女は、悲しいほどにそれを実感していた。

「西の里へ向かう？」
　ハーディの声は大きかった。
「それじゃあなにか、白銀の奴に、みすみす回復の機会を与えようってのか？」
「まあ、結果的にはそういうことになってしまうかな」
　納得できない、といった様子で、戦士は老魔法使いを睨みつけた。
「相手は手負いなんだぞ。あの手傷だ、そう遠くへ行けるわけもねえ。今のうちに奴を捜し出してやっつけちまえば、それで解決じゃねえか」
「セシルが一人ならば、それもできようがな。あの棒術使い……ダン・エリックがセシルについていることを忘れてはならんぞ」
　レイバーグは静かに応えた。
「奴が魔法を打ち消すのを、君も見ているだろう」
　非常識なことを平然とやってのけた棒術使いのことを思い出したのか、ハーディはむっつりと黙り込んだ。
「そもそもあいつは何なんだ？　じいさん、あんたはあいつを知ってるのか？」
「古い知り合いだよ。奴は、自分のことを『すべての始まりを求める者』といっておったな」
　セルマは首をかしげて師の顔を見た。古いといったところで、あの棒術使いはさして年齢がいっているようには見えなかった。姉と同じか、せいぜいそれよりも少し年上程度ではないのか。
　そんな彼女の疑問に応えるように、師は平然と
「奴と最後に会ったのは、四十年くらい前だったかな」
「冗談も大概にしろよ、じいさん。どう見たってあいつは三十なるならずじゃねえか。そんなのがどうやって、四十年も前にじいさんと会うっていうんだよ？」
「そんなことを私に聞かれたって答えようなどないわい。とにかく奴は、四十年前にもあの姿で、あの棒を持って、私の前に現れたのだよ」
　そう、あの棒だ。
「あの棒は何なのですか？　私には、あの棒が魔法を打ち消しているように見えましたが」
「旧代の魔法使いに対抗するために、当時蛮族といわれていた人々が、魔法をうち消す金属を作った、という話は知っているかね？　奴が持っている棒は、その金属でできているのだろう」
　師の言葉でセルマが思いついたのは、旧代の魔法使いのことだった。当時は不老不死の研究も盛んに行われ、その成果として人間の寿命をはるかに延ばす魔法も完成したと聞く。ダン・エリックも、そういった魔法使いの一人ではないのか。であれば、あの男がそのような金属棒を持っているのもうなずける。
　セルマがその可能性を問うと、師は少々難しい顔でうなずいた。
「まあ、確かにそう考えるのが一番なのだろうがね。ただちょっと引っかかることがあってね」
　はあ、と曖昧にうなずくと、師は口をゆがめて、
「私は、奴が魔法を使っているのを、一度も見たことがないのだよ」
「私たちの知らない方法で魔法を使っているという可能性はありませんか？　旧代の魔法使いなら、そういったことも可能なのでは」
「まあ、旧代の魔法使いについてはわかっていない点も多いからな。その可能性も、無論ないとはいえん。……話をセシルに戻していいかね？　彼女の傷が回復するのには時間もかかろうから、その間に、我々は西の里の防御を固めようと思う」
「奴がもう一度南の里に行って、宝珠が保管されているところに魔法装置で直接転移する、って可能性はねえのか？」

「ないとはいいきれんが、ここからフェルト山を越えて南の里へ向かうくらいなら、直接西の里へ向かった方が早い。それに、マークの籠手を手に入れたセシルの魔法は、さらに強力になる。そうなれば、小細工などせずとも、正面から堂々と西の里に乗り込んで、力ずくで宝珠を奪えると勘違いするのは間違いあるまい」
「勘違いだったらいいけどよ、ほんとに奴がそれだけの力を身につけてたらどうするつもりなんだ？」
「どうにかするさ。……いや、せねばならんのだよ。私たちは」
　レイバーグは悲痛な表情で応えた。
「さあ、あまりぐずぐずもしていられん。出発の準備をするぞ」
　レイバーグの言葉に従って、昨日の激闘の疲れを癒す間もなく、セルマたちはそれぞれ分かれて旅立ちの準備を始めた。当面の食料などを背負い袋に詰めながら、セルマはふと、この里を目指して同時に旅立ったモリー師らの一行のことを思い出した。
　モリー師らは、まだこの里には到着していなかった。師らがこの里に到着していれば、もう少し状況は変わっていたのだろうか。
　昨夜、最後に師と姉との間で戦わされた破壊魔法のせめぎ合い。その場にいたのが自分ではなくモリー師だったら、師は姉を打ち負かすことができていたのではないか。あるいは、この里の被害がこれほど大きくなる前に、姉を止めることができていたのではないか。
　北の魔法使いの里も、被害は甚大だった。
　たった二人の人間が、たった一晩で、二つの魔法使いの里に壊滅的な打撃を与えた。それはそれをなしえた側が桁違いに強大だっただけで、なされた側がことさら無能だった、というわけではない。姉によって一瞬でその命を奪われた魔法使いの中にも、セルマよりも優秀な者は何人もいただろう。
　――私が、もう少し優秀な魔法使いだったら。
　今さらいっても詮無いことではあったが、セルマは思わずにはいられなかった。
　荷造りをする手を止め、脇に置いてある白銀の杖に目を向ける。
　――姉さん。
　彼女は小さく息をついた。と。
「セルマさんって、白銀の魔法使いの妹さんなんですってね」
　唐突に後ろからかかった明るい声に、セルマは振り返った。
　くりくりとした目が印象的な少女が、そこに立っていた。南の里の治療術師は、セルマに向けてにっと笑った。その笑顔につられるように、セルマの口角がわずかに持ち上がる。
　セルマは「ええ」と短く応えた。
「それが何か？」
「あ、別に大したことじゃないんですけど。すごいなあって思って」
　エリィの言葉はあくまで無邪気だった。何がどう「すごい」のかよくわからないまま、セルマは小さく微笑んだ。
「私は全然すごくないわ。魔法使いとしての能力だって並以下だし……」
「あ、そういうことじゃないんです」
　エリィはぶんぶんと手を振って、セルマの言葉を遮った。
「私にも姉がいるんですけど、姉がそんなことをしてしまったら、とても姉を追おうなんて気にはならないだろうな、って思って。姉のことは大好きだから、実際に姉を目の前にしたら、セルマさんみたいに立ち向かうことなんて、できないと思うから」
　エリィの言葉は真剣だった。

　そういうことか。少女の言葉に納得して、また小さく微笑む。
「姉さんの説得がうまくいかなかった時はそうなるかもしれない、って覚悟はしていたから」
　小さく息を吐く。少女は、くりくりとした目でじっとセルマを見つめていた。
「それに、それがこの旅に私が同行するための条件だったから。『いざというときには、たとえそれが姉さんでも、魔法の刃を向けること』って」
　エリィはじっとセルマを見つめて、やがて心から感心した、といった様子で口を開いた。
「やっぱり、すごいですよ、セルマさん。私なんか、そんな条件を突きつけられたら、それだけでもうやる気がなくなってしまいますもの」
「エリィは、お姉さんが大好きなのね」
　言葉の端々に現れる、少女の姉への思い。それがひしひしと伝わってきて、セルマは微笑ましい気分になった。エリィは「はい！」と元気よくうなずき、
「セルマさんもお姉さんのことが好きなんですよね？」
　ええ。セルマはうなずいた。
「やっぱりすごいですよ。大好きなお姉さんを傷つけることも厭わないなんて」
　――すごい、か。
　エリィは手放しで感心してくれているが、実際のところはどうなのだろう。
　ただ、無我夢中で姉を追っていた。それだけのような気がする。姉を説得できる自信があったわけでもなく、実際にその試みは失敗した。そして結果的には自らの魔法で、エリィのいう「大好きな姉」に重傷を負わせることになった。
　――姉さん。
　セルマはその思考を無理に頭の隅の方へ追いやると、治療術師の少女に向けて、小さな微笑みを浮かべた。
「そんなことないわ。私なんて全然大したことのない、三流の魔法使いだもの」
　それ以上その話を続けるのが辛くなって、セルマは無理に話題を打ち切った。
「さあ、みんなが待っているわ。急がないと
　少女はセルマの意図に気づいているのかいないのか、「あ、そうですね」と、慌てた様子で自分の荷物を詰めに戻っていく。
　セルマも止めていた手を再び動かし、荷造りを終えると立ち上がった。
　もう一度、白銀の杖に目を向ける。
　――これで、この杖ともお別れか。
　それを手放すのは、姉との接点がなくなってしまうような気がして名残惜しくもあったが、だからといっていつまでも三流の魔法使いである自分が、白銀の杖を持っていていいはずもない。セルマは小さく息をついて白銀の杖を手に取り、エリィに目を向けた。
「準備はいい？」
「はい、いつでも大丈夫です」
　治療術師も、セルマとほぼ同時に準備を終えていた。セルマは少女にうなずきかけると、「じゃあ、行きましょう」と、歩き出した。
　集合場所である里の出口でセルマたちを待っていたのは、ハーディ一人だった。
「遅えぞ」
　別段それを怒っている様子でもない戦士に「すみません」と返し、セルマは師の姿が見あたらないことを指摘した。

「じいさんなら、嬢ちゃんの杖を探しに行くっていって、それっきりだぜ」
　杖探しが難航しているのだろうか。レイバーグがハーディと別れてから、もうずいぶんと時間はたっているらしい。
　一体なぜそれほどに時間がかかるのだろう。
　昨夜の襲撃で命を落とした魔法使いは多い。少々不謹慎ではあるが、杖ならばいくらでもあるはずだったし、セルマ程度の魔法使いであれば、どの杖を使ったところで……白銀の杖を除けば……大して差はない。その辺から適当に見繕ってしまえばそれで十分のはずなのに。
　セルマが首をひねると、
「そういえばよ。前から不思議に思ってたんだけど、なんで最強の魔法使いの称号が、白銀なんだ？　炎とか龍とか、もっと強そうな呼び名なんていくらでもあるんじゃねえのか？」
　唐突にハーディが問うてきた。その目が、彼女の持っている白銀の杖に注がれている。
「ええっ、ハーディさん、ご存知ないんですか？」
　本気で驚いた、といった様子の声を出したのはエリィだった。ハーディに返すべき言葉を迷っていたセルマは、少女のひどく大げさな驚きように救われた気がした。
「そんなこといわれたってな。俺はただの傭兵上がりの軍人だぜ。戦争の仕方と剣の使い方は知ってても、魔法使いのことなんてわかるわけねえだろ」
　応える戦士の声は少々とまどい気味で、セルマはなんだか意外な気がした。そんな戦士の態度などどこ吹く風と、少女は右手の人差し指を立ててハーディに突き出すと、得意げな表情を浮かべた。
「仕方ありませんね。それじゃあ、特別に説明してあげましょう。二千年前に旧代の魔法使いたちが起こした戦争で、世界中が荒廃したのはハーディさんもご存知ですよね。その混乱は何年も続いたんですけど……」
　その混乱の中、各地を旅して回る、一人の魔法使いがいた。
　その魔法使いは、名前はおろか性別すらも明らかにはなっていない。伝承に残っているのは、その魔法使いは白銀の髪を持ち、そして白銀の杖を持っていた、ということだけ。
　その魔法使いがこの国を訪れたのは、旧代の魔法使いが起こした戦争が終結して五年ほどの後だった。
　戦争は終わったものの、人々はその際に呼び出された魔人、サイフェルトを倒す術を失っていた。魔人によって国は荒廃し、それを憂えた魔法使いは、この国の魔法使いたちをまとめ上げ、自ら先頭に立って魔人に戦いを挑んだ。壮絶な戦いの末、魔人はその力を二つの宝珠に封じられ、フェルト山の麓に封印された。
　その後、その魔法使いの指導によってこの国に四つの魔法使いの里が作られた。東西の里に宝珠を一つずつ安置せよという指示をしたのも、この魔法使いだったという。
　魔法使いは四つの里の完成を見届けると、人知れずこの国を去っていった。
　それに気づいた里長たちは、魔法使いを捜して方々に探索の者を出したが、その行方を知る者はなかったという。
「……その魔法使いの功績をたたえて、非常に優秀な魔法使いに『白銀の魔法使い』の称号を与え、その人が使っていたのと同じ、白銀の杖を与えるようになったんです」
　なるほどねえ。腕組みをして、もっともらしい表情でうなずくハーディを見ながら、セルマはエリィの物語を補足した。
「あと、この白銀の杖というのは、普通の杖よりも大きな魔法を発現させることができるんです。白銀の称号を与えられるほどに強大な魔力を身につけた魔法使いは、この杖くらいのものを持たないと、その本当の力を発揮することができないというのも、白銀の杖を与えられる理由の一つだ、と聞いています」
「それじゃあ、その杖を持てば強力な魔法が使える、ってことなのか？」

「まあ、単純にいってしまえばそういうことです」
　あれこれと説明をするのも面倒だったので、セルマはハーディの問いにうなずいた。
「だったら、嬢ちゃんがその杖を持っていればいいじゃねえか。それでこっちの戦力が上がるんなら、わざわざそれを手放すなんて、あほくせえぞ」
「その資格もないのに、白銀の杖を持っていられるほど、私は厚顔ではないです」
　ハーディの提案はもっともといえばもっともだったが、さすがにそれをする勇気はなかった。ハーディから目をそらして、その手の中にある白銀の杖に目を向ける。
「白銀の杖を持つということは、その杖に見合うだけの魔法を使える、という証明でもあるんですから」
「そういうもんかねえ……お、来た来た」
　ハーディは首をかしげながら応えたが、すぐに遠くに目を向けた。その言葉で、セルマとエリィも戦士の視線を追う。
　レイバーグは、この里の者らしき何人かの魔法使いを連れてこちらへ向かっていた。その手に握られている杖は、彼がこの旅の間、ずっと持っているもの一本きり。
　――新しい杖がない、なんてことはないはずなのに。
　セルマは師の姿を訝しく思ったが、老魔法使いはセルマの疑問に気づいているのかいないのか、里の魔法使いと言葉を交わしながら、こちらへと向かってきている。
　ほどなくして、魔法使いを引き連れたレイバーグは、セルマたちの元へ到着した。老魔法使いは、そのすぐ近くに立っている、五十歳ほどの男を「北の里の里長だ」と紹介した。
　北の里長は小さく礼をして、「あなた方の力になれず、申し訳ない」といった。
「気にするな。元はといえば、何も考えずにあの女に白銀の称号を与え、むざむざとオムニの宝珠を奪われてしまった私たちにこそ非はあるのだからな。有能な魔法使いたちを何人も死に至らしめてしまったこと、こちらこそ詫びなければ」
「……本当に、私の姉が大変なことをしてしまって」
　師の言葉の後を継いで、セルマは北の里長に向かって頭を下げた。そんな彼女に、北の里長は優しげな微笑みを浮かべた。
「話は聞いているよ、セルマさん。だが、白銀の魔法使いは白銀の魔法使い、君は君だ。君のお姉さんがしようと思ったことを君が変えられたとは思えないし、仮に君が白銀の行動を変えられたとしても、そこで生じるゆがみは、いつかもっと大きなものになって暴発していただろう。君が気に病むことはない」
「そういっていただけると助かります」
　セルマは短く応えた。北の里長はもう一度微笑みを浮かべると、ハーディ、エリィへと順に目を向けた。
「ハーディ殿とエリィさん。あなたたちのおかげで、この里の被害はずっと少なくてすんだ。感謝しています」
「自分の力量不足で、この里にこれほどの被害を及ぼしてしまったことを、大変申し訳なく思っております」
　ハーディは深々と頭を下げ、それに続いてエリィも頭を下げた。
　――この人、こんな話し方もできるんだ。
　セルマは少し意外に思って、ハーディの顔を見た。戦士の顔は普段見ている表情とは打って変わって引き締まっており、それだけを見れば「歴戦の勇士」と呼ぶにふさわしくも思える。
「いや、あなたがあの棒術使いを抑えてくれなければ、この里の魔法使いから、もっと大勢の犠牲者が出ていたことでしょう。それに……」
　北の里長は今度はエリィへと目を向けた。
「南の里の治療術師。あなたがいたおかげで、死すべき者の多くが、その定めから逃れることもできた。本

当に、いくら礼をいってもいい足りるものではない」
　白銀の魔法使いたちを取り逃がしてしまった後は、エリィの独壇場だった。寝る間も惜しんで負傷者の治療に当たり、彼女が寝床についたのは、もう明け方といっていい時間だったと聞いている。
　その割に少女が元気そうなのは……やはり若さなのだろう。
「そんなこと、ありませんよ」
　エリィは照れくさそうに笑った。少女に微笑みを返して、北の里長はレイバーグへと目を向けた。
「本当なら、我が北の里からもあなたたちに協力をすべきなのでしょうが、残念ながらこの惨状だ。なんの助力もできないことをお許し願いたい」
「気にすることはない」
　レイバーグは短く応えた。
「私の方こそ、このような状況下にあるのに、無理に食料の援助を頼んだりして、心苦しく思っているよ」
「それこそお気になさらずに。あと我々にできるのは、あなた方のご無事を祈るばかりです」
「ああ。必ずや、宝珠は取り戻してみせよう」
　レイバーグは力強くうなずき、セルマたちへと目を向けた。「さあ、時間も惜しい。そろそろ出発しよう」
「ちょっと待ってください」
　セルマは慌てて声を出した。
「私の新しい杖は……」
　ああ、そのことか。レイバーグはようやく思い出したように彼女に目を向け、
「色々と考えたのだがね、セルマ。君は、そのままその杖を使いなさい」
「そんなことできません！」
　セルマは即答した。
　師の言葉は薄々予想していたとはいえ、白銀の魔法使いではない者が白銀の杖を持つなど、いくらなんでも無茶苦茶だった。
「誰が使おうが杖は杖だ。それで君の価値が下がるわけではあるまい」
「私なんかがこんな杖を持ったら、白銀の称号の価値が下がってしまいます」
　セルマは力説したが、
「いいじゃねえか、別に」
　ハーディが、耳の穴に指を突っ込んでごそごそとやりながらいった。
「力の弱い魔法使いがその杖を持ったからって、その杖の力まで弱くなるわけじゃねえんだろ？　それに、ほら。その杖、嬢ちゃんによく似合ってるぜ。前の杖より、ずっと立派な魔法使いに見える」
　セルマはハーディを睨みつけた。
「それじゃあ、ハーディさんは『似合うから』って理由で国王の身なりをして街を歩くことができますか？
　魔法使いが白銀の杖を持つというのは、それと同じことなんですよ」
　そりゃさすがにできねえなあ。戦士は苦笑いを浮かべた。ハーディが救いを求めるような目をレイバーグに向けると、老魔法使いは心得たとばかりにうなずいた。
「セルマ。その杖の見た目が問題だというのなら、こうしてはどうかね」
　師の杖が、セルマの手の中にある白銀の杖に触れる。
　次の瞬間、杖が放っていた白銀の輝きは、一瞬にしてどぎついピンク色へと変わった。
　セルマはしばし、少々……というよりは相当に……下品な色へと変化してしまった杖をじっと見つめていたが。
　唐突に、横から大きな笑い声が響いた。

「あっはっは、こりゃいいや。ほら、嬢ちゃん。これなら誰もその杖が白銀の杖だなんて気がつかねえぜ」
　馬鹿笑いを続けるハーディを「ふざけないでください！」と怒鳴りつけ、セルマは師を睨みつけた。
「師匠も！　本気で白銀の称号を冒涜されるおつもりなんですか？」
「そんなつもりは全くないよ」
　セルマの勢いに怯む様子もなく、老魔法使いは飄々と応えた。
「君には話していなかったがね、セルマ。魔法使いと杖には、相性というものがあるのだよ」
　師がもう一度杖を振るうと、彼女の手の中の杖は元の白銀色を取り戻した。セルマは師と杖とを見比べる。
「相性、ですか？」
　うむ、とレイバーグはうなずいた。
「まあ、相性のいい杖に巡り会うことは滅多にないのだがね」
　そういって、師は自分の持っている杖をセルマに差し出した。
「この杖で魔法を使ってみなさい。おそらく、いつもの十分の一の力も出せぬはずだ」
　いわれたとおり、セルマはその杖を使って簡単な魔法を使ってみた。確かにその杖から発現した魔法は、普段の彼女の実力を考慮しても、さらにわびしいものだった。
「その杖はね、杖匠連中からは『失敗作』と呼ばれていたものなのだよ。どれほど強大な魔力を持った魔法使いでも、その杖を持った途端に凡百の魔法使いに成り下がってしまう」
　レイバーグは右手を広げてセルマに差し出した。セルマはそれに応え、師の手の中に杖を返す。
「だがね。この杖は、極端に持ち手を選ぶだけだったのだ。私がこの杖を持てば、こうなる」
　老魔法使いは、昨夜も使ってみせた、究極の破壊魔法を放った。レイ・ヴァースの紫色の光は、その先にあった巨大な岩を一瞬にして消し飛ばす。
　師のいいたいことを理解して、セルマは手の中にある白銀の杖に目を落とした。
「私と、この杖の相性がいい、ということなのですか？」
「そういうことだね」
　師は静かにうなずいた。
「魔法使いと杖の相性というのはね、杖を持って、魔法を使ってみるまではわからないのだよ。それ故に、相性のいい杖に巡り会うのは難しいが、巡り会うことができれば、私のように、強大な魔法を少ない労力で発現することも可能となる」
　そして、その杖と君の相性は、すこぶるいい。
　レイバーグはそういって、セルマに微笑みかけた。
「すごいじゃないですか！　だったら、その杖を持たなきゃ絶対に損ですよ！」
　エリィが無邪気な感嘆の声を上げる。その声を聞きながら、セルマは白銀の杖をじっと見つめた。
　なんとも皮肉な話だった。三流の魔法使いに一番相性のいい杖が、よりによって超一流の証である白銀の杖だ、などとは。
「セルマ。君が『白銀』の名にこだわるのならば、その杖の色を変えることもできる」
　老魔法使いは杖を持ち上げたが、今度は何色にされるかわかったものではない。セルマは杖をかばうように胸元に抱き寄せ、それを見て師は小さく苦笑した。
「さっきのはほんの冗談だ。君の好きな色をいいなさい。いいようにしてあげよう。まあ、本気で君がその杖を持ちたくないと思っているのなら、仕方がない。ほかの杖を用立てよう」
　セルマはもう一度、師と、白銀の杖とを見比べた。姉の残した杖は何も語らず、師もまた、じっと彼女を見つめている。

　不意に、彼女は背中を力強い手で叩かれた。振り返ると、大柄な戦士がにっと笑って彼女を見つめている。
「もらっといたらどうだ。どうせ白銀の奴が捨てていった杖だ。ありがたく使わせてもらおうぜ」
「そうですよ。せっかくその杖がセルマさんの魔力を十分に引き出してくれるんですから、使わなければもったいないです！」
　ハーディに続いて、エリィが力説した。他人のことに、なぜそうも真剣になれるんだろう。エリィの大まじめな顔を見て、セルマは小さく微笑んだ。
　大きく息を吸って、吐き出す。
「わかりました。それでは、この杖は私が使わせていただきます」
　うむ。レイバーグはうなずき、ハーディは「それでこそ嬢ちゃんだ」と、彼女の背中をもう一度叩いた。セルマはハーディに目を向け、続けて師へとその視線を移す。
「でも、この旅が終わって、姉さんから宝珠を取り戻したら、私にふさわしい杖を見つけてください。……この杖の色は、私には荷が重すぎます」
　よかろう。レイバーグは重々しくうなずいて、成り行きを見守っていた北の里長へと目を移した。
「そういうわけだ。では、我々はそろそろ出発しよう。色々と世話になった」
「ご武運を」
　里長の返事にうなずきを返し、レイバーグは一同を見回した。
「では、出発するぞ。白銀よりも早く西の里へ着かねばならん。少々急ぐ旅になるが、頑張ってほしい」

――暗い。

　彼女は、上を見ながら思った。
　うとうとと微睡んでは、わずかな間だけ覚醒する。そんな時間を繰り返していたため、日付の感覚もなくなっていた。
　――今は、夜？
　幾度かの覚醒の時も、ずっとそこは暗かった。たまたま夜間に覚醒してしまうのか、それとも元々ここが暗い場所なのか。
　おそらく後者だろう。彼女は思った。
　妹に焼かれた左半身は、もうだいぶん回復している。痛みも引き、力を入れれば動くようにもなった。もうしばらくすれば、前と同じように動けるようになるだろう。
　ここがどこなのかもわからない。得るべきものは得たが、その後さんざんにやられ、ほうほうの体で逃げ出したあと、気を失ってしまった。
　彼女の連れがここまで運び、応急処置をしてくれたらしいが、そのあたりのことは覚えていない。
　どこかの、部屋のようではある。
　彼女はベッドらしきものに寝かされていたし、微睡みの中、誰かの足音や、床板がぎしぎしときしむ音を聞いたような気もする。
　――魔法を使って明かりを灯そうか。
　右腕の籠手ははずされてしまっていたが、触媒がなくともその程度の魔法なら発現はできる。
　意識を集中するのと同時に、右手から木のきしむ音が聞こえ、そこからわずかな光が差し込んでくる。
　彼女はそちらへと目を向けた。
「気がついたか」
　漆黒の金属棒を持った男が、部屋の入り口に立っている。男は短くいうと、床板をきしませながら、彼女の方へと歩み寄ってきた。
　男が彼のそばで立ち止まるのを待って、彼女はいった。
「あれから、何日たちました？」
「三日だな」
　妹たちは、次の目的地へ向けて出発しているだろう。あれからすぐに行動を起こしたとすれば、その差は三日。
　妹たちに追われていたはずなのに、追いつかれ、今度は追い越されてしまった。
　妹の、あの悲しげな瞳が目に浮かんでくる。
　――妹といえば。
「私の杖は……」
「あまり喋らん方がいい」
　男は、彼女の言葉を遮った。
「もうとっくにどうかなっていてもおかしくはない身体だ。今そうして体力を使えば、自らの命を縮めることになる」

　彼女は、小さく微笑んだ。
「大丈夫です。もう、だいぶ回復していますから」
「自信があることは結構だが、お前の身体はまだ何があってもおかしくない状態だ。無駄な体力は使わんほうがいい」
　応える男の声には、およそ感情というものが含まれていなかった。ただ淡々と事実だけを述べるような口調で、彼女の身体を案ずる言葉が出てくる。
「お前の杖ならば、妹の手に渡っている」
　――とりあえずは、予定どおり、か。
　彼女は小さく息を漏らした。
「お前には、今しばらくの休養が必要だ。死ねんのだろう？　目的を達成するまでは」
　死にたくないのならば、今は休め。男は短くそういった。
「ええ。それでは、そうさせてもらいます」
　彼女はうなずいて目を閉じたが、すぐに目を開け、再び男へと目を向けた。
「一つ、頼まれてほしいことがあります」
「聞こう」
「もしも、私に何かあった時には、あとのことはお願いします」
　男は何も応えずに、彼女に背を向けた。
　そしてまた床板をぎしぎしときしませながら、部屋を出て行った。

第三話　白き籠手、黒き腕

「白銀の魔法使いさんって、どんな魔法使いだったんですか？」
　エリィに問われたのは、西の魔法使いの里に到着した、その日の夜だった。
　西の里は、魔法使いの里の中でも特にへんぴな場所にあるため、到着までに何日も野営を重ねることとなった。さすがにそのようなことには慣れていなかったのだろう。エリィはずいぶんと参っていたようだったが、人のいるところに到着して屋根のある場所で休憩すると、途端に元気を取り戻していた。
　セルマたちは、今は使われていない一軒の家に宿泊することになった。家はもう長いこと使われていないということだったが、手入れだけは行き届いていて、居心地はよい。一階には台所と食堂、居間があり、二階にはちょうど四つの部屋があったので、一人が一室ずつ使うことになった。
　荷をほどくと、休憩する間もなくレイバーグは里長の元へと向かい、残された三人は老魔法使いが戻ってくるまでの間、思い思いの時間を過ごしていた。
　セルマは里の中を少し歩いて図書館を発見すると、そこで魔法の理論書を借りて部屋に戻った。その後、彼女がその本から目を離したのは、レイバーグが戻ってきて「食事にしよう」と声をかけてからだった。
　食事の最中に、レイバーグはこの里には温泉が湧いている、という話をした。
「熱い湯にゆっくりとつかってくるといい。疲れがとれるぞ」
　レイバーグの言葉にエリィがすっかりやられてしまい、食事を終えると早々に、セルマを誘って温泉へと向かった。
　温泉は少々熱かったが、師の言葉通り、熱い湯に肩までつかっていると、これまでの旅の疲れが流れていくような気がした。
　行きから帰りまで、終始エリィははしゃぎ通しだった。温泉の中ではまるで子供のようにばしゃばしゃとお湯を引っかき回し、あまりにはしゃぎすぎたせいか、一度ならず滑って転びそうにもなっていた。
　そうして温泉から戻ると、入れ替わるようにハーディたちが温泉へと向かった。やることもなくなってしまい、なんとなく手持ちぶさたになったセルマに、エリィが問うてきたのだった。
　少女の質問の意図がわからずに、セルマは小さく首をかしげる。
「それは、白銀の称号を得たくらいだから。優秀な魔法使いだったけど……」
　エリィは「うーん」と物足りなそうな顔をした。
「ええと、私が聞きたいのはそういうことじゃなくってですね。ほら、あるじゃないですか。得意な魔法はどんなのだとか、実践派か理論派かとか」
　エリィのいいたいことは、なんとなくわかった。セルマは「そうね」と、魔法使いとしての姉のことを、思い返してみた。
「あなたの区分けでいえば、姉さんは理論派だったわ。いつも、私では理解できないような難しい魔法の理論書を読んでいて、自分でも、色々と難しい書き物をしていたりもしたし」
「やっぱりそうですよね？　そんな感じの人だなあって思ったんです」
　少女の言葉は無邪気だった。
　――私も、こんな風にしていられれば、もう少し違ったのかな。
　エリィの笑顔を見ながら、セルマは思った。
「元々、好奇心が強かったのかな。旧代の魔法使いが遺した書物なんかも、自分で翻訳して読んでは、そこに載っている魔法を色々と試したりもしていたわ」
　旧代の魔法使いたちと、今を生きる魔法使いとでは根本的な魔力の大きさが違う。姉が試した魔法のほ

とんどは、発現もせずに終わっていたような記憶がある。
　あれはいつだったろう。異界の魔物を召還しようと試みたこともあった。師やセルマも巻き込んで、何日もかけて複雑な魔方陣を描いたというのに、姉がどれほど魔力を注ぎ込んでも、魔方陣はうんともすんともいわなかった。
「姉さん、あの実験にはよほど自信があったんでしょうね。魔力の桁が違っていることを師匠に指摘されてから、三日ぐらいは落ち込んでいたかな」
　今となっては懐かしい思い出だ。
　オムニの宝珠とマークの籠手を手に入れた今なら、姉はあの時の召還魔法を成功させることができるだろうか。ふと、セルマは思った。
　成功するような気もするし、また失敗してしまうような気もする。
　セルマは、その話を聞いて大笑いしているエリィの顔にちらりと目を向け、内心で小さくため息をついた。
　――姉さんは今、どうしているだろう。
　セルマが与えた傷は、相当なものだった。ことによれば、あのまま命を落としてもおかしくはないほどの。
　仮に生き延びることができたとしても、その傷が癒えるまでには相当な時間がかかるだろう。
　――姉さん。
　セルマは今度こそ、本当にため息をついた。
　同時に、エリィがぴたりと笑いを止める。
「ごめんなさい。ちょっと不謹慎でしたね」
　セルマは、少女に目を向けて、無理に微笑みを作った。
「大丈夫よ。あれは、本当にばかばかしい思い出だしね。私が、ちょっと感傷的になっているだけだから」
　はあ、とエリィはうなずいて、じっと、セルマの顔を見つめた。
　その表情はひどく真剣だった。今度は一体なんだろう。セルマはエリィの視線に応えてその顔を見つめ返したが、少女は彼女の視線に気づいていないようで、ただひたすらにセルマを見つめている。
　――私が、どうしたっていうんだろう。
　なんだか、わけのわからない不安感に包まれたその時。
「セルマさんの……」
「私の、なに？」
　セルマは少々引きつった顔で応えた。
「セルマさんの髪って、綺麗ですよね」
「は？」
　まじめくさった表情と口調。そこから出てきたのんきな言葉に、セルマは間の抜けた声を出してしまった。慌てて表情を繕い、「そ、そう？」エリィに問い返す。
「そうですよ！」
　エリィは力一杯うなずいた。
「ちょっと触らせてください」
　返事も待たずに、少女はセルマへと手を伸ばし、その髪を一房手に取った。長い旅で少々くたびれていた彼女の黒髪は、先ほど温泉で念入りに洗ったおかげで、そのつやを取り戻している。肩の下まで伸ばしている髪は気持ちいいくらいにまっすぐで、しっとりと柔らかい。
　その手触りを楽しむかのように、エリィは手に取ったセルマの髪を自分の指に巻き付け、それがほどけ

ていく様を見つめていた。
　ひとしきりセルマの髪を弄って満足したのか、ほどなくしてエリィは手を離した。セルマの黒髪はすぐに、あるべきところへと戻ってゆく。
「いいなあ。そういう綺麗な黒髪、あこがれてたんです」
　生まれついて持ってきたものを変える術はない。エリィは自分の栗色の髪を手に取った。
「エリィの髪も、よく似合っているわよ」
　セルマは微笑んでいった。
「そうですか？　ありがとうございます」
　エリィは小さく微笑むと、
「そういえば、白銀の魔法使いさんも、真っ黒な髪でしたね」
「ええ」セルマはうなずいた。「私は覚えていないんだけど、私たちの母親が、黒髪だったらしいの」
　へえー。エリィはうなずいて、もう一度セルマの顔をまじまじと見つめた。
「あの、失礼ですけど、お二人のご両親は」
「もういないわ。私が小さい頃に、流行り病で逝ってしまったって」
　セルマは小さく息をついて、表情にわずかな変化のあったエリィに微笑みかけた。
「途方に暮れていた私たちを助けてくれたのが、師匠だったの。それからは、師匠と姉さんが、ずっと私の家族だったわ」
　エリィは、セルマから目をそらすかのように、顔をうつむけた。少しの間、彼女は下を見つめていたが、やがて唐突に顔を跳ね上げ、セルマの目を見つめた。
「そしたら……」
　いうべき言葉が見つからないのだろうか。数瞬、エリィは戸惑っているかのように、じっとセルマを見つめた。
「そしたら、頑張ってお姉さんを説得して、帰ってきてもらいましょうよ！」
「そうね」
　この少女には、この少女なりに思うところがあるのだろう。セルマは微笑みを返した。
「姉さんに帰ってきてもらって、また前みたいに、みんなで穏やかな毎日を過ごせるといいのにね」

　それから数日。
　レイバーグは、来たる白銀の魔法使いの襲撃に備え、里長らとの打ち合わせに余念がなかった。忙しそうに里の中を歩き回る師とは裏腹に、セルマたちに与えられたのは、大量の時間だった。
　ハーディはその時間の大半を剣術の訓練などに費やし、セルマとエリィは、里の蔵書を借りて、新たな魔法の研鑽にいそしんでいた。
　白銀の杖は、セルマの中に眠っていた魔力を呼び覚ました。魔法の威力が上がったのは無論のこと、より高度な魔法さえも扱うことができるようになったのである。レイバーグやセシルにこそ及ばないものの、大抵の魔法使いには引けをとらないだけの魔力を、彼女は得ていた。
　それまでは何の役にも立たない存在だった自分が、重要な戦力として位置づけられる。それは誇らしくもあったが、それをもたらしてくれたのが、どう考えても自分には不釣合いな白銀の杖であると思えば、素直に喜んでばかりもいられない。
　そしてもうひとつ。
　――私はこのまま、「戦力」として姉さんに相対していいのだろうか。

　このままなしくずし的に姉と戦うことになれば、最終的には姉の生命を奪うことになってしまうだろう。
　本当にそれでいいのか。もっと他に方法があるのではないか。セルマの頭には、常にそのことが引っかかっていた。
　そんな、もやもやした思いを抱き続けたまま幾日かが過ぎた夕方、モリー師らが到着した。
　一行には、国から派遣された五人の戦士が加わっていた。長旅を経てきたためだろう。同行している戦士たちに比べると、魔法使いたちは皆、少々やつれているようにも見える。
　再会を喜び合うのもそこそこに、レイバーグとモリー師は互いの情報を交換しあったが、さして目新しいものはないようだった。白銀の魔女と、同行している棒術使いはどこかに潜伏しているのか、道中の捜査では手がかりも得られなかったという。
　東の里の魔法使いたちは、セルマが白銀の杖を手にしたことまでは聞いていなかったらしい。皆一様に驚いていたが、セルマが心配していたような反応は、誰一人として見せることはなかった。
　そして翌日から、里の警備体制が強化されることになった。見張りの人数が倍に増やされ、そこには常にハーディら戦士たちも加わる。同様に、セルマたちにも見張りの順番が割り当てられることになった。
　魔人サイフェルトを封印した宝珠の一つ、ジアスの宝珠は、里の中央の、ひときわ大きな建物に安置されている。石造りの頑丈な建物は、さらに幾重にも防御魔法が張り巡らされ、今は半端な魔力の持ち主では近づくことすらままならなくなっていた。
　こうして、白銀の魔法使いを迎え打つ体制を整えながら、しかし何事もないままに数日が過ぎていった。
　その日の日中は、セルマとアイクとが見張り当番に割り当てられていた。セルマたちは里の見張りやぐらに登ってじっと目をこらしていたが、その目に映るのは、なんの変哲もない、のどかな平原ばかりだった。
　セルマは、ちらりとアイクに目を向けた。奇抜な衣装を身につけた魔法使いは、じっと真昼の平原へと目を向けている。セルマは目線を戻した。
「少し、変わったな」
　唐突に、野太い声が聞こえてきた。
「そう？」
　セルマは遠くを見つめながら短く応た。
「ああ」アイクもまた、短い返事を返す。
「話は聞いた。白銀の魔法使いに、傷を負わせたのだろう？」
　少しだけためらってから、セルマは「ええ」とうなずいた。
「失礼を承知でいわせてもらえば、君にそんなことはできないと思っていた」
「大丈夫。私も、そんなことができるなんて思っていなかったから」
「辛くはなかったか？」
「覚悟は、できていたから。姉さんを追う、って決めたときから」
「そうか」と短くうなずいて、アイクは再び沈黙した。
　太陽が高い。時刻はそろそろ昼時だろう。陽射しは強かったが、頑丈な木材で組み上げられた見張りやぐらは風通しがよく、屋根も備えられている。決して不快ではなかった。
　しばらくの間、二人は黙って見張りを続けていたが、何か変化がある様子はない。
　セルマは小さく息をついた。足下に置いてある水筒を手に取り、中に入っている、生ぬるくなった水を口に含む。その感触を確かめるように口の中で水を転がし、ゆっくりと飲み込んだ。
　この里に到着してからの日数を数えてみる。
　一一二週間、か。
　何事も起きずに十四日間。その時間を、姉は何に使っているのだろう。

　傷の療養。この里に攻め込むための準備。あるいは、宝珠からより強大な魔力を引き出すための研究だろうか。
　セルマはもう一度息をついて、水筒を足下に置いた。と。
「セルマさあん！」
　見張りやぐらのすぐ下から、元気のいい声が届いた。声の主は見るまでもなくわかったが、セルマは身を乗り出して、声が聞こえた方を見下ろした。
　やぐらの下から、エリィがこちらを見上げている。治療術師の少女は、セルマに向けて大きく手を振った。そのすぐ後ろには、姉の知り合いだという金髪の魔法使いが、エリィと同じようにこちらを見上げている。次の見張り当番はこの二人だったはずだが、交代の時刻には少々早いような気もする。
「お昼ご飯、持ってきました」
　エリィは左手に持っていた包みを、セルマに見せるように差し上げた。昼食ついでに、交代の時刻まで一緒にいてくれるつもりなのだろう。
　エリィは右手の杖を腰ひもに挟むと、やぐらにかけられた梯子を、手慣れた様子で登り始めた。結構な高さのある梯子を、少女は左手に荷物を持ったまま、するすると登ってくる。
　瞬く間にエリィは梯子を登り切り、セルマたちの前に姿を現した。
「すごいわね」呆れ半分、感心半分で呟くと、
「山育ちなんですよ。小さい頃は遊び相手もいなかったから、男の子に混じってこんな遊びばっかり」
　エリィは屈託なく笑って、「はい、どうぞ」と、左手に持っている包みの中から、サンドウィッチを取り出した。
「ありがとう」セルマがそれを受け取ると、エリィはアイクへと歩み寄っていった。セルマはサンドウィッチを持って再び見張りに向かったが、それとほぼ同時にもう一人、見張りやぐらに登ってきた気配があった。
　ちらりと目を向けると、やぐらの下でエリィと一緒にいた金髪の魔法使いが姿を見せた。
　イルンはひどくくたびれたふうに「ああ、やれやれ」というと、
「どうだい、様子は？」
「変化なし、だ」
　アイクが応えると、金髪の魔法使いは「そうか」とうなずいた。
「交代にはまだ早い時間だと思うが？」
「あちらのお嬢さんの提案でね。昼食を運ぶついでだから、このまま交代の時間までここにいよう、ってことになってね。目は多い方がいいだろう？」
　イルンの言葉を聞いて、アイクがエリィへと目を向ける。少女は腰の杖を手に持つと、セルマのそばへと歩み寄っていった。イルンも同じように少女に目を向けていたが、目線を平原へと向けた。
「平和な光景だね。いにしえの魔人の復活を目論む魔法使いがいるなんて、信じられないくらいだ」
「本当に。全部、悪い夢だったらいいんですけどね」
　つぶやくようなイルンの声に、セルマはため息混じりに応えた。金髪の魔法使いはセルマへと目を向ける。
「白銀の魔法使いは、北の里でかなりこっぴどくやられたんだろう？　なら、もうしばらくは大丈夫じゃないのかな？」
「油断は、できませんよ」
　サンドウィッチを一口かじって、セルマは応える。
「姉はオムニの宝珠と、旧代の魔法使いの籠手を持っていますから。もしかしたら、治療魔法だって使える

ようになっているかもしれませんよ」
「そうなったら、こちらのお嬢さんは立場がなくなってしまうね」
　金髪の魔法使いはエリィに目を移して笑ったが、
「その可能性は、十分ありますよ」
　治療術師はこともなげに応えた。治癒魔法は特別な魔法ではあるが、同じ魔法であることにかわりはない。強大な魔力を持った魔法使いであれば、治癒魔法を使えてもおかしくはないだろう。
　エリィの説明に、金髪の魔法使いは「なるほどね」とうなずいた。そしてゆっくりとセルマの元へと歩み寄ると、その横に立ち、彼女が見ているのと同じ方へと目を向ける。
「ずいぶん、力が上がったんだって？」
「杖の、おかげです」
　セルマはイルンには目を向けずに応えた。
「謙虚だね、君は」
「自分の力は、自分がよくわかっていますから」
　白銀の杖を手放せば、自分は凡百の魔法使いでしかない。そのことは、自分が一番わかっている。
「この旅が終わったら、君はどうするんだい、セルマ？」
　唐突に、イルンは話題を変えてきた。セルマは金髪の魔法使いへと目を向けたが、すぐにその視線を戻し、ゆっくりと口を開く。
「里に、帰ろうと思っています。叶うなら、また姉と一緒に、元の穏やかな生活を」
「難しいだろうね、それは」
　容赦のないイルンの言葉に、セルマは下唇をかんだ。
「セシルは……」
「そのくらいにしておけ。姉思いの妹を、あまりいじめるものじゃない」
　なおも何かをいおうとしたイルンに、アイクが横から口を挟む。イルンが小さく息をつくのが聞こえ、
「どうやら、お出ましになったようだぞ。覚悟はいいか？」
　アイクの張りつめた声に、セルマはそちらへと目を向けた。
「ほんとですか？」
「本当か？」
　イルンとエリィとが、ほとんど同時に叫んでアイクの横に立つ。セルマも自分の立っている場所から、奇抜な服の魔法使いが見ている方へと目をこらした。
　二つの人影。まだ少々距離があるので判然とはしないが、片方は右腕だけが白く、もう片方は、長い棒状のものを持っている。
　セルマは息を飲んだ。まず間違いはないだろう。白銀の魔法使いセシルと、ダン・エリックの二人組だ。
　セルマはやぐらに取り付けてある鐘を鳴らし、アイクが大声で白銀の魔法使いがやってきたことを告げる。
　それから少し遅れて、別の場所にもある見張りやぐらからも同じように、鐘の音が聞こえ始めた。
　やぐらの鐘を鳴らしながら。
　――姉さん。これで、終わりにしましょう。
　セルマは、ゆっくりと近づいてくる二つの人影に向けて、想いを送った。

白昼堂々と、真正面から。
無論、白銀の魔法使いが何らかの策を講じた上でこのような登場をしている可能性も大いにあった。
しかしそれでもなお、準備万端整えて襲撃を待っている場所へ、たった二人で、一見まるで無防備にやってくる姿は、衝撃的だった。
「馬鹿かあいつは」
「別人じゃないのか」
そんな声もささやかれる中、しかし白銀の魔法使いを迎えるための態勢は着実に整ってゆく。
里の周囲に強力な結界が張られ、その外側ではよりぬきの魔法使いたちが三、四人ずつのチームを組んで、白銀との直接対決に備える。さらに、防衛魔法に長けた者たちが別働隊として、本隊の魔法使いたちを援護する。
本来、魔法使いが大きな組織を構成することは禁じられているが、今回ばかりは特例中の特例であると、里の主だった者たちの意見は一致していた。
後方で負傷者の救護にあたることになっているエリィと別れ、セルマはハーディ、レイバーグとともに里の外へと向かった。
モリー師とともにやってきた五人の戦士たちは、五つの小隊に一人ずつ組み込まれている。これとセルマたちの合計六小隊が、里の外で白銀の魔法使いを直接迎撃する任を帯びていた。それら六小隊の総指揮を執るのは、東の里の里長であり、もっとも強大な魔力を持つレイバーグである。
セルマたちが里の入口に到着した時には、人員の八割方がそろっていた。
「セシルはどうなっておる？」
レイバーグは厳しい顔で問うた。
「いまだ変化無しです。棒術使いとともに、ゆっくりと里を目指して歩いてきています」
向こうからも、こちらが準備を整えつつあるのは見えているだろう。それでもなお、何をするでもなしに悠然とこちらへ向かってくるというのは、よほどの自信のあらわれか。
「まったく、白銀というのは大した魔法使いだよ」
レイバーグは毒づいた。ほどなくして白銀に相対する人員のほぼ全てが揃い、老魔法使いは一同を見回した。
「やつが何を考えているかはわからぬが、こちらは打ち合わせどおりにゆく」
魔法使いたちの返事を待つ間もなく、レイバーグは「ゆくぞ」と宣言した。
それを合図に、魔法使いたちは己の持ち場と散ってゆく。戦士が一人ずつ配された主力隊は、二部隊ずつ、中央と左右の両翼にわかれる。レイバーグが直接指揮を取る中央隊は、正面から白銀とぶつかり、それを受け止める役目を担う、精鋭の集団でもあった。
中央隊がセシルを抑え込んでいる間に、左右両翼の部隊が接近、白銀の魔法を封じ込めるというのが、里の魔法使いたちが立てた作戦だった。
万が一これを突破されても、レイバーグを始めとする強力な魔法使いとの交戦を経れば、いかにセシルといえども相当に消耗しているはずである。そこに、別に編成された魔法使いたちが、第二陣として挑む。
さらにそこを突破されても、里の周囲に張られた強力な結界が侵入を阻み、最後の砦となるジアスの宝珠が安置されている建物でもまた、強力な結界と、モリー師を始めとする魔法使いたちが待っている。
三重四重に作られた防衛線は、いかに白銀の称号を擁するとはいえ、たった一人の魔法使いで突破できるものではないだろう。
――お願い、姉さん。
前を歩く師の背中を見ながら、セルマは想いを向けた。

魔法使いたちは、皆一様に静かだった。ハーディでさえもが、おし黙ってセルマの横を歩いている。
いくらも歩かぬうちに、セルマはその視界に姉の姿をとらえていた。白い魔導の籠手を右手につけた魔法使いの負傷は、遠目に見る限り癒えている。
ほどなくして、白銀の魔法使いはその歩みを止めた。それに呼応してレイバーグらも足を止めたが、左右に展開した部隊は彼女を包囲すべく、その足を早める。
セシルの右腕がゆっくりと持ちあがる。セルマが姉の意図に気付くのと、レイバーグが声を出すのとは同時だった。
「来るぞ！　防御魔法を！」
言葉と同時に、セルマは杖を構えた。少し遅れて他の魔法使いたちも杖を構える。たちまちのうちに強力な魔法の障壁が幾重にも張られ、それにわずかに遅れてセシルの魔法が発現した。
強力な魔力のかたまりがセルマたちに襲いかかるが、魔法障壁によってその威力は何分の一にも減衰する。レイバーグの足元に着弾した魔法は彼らに被害をもたらすことはなかったが、自分たちの作り出した障壁が破られてしまったことに、里の魔法使いたちが動揺する。
「気を緩めるな、次が来るぞ」
レイバーグの叱咤を聞きながら、セルマもまた少なからぬ衝撃を受けていた。
――姉さん。
向こうから、こちらが見えていないはずはない。姉はそこにいる師と実の妹に向けて、なんのためらいもなく魔法を放ってきた。
――私も師匠も、姉さんにとっては倒すべき敵でしかない、ということなの？
長く感傷に浸る暇もなかった。
「セルマたちはそのまま障壁の維持。セシルの相手は私がする」
師の声にはっとして、魔法への集中を高める。同時に、レイバーグが杖をふるった。雷撃が白銀の魔女へと伸びるが、魔法は目標に到達するよりも早く、その脇に控えていた棒術使いに叩き落とされる。
すぐに、お返しとばかりに白銀からも同じ魔法が飛んできたが、それはセルマたちの障壁によって打ち消された。
セシルが、左右にちらちらと目を向けた。そしてかたわらに立つ棒術使いに何事かを話しかけると、セシルはセルマらに向けて魔法を放った。わずかに遅れてダン・エリックが猛然とこちらへと駆け出す。セシルの魔法を障壁が受け止めるまでの間に、棒術使いはその距離を半分ほどにまで詰めていた。
「俺たちがいく！　じいさん、援護してくれ」
いうや否や、ハーディともう一人の戦士はダン・エリックへ向かって駆け出した。
こちらへと肉薄していた棒術使いは、すぐに戦士たちと剣を交えられる距離にまで接近した。二人の熟練した戦士を相手に、しかしダン・エリックは一歩も譲らない。二本の剣と棒とが激しく打ち合わされ、火花を散らす。
戦士たちはちょうどレイバーグとセシルとを結ぶ直線上で剣を交えている。これでは、直接相手を狙う魔法を放てば、味方をも巻き添えにしてしまう。
レイバーグは大きく舌打ちして、大量の光の矢を作り上げた。初歩的な攻撃用の魔法で、威力も決して大きくはないが、この魔法であれば軌跡を操ることができる。
放たれた矢は戦士たちを迂回して白銀の魔法使いの元へと届いたが、あらかじめ防御魔法を使っていたのだろう。光の矢のことごとくは、目標に当たる前に霧消した。
セシルの意図は明らかだった。こちらが手を出しかねている間に、左右の部隊を片付けようというのだ。レイバーグは魔法の射線から戦士たちを外そうと位置を移動したが、棒術使いもまた巧みにその位置を変

え、白銀の魔女に狙いを定めさせてはくれない。
　そうこうしている間に、右手からセシルへと迫っていた部隊が、最初の標的となった。魔法使いたちの足元で巨大な爆発が起こり、彼らはなすすべもなく宙に舞う。異変に気付いた左翼の魔法使いたちがセシルへ向けて魔法を放ったが、その魔法は効果を現す前に立ち消えた。
　次の瞬間、轟音とともにセシルと左翼の魔法使いとの間に、巨大な炎の壁が出現した。炎の壁は立て続けに彼らの四方を囲んでそびえ立ち、その姿を隠してしまう。
　セルマの隣に立っている魔法使いが激しく動揺している。
「落ち着け。あれほど大きな魔法を使えば、奴とて相当に消耗する」
　再びレイバーグの叱咤が飛んだ。
　直後、ハーディとともにダン・エリックと剣を交えていた戦士が、横薙ぎに払った棒の餌食となった。何かがつぶれ、くだけた鈍い音がセルマの立っているところにも届き、あらぬ方に首の曲がった戦士がそのまま地面に倒れ伏す。
　ハーディが悪態をつくのが聞こえ、わずかに遅れて棒術使いが射線軸を飛び出す。ほとんど同時に白銀の魔法使いから魔法が放たれ、ハーディは顔色を変えてその場を飛び退いた。
　魔法はセルマたちの維持している障壁によって受け止められたが、魔法を回避したハーディと棒術使いの距離が開いた。それを好機とばかりに、棒術使いがこちらをめがけて駆け出す。
　ハーディがなにやら叫んでその後を追い始めたが、いかんせん両者の間に距離が開き過ぎていた。そのまま黙って見ていれば、彼が棒術使いに追いつくころには、ここにいる魔法使いの一人や二人は討ち倒されているだろう。
　このままなにもしなければ絶望的な状況になるのは目に見えていたが、魔法を打ち消してしまう金属の棒を持っているダン・エリックに対し、魔法使いたちは手も足も出ない。
　――まだ、やりようはある。
　迫り来る棒術使いの姿を見ながら、セルマは思った。自分が障壁の維持から抜けることで一時的にその力は弱まるが、今、眼前の直接的な脅威に対応しなければ、状況はますます悪化する。
「障壁の維持をお願いします！」
　セルマはいい放つと魔力の供給を断ち、ダン・エリックへと向き直った。彼女の動きに気付いてか、棒術使いがその速度をわずかにゆるめる。
　セルマの魔法は奇策に近い。成功しようがしまいが、一度やってしまえば二度は通用すまい。セルマは肉薄するダン・エリックの姿を見ながら、慎重に魔法の発動点を選び、意識を集中した。
　セシルの魔法が、彼女らを襲う。一人分の魔力の供給がなくなった障壁はそれを受け止め切ることができず、熱と衝撃とが届いた。それでもセルマは集中を途切れさせることなく、魔法を発動する機会をうかがい続ける。
　――今だ。
　ついに、棒術使いがそこへ足を踏み入れた。杖を振るうと、棒術使いの足元の地面が一瞬にしてかき消え、足場を失った男はなすすべもなく穴へと吸い込まれる。
　相手に魔法を無効化する能力があるのなら、間接的に無力化すればいい。二週間の魔法の研究の中で閃いた案だった。深い落とし穴を作り、その中に落としてしまえばいいのだ。魔法を無効にする棒でも、地面に開けられた穴をふさぐことまではできないだろう。
　目論見は見事に成功したかのように思われたが、地面に穴ができあがるまでのわずかな時間で、ダン・エリックは巧みに身体をひねり、棒を持っていない左手で穴のへりに手をかけていた。
　それでも、一時的にせよ、棒術使いが無力化されたというのは事実だった。

よくった、嬢ちゃん。ハーディの快哉が届いたような気がした。戦士はここぞとばかりに棒術使いへ向けて突進したが、その足元へ向けてセシルが続けざまに魔法を放つ。わめき声をあげて、戦士は前進を中断した。
その隙をついて、レイバーグはセシルへ向けて魔法を放ったが、それは目標の眼前で立ち消える。
「奴は化け物か？」
セルマの横で悲鳴じみた声があがった。左翼の魔法使いたちを包んだ炎の壁は今も燃えさかり、セルマたちに向けて大きな魔法が何発も撃ち込まれている。それに加えて、セルマたちが四人がかりで維持しているものと同規模の魔法障壁を作り上げているのだ。常人ならば、そのいずれか一つの魔法を使うだけで手一杯だろう。悲鳴があがるのも無理はない。
「あきらめるな。必ず勝機はある！」
レイバーグが叫んだ、次の瞬間。
セルマたちの眼前に、炎の壁が立ち上がった。
壁は、巧みに魔法障壁のわずか手前に立てられた。魔法の発現域をこれほどにきめ細かに制御できるのはさすがという以外になかったが、同時に、その能力が敵になればどれほど恐ろしいものであるかをまざまざと見せつけられる。
壁のあげる炎の熱気が、セルマの身体をじりじりと炙ってゆく。それで即座に命がどうこうなるものではなかったが、このまま壁を四方に立てられてしまえば、身動きができなくなるのはもちろん、やがておし寄せる熱波によっていずれは倒れてしまうだろう。
「セルマ、私と一緒にに消去魔法を！　残りの者は障壁の維持！」
レイバーグは大声で指示を出した。返事をする暇もなく、セルマは老魔法使いとともに、目の前にそびえる炎の壁へ向けて魔力を集中させる。
二人がかりでも、炎の壁を打ち消すのは容易ではなかった。打ち消しても打ち消しても、炎は際限なく燃え続ける。
――このまではいずれ……。
不吉な予感を、セルマは感じとっていた。しかし、今は師の指示に従う以外にできることはない。身体は熱を帯びているというのに、彼女は悪寒を覚えていた。
悪寒を振り払うように、炎の壁に向けて魔法を放った直後。
おし寄せる熱波が唐突にやみ、視界一面を埋めつくしていた炎がかき消えた。
その、眼前に。
セルマは、姉の姿を見た。
狼狽する里の魔法使いたちの声を。そして師の驚愕の声を、セルマはまるで他人事のように聞いていた。
次の瞬間、足元が大きく揺れ、彼女は周囲にいた魔法使い共々、軽々と宙に舞った。
目まぐるしく変化する視界の中、少し離れたところでハーディがぐったりと倒れているのが見える。
数瞬後、彼女は背中から地面に叩きつけられた。
背中から全身へと痛みが広がる。わずかに遅れて、一緒に巻き上がった土くれやら小石やらが、セルマに降り注いだ。目を閉じることこそできたものの、半開きになった口の中にじゃりじゃりとした感触のものが大量に入ってくる。身体の痛みのために反応が遅れ、のどの奥へと土埃が入ってしまった。セルマは身体を横倒しにして、激しくむせ込んだ。
咳を一つするたびに背中の痛みが身体中を駆けめぐる。それでも数度の咳でのどの奥の異物感が無くなってくれると、多少は楽になった。
痛みをこらえながら身体を起こして、周囲を伺う。しかし、視界に入ったのは、地面に倒れ伏す魔法使い

たちばかりだった。
　――師匠は？
　同様だった。
　彼女から少し離れたところで、巻き上げられた土埃にまみれて仰向けに横たわっている。セルマは気力をふりしぼって身体を動かし、よたよたと立ち上がった。骨折などはしていないようだったが、身体のあちこちがずきずきと痛む。
　口の中の泥をつばとともに吐き出して、身体を引きずるようにして、師の元へと歩み寄る。ざっと見た限りでは、レイバーグにも目立った外傷はない。セルマは腰を落として、師の身体を揺すった。
「師匠、師匠」
　呼びかけると、老魔法使いは小さなうめき声をあげ、ゆっくりと目を開けた。
「セルマか。大事ないか？」
「どうにか」
　セルマは短く応え、師が身体を起こすのを見つめた。レイバーグは上半身だけを起こすと二、三度頭をふり、周囲を見回す。
「セシルめ、やってくれおるわい」
　忌々しげに呟いて、レイバーグはセルマへと目を向けた。
「セルマ、まだ動けるか？」
「大丈夫です」
「セシルを追うぞ。里の精鋭をそろえてもこのざまだ。残った里の魔法使いだけでは奴にはかなわんだろう」
「はい……」
　うなずきながら、セルマはちらりと、離れた所で伏せっているハーディへと目を向けた。この位置からでははっきりとはわからないが、戦士の身体には目立った傷はない。
　その戦士の向こうには、吹きとばされた右翼の魔法使いたちがばらばらと横たわり、左手に目を向ければ、炎に焼かれた死体が折り重なって倒れている。
「彼らには、後で救護隊を回そう」
　セルマの視線に気付いた老魔法使いが、彼女を気遣うようにいった。セルマは「はい」とうなずいて目を逸らし、師が立ち上がるのに手を貸した。少し遅れて、周辺にいた魔法使いたちが一人二人と目を覚ましはじめる。
「無理はしなくていい。動ける者だけでセシルを追うぞ」
　レイバーグの言葉に応え、二人の男が同行を申し出た。それを確認して、レイバーグが真っ先に駆け出す。セルマがそれに続き、少し遅れて二人の魔法使いも後を追った。
　ほどなくして四人は白銀の魔女に追いついたが、すでに里の入口の防衛線はずたずただった。セシルを迎え撃った者たちは、ほとんどが地に沈んでいる。
　白銀の魔女は、まだこちらに気付いてはいないようだった。セルマの見ている目の前で、一人の魔法使いがダン・エリックの棒に殴り倒され、別の男がセシルの魔法によって、塵一つ残さぬままにこの世から消滅する。
　――姉さん。
　もはや、姉に何かを期待するのは無理なのだろうか。「目の前にいるのは強大な力を持った倒すべき敵だ」自分自身にいい聞かせてみても、「姉を信じたい」という強い思いが、それを受け入れることを強く拒む。
　すでにそのような迷いは断ち切っているのだろう。セルマの横で、レイバーグが問答無用で魔法を放っ

た。青白い光がセシルへと延びる。
　後方からの不意打ちだった。いかに白銀の魔法使いといえども、今から防御魔法を発現させるだけの時間の余裕など、あろうはずがない。ダン・エリックがその魔法に気付いた様子で声をかけ、セシルがこちらを振り返ったが、レイバーグの魔法は、すでにその眼前にまで迫っていた。
　――姉さん！
　セルマが声にならない悲鳴をあげた。
　同時に白銀の魔法使いは、光線を受け止めようとでもするかのように、光線に向けて左手を伸ばした。しかし、生身の身体で魔法を受け止めきれるはずもない。
　光線はセシルを直撃し、彼女はそのまま倒れる……はずだった。

「なんだと？」
　レイバーグが驚愕の声をあげる。
　セシルは、倒れてはいなかった。左手を前方に突き出した姿勢で、じっとこちらへと目を向けている。その左腕は黒く変色して半分ほどの太さになり、いやな音をたてながら白い煙をあげていたが、その身体にはそれ以外の変化はない。普通ならば、それだけでも絶叫をあげてのたうち回らなければならないほどの負傷のはずだった。
　しかし、白銀の魔女は、呻き声をあげるどころか、こちらへ向けてにやりと笑ってさえみせた。
　その顔に、セルマは寒気を覚えた。冷酷な、そして残虐なその笑みを、彼女は一度たりとも見たことがなかった。
　――違う。これは姉さんじゃない。
　セシルは笑みを浮かべたまま、こちらへ炭化した腕を向けている。
　その腕が、唐突に膨らんだような気がした。
　目の錯覚ではないのか。セルマならずともそう思っただろう。しかし、それは錯覚ではなかった。
　炭化して細く短くなっていた腕が元の姿を取り戻し、その指先からどす黒い、鋭く尖った爪が伸びる。やがてその腕には、およそ女性らしからぬ隆々とした筋肉がつき、それを暗青色の硬質な皮膚が覆う。
　異形の腕を得た白銀の魔法使いは、その具合を確かめるかのように自分のそばへ引きよせ、その手を二三度、握ったり開いたりした。
「奴め、魔物と融合しおったか」
　レイバーグが苦々しげにいった。
　そのようなことが可能なのか。可能なのだろう。今の彼女ならば。
　セシルは、そこにいる妹たちのことなど気にもとめておらぬといった風情でセルマらに背を向けると、ダン・エリックを伴って里の入口へと歩き始めた。
「させんぞ！」
　レイバーグが杖を振るった。白銀の魔法使いたちの行く手に炎の壁が立ち上がったが、セシルは歩みを止めることすらせずに、マークの籠手をはめた右腕を持ち上げる。
　壁は音もたてずにかき消えた。セシルは歩きながら、ゆっくりと右手を降ろす。
　隣で、レイバーグが呻く声が聞こえた。たまらなくなって、セルマは大声で姉を呼ばわった。
「姉さん！」
　セシルの歩みが止まる。セルマはその背中へ向けて、もう一度声を張り上げた。
「姉さん、お願いだからもうやめて！」
　姉の顔がゆっくりとこちらへと向けられるのを、セルマは黙って見つめていた。やがてセシルは身体ごと彼女へと向き直り、その視線にまっすぐに応え、静かに口を開いた。
「いったでしょう、セルマ。もう、手遅れなのよ」
「そんなことないわ、姉さん。きっとまだ、やり直す道だってあるはずよ」
「こんな身体になっても？」
　セシルは皮肉げに、己の左腕を持ち上げた。
「無論だ、セシル」
　セルマに代わって断言したのは、彼女たちの師だった。
「犯した過ちを償うのに、遅すぎるということはないのだぞ。その身体を元に戻すことはできないかもしれんが、おまえほどの魔力の持ち主ならば、いくらでもやりようはあるはずだ」
「ほかに選択肢がなかったから、私はこうしているのです」

　セシルは冷淡に応えた。
　――やはり、姉さんの気持ちを変えることは……。
　できないのだろうか。セルマは絶望的に思った。
「悟った風な口をきいてるんじゃねえよ、ひよっこが」
　吐き捨てるような言葉は、唐突に背中からもたらされた。振り返れば、そこには息をはずませたハーディと、さらにその後方には治療術師の少女が控えている。セルマは気付いていなかったが、混乱の中、エリィが負傷者の救援に向かっていたのだろう。
「おまえの妹と師匠が、二人して『まだ間に合う』っていってるんだ。知った風な口をきいててめぇから袋小路へ行く前に、こいつらの想いを無駄にさせねぇようにするほうが大事だろうが」
　ハーディの苛立ちまじりの言葉は、しかし白銀の魔女にわずかでも感銘を与えるようなことはなかった。
「あなたのいうことを含めて、もうほかに選択肢がなかったのです、戦士さん」
「そんなのは、もっと追い詰められている奴のいう台詞だぜ、白銀」
　ハーディの返答と同時に、セシルの横に控えていたダン・エリックがこちらへと向かってくる。
「それがてめぇの答えか！」
　ハーディは吠え、ダン・エリックを迎え撃つべく駆け出した。セシルはその姿を見送りもせずに背を向け、里の入口を守る結界に向けて右手をかざす。
　戦士たちの武器が打ち合わされるのと同時に、セシルへと向けてレイバーグの魔法が放たれる。魔法は目標に到達する寸前で、激しい光を放って消滅した。
　セシルの魔法が発動する。
　大勢の魔法使いによって作られた結界は大きく歪みこそしたものの、その攻撃を持ちこたえた。
「姉さん！」
　無駄と知りつつも、セルマは姉を呼んだ。しかしセシルはもう、その呼びかけに応えることはなかった。再び、里の結界へと向けて魔法を放つ。
　今度も結界は破れることはなかったが、その歪み方が先ほどよりも激しくなった。最強を誇る結界も、ほどなく白銀の魔法使いの魔力の前にひれ伏すことになるだろう。
「させんぞ！」
　レイバーグは叫び、再び魔法を放った。セシルを襲う魔力の塊は、またも着弾寸前でふっつりと消えた。
　セシルが、うるさげな様子でこちらへと目を向ける。姉の意図を察し、セルマは防御魔法を発動させた。
　ほんのわずかな差で、セルマの魔法が早かった。巨大な炎の球体が彼女たちを襲ったが、防御魔法によって、火球の威力は何分の一かに減衰する。しかし、数人がかりでも完全に防ぐことのできなかった魔法を、セルマ一人で受け止め切ることなどできようはずもない。炎は無数の小さなつぶてとなって彼女たちを襲い、その衣服や肌に焼け焦げを作っていく。
　炎のつぶてを払いのけながら、セルマは姉が再び里の結界へと向きなおるのを目の当りにしていた。何かしたくとも、今は自分の身を守ることで精一杯だった。その間にも、白銀の魔法使いは魔導の籠手を身に着けた腕を結界へと向ける。
　セルマたちが炎のつぶてを全てやり過ごすのと、セシルの魔法が発動するのとは、ほとんど同時だった。
　里の結界が大きく歪む。その魔法を二度も耐え抜いた結界は、しかし今度は元の姿を取り戻すことができなかった。元に戻ろうとする力は、それを壊そうとする力に屈してはじけ飛び、ついに里を守る三枚目の壁が打ち砕かれた。
　セシルが、再びこちらへ顔を向ける。
「いかん、くるぞ！」

レイバーグの叫びは、セシルの魔法の発動によってかき消された。セルマの目の前の地面が激しい地響きと共に真っ二つに割れ、白銀の魔法使いを追う道を閉ざす。続けざまにセルマたちの足元に、目には見えない衝撃波が撃ち込まれた。大量の土が激しく舞い上がり、彼女の視界を奪う。
土は相当に高くまではねあげられたらしく、下からの土くれの襲撃がおさまると、今度は頭上から土砂の雨が降ってくる。
ようやく視界が戻ったセルマが見たものは、結界の破られた里の入口と、地面に伏せっているハーディの姿だった。

師の率いていた一団を撃退し、里の入口に張られていた結界さえ破壊してしまえば、あとは大きな障害はなかった。西の里の戦力を考えれば、これ以上の抵抗を続けることはできないはずだ。
師が追い付く前には、もう一つの宝珠を得ることはできるだろう。
彼女はダン・エリックを従え、立ち向かってくる魔法使いたちを圧倒的な力で粉砕しながら、ジアスの宝珠が安置されている建物へと進んでいった。
やがてたどり着いた建物の前には、彼女の同郷の魔法使いたちの姿があった。彼女も幾度か世話になったモリー師と、同世代では彼女に次ぐ魔法使いと目されているイルン。そして何度か姿を目にしたことのある、奇妙な柄の衣服をまとった魔法使い。名は、アイクといっただろうか。
「さすがだね、セシル」
変貌を遂げている彼女の左腕は見えているはずだったが、イルンは涼やかな笑顔を浮かべて口を開いた。
「そこをどいてください」
イルンの言葉には応えず、彼女はモリー師を見つめて短くいった。無視された格好になったイルンは、けれどもやはり何も感じていない様子で口を開く。
「悪いけど、きみをここで食い止めるのがぼくたちの仕事なんだ」
その言葉が終わるのと同時に、三人の魔法使いは杖を振るった。三つの魔法が同時に彼女に襲いかかったが、その一つはダン・エリックが叩き落とし、残る二つも、あらかじめ展開されていた障壁によって打ち消される。
三人の魔法使いは、黙ってその様子を見ているようなことはしなかった。モリー師を中央に、右手にイルン、左手にアイクと散開して彼女を取り囲む。
「正面を頼みます」
短い言葉に、ダン・エリックは無言で従った。棒を構えてモリー師に襲いかかり、老境の域に達した魔法使いを打ちすえる。魔法使いはダン・エリックの俊敏な動きについてゆけずに、打擲の一撃でくずおれた。
その間に、彼女は金髪の魔法使いへと狙いを定めた。右手に持った宝珠から引き出された魔力が物理的な力へとその姿を変え、彼女の旧友へと襲いかかる。魔法の一撃は金髪の魔法使いの首から上を粉微塵に消し去り、その身体を数メートルも吹きとばした。
三人の魔法使いが彼らへと挑みかかってから、わずか数瞬。残る一人に目を向けると、アイクは杖を構えたまま、呆然と彼女を見つめていた。
「無駄な抵抗はしないで。私も、無益な殺生はしたくない。なにもしなければ、私たちもあなたに危害を加えるつもりはないわ」
彼女は静かに宣言した。
やがて、奇抜な衣装をまとった大柄な魔法使いは、その杖をゆっくりと降ろした。
「賢明な判断ね」

　彼女はぽつりといって、わざと見せつけるようにゆっくりと、建物の入口へと歩み寄った。里の入口と同様、ここにも強力な結界が張られていたが、四度目の魔法でその用をなさなくなった。
　彼女は、ダン・エリックを伴って建物に入った。いくつかの部屋を通り抜け、ひときわ広い部屋のその一番奥に、目指すものはあった。
　ゆっくりと、それへと近付いていく。
　石造りの台座の上に静かに鎮座している、薄桃色の光を放つ魔法の石。
　その石に手を触れることができるところまで近付くと、彼女は一度息をついて、ダン・エリックへと目を向けた。
「もしものときは、あとのことはお願いします」
「わかっている」
　ダン・エリックがうなずいたのを確認して。
　彼女は、ゆっくりとジアスの宝珠へと手を伸ばした。

　惨澹たる有り様の里を抜けて、宝珠の安置されている建物にたどり着いたセルマたちを待っていたのは、変わり果てた姿になった二人の魔法使いと、呆然とあらぬ方を見つめている遠国出身の男だった。
　レイバーグが何度か声をかけてようやく我を取り戻したアイクは、「すみません、何もできませんでした」とがっくりとうなだれた。
「気にするな。生命があっただけでもきみは幸運だった」
　アイクを慰めて、レイバーグは結界の破られた建物の入口を見つめた。
「宝珠はもう、奪われたと思うしかないか」
　呟いて、老魔法使いはアイクに、白銀の魔法使いが出てきたかを問うた。建物の出入口は一つだけ。宝珠を得たセシルが外に出るには、再びここから出てくるか、あるいは建物を破壊する以外にない。
「奴はまだ中、ってことか」
　アイクの返事を聞いて、ハーディは建物を睨みつけた。
「どうすんだ、じいさん。このまま奴が出てくるのを待つか？」
「いや、中へ行こう。建物の中ならば、セシルもあまり派手な魔法は使えまい」
　応えて、レイバーグは入口へと歩み寄っていった。その後にハーディが続き、その背中を追ってセルマとエリィも歩き出す。
「あの……」
　控えめな声が後ろからかかり、セルマは立ち止まって振り返った。
「俺も、ついていってもいいだろうか？」
「無理はしないほうがいいわ」
　思い詰めた表情のアイクに、短く言葉を返す。
「セルマのいうとおりだ、アイク。セシルに後れをとったからといって、それを責める者は誰もおらんぞ」
　セルマ同様立ち止まっていたレイバーグが、諭すようにいった。
「ついてきたいのならばかまわんが、せっかく拾った生命だ、無茶はするでないぞ」
　返事を待たずに、レイバーグは再び歩き始める。
　アイクは神妙な顔で「わかりました」とうなずいて、老魔法使いの後を歩き出した。セルマは彼が目の前を通り過ぎてゆくのを見送り、さらにひと呼吸おいてからその後に続いた。
　建物の中は、静まり返っていた。五人が石造りの床を歩く足音だけが、セルマの耳に届く。

　いくつかの部屋を抜けたところで、唐突にハーディが立ち止まった。
「おい、なんか聞こえねえか？」
　その声に皆も立ち止まる。耳をすましてみるが、聞こえてくる音はただ静寂ばかりだった。
「私には何も……」聞こえない、と応えかけて、セルマは口をつぐんだ。
　何かが聞こえたような気がした。隣に立っていたエリィに目を向ける。やはり彼女にもその音が聞こえたようで、少女はセルマにうなずきかけた。
「師匠」
「私にも聞こえた。何が起きているかはわからんが、急いだほうがよさそうだ。防御魔法の準備を忘れるでないぞ」
「はい」
　うなずいて、セルマは足を早めた師の後を追った。
　部屋を抜けると、その音はより明瞭になった。何かが争っている音だろうか。金属がより硬いものと衝突する音。そして人体への打撃が加わる、くぐもった音。
　部屋の扉に真っ先にたどり着いたのはハーディだった。戦士は勢いよくドアを開け、音の発生源である部屋へと飛び込む。レイバーグとアイクがそれに続き、セルマもまたその後を追って部屋へ入る。すぐそこで立ち止まっているアイクを避けた彼女の目に入ってきたのは、白銀の魔女に打ちかかるダン・エリックの姿だった。
「おいおい、こんなところで仲間割れかよ」
　呆れ半分でハーディが呟く。セシルは敏捷にダン・エリックの一撃を躱して魔法を放つが、棒術使いはその魔法を撃ち落とした。
「どっちに加勢する？」
「決まっておる。私たちは宝珠を守るのが目的だ」
　目的のものは、白銀の魔女の手の中にあった。「よっしゃ」と叫ぶなり、戦士は迷うことなくセシルへ踊りかかった。ダン・エリックの一撃を躱したセシルは、続けざまに受けたハーディの攻撃を回避はしたものの、その体勢が大きく崩れる。
　そこへさらにダン・エリックの棒が襲った。直撃を受けたセシルは床に崩れ落ちるが、その手はしっかりと二つの宝珠を握りしめている。
「これで終わりだ、白銀！」
　気合いとともにハーディが剣を振り上げる。次に訪れる光景を予感し、セルマは目を逸らしたくなったが、懸命にそれをこらえた。これから起きることを見届けることが、唯一彼女ができることだった。
　彼女の想いに気付いているのか、ハーディが振り上げた剣をとめ、ちらりとこちらへと目を向ける。セルマが小さくうなずくと、ハーディは剣を振り降ろした。
　しかし、その刃はセシルには届かなかった。戦士がセルマの意思を確認したわずかな時間で、白銀の魔法使いが次の魔法を発動させる。
　ハーディの足元の床が隆起し、戦士は足をとられて尻餅をついた。直後、様子を伺っていたダン・エリックが白銀の魔法使いへと駆け出す。しかし、棒術使いよりもセシルのほうが早かった。十を越す魔法の矢がダン・エリックを襲う。棒術使いは立ち止まって魔法を打ち払ったが、それだけの時間でセシルは立ち上がり、間合いをあけた。
　わずかに遅れてレイバーグが魔法を放つ。しかし、魔法はセシルに届く前に霧消した。続けざまにアイクの魔法がセシルを襲ったが、効果を発揮することはなかった。
　ようやく立ち上がったハーディがセシルに襲いかかろうとしたが、足元に魔法の乱射を受け、たたらを

踏んで立ち止まる。
　彼らを後目に、いささかにためらった様子もなく、セシルはセルマたちに背を向けた。そのままゆっくりと部屋の壁へと歩み寄り、そこに右手を触れる。レイバーグとアイクが魔法を放ち、ハーディとダン・エリックが彼の元へと走る。
　しかし魔法はかき消え、二人の戦士もまた見えない壁に激突した。
　セシルが手を触れていた壁に、音もなく穴が穿たれる。
　人一人が通るには十分な大きさの穴の向こう側は、そのまま建物の外だった。
「姉さん！」
　妹の呼びかけにも、彼女は振り返ることはしなかった。行く手を遮るもののなくなった道を、白銀の魔女はゆっくりと歩んでゆく。
「姉さん！」
　セルマはもう一度姉を呼ぶと、その背に向けて魔法の炎を放った。炎はセシルの背中を直撃したが、焼けた彼女の衣服の下から現れたのは、その左腕と同じ、暗青色の硬質な肌だった。
　セルマはなすすべもなく、去りゆく姉の背中を見つめていた。

「興味があったのは、白銀の魔法使いという人間だけだった。あいつが魔物に心を奪われた時点で、あいつは俺にとって倒すべき敵となった。それだけだ」
　ダン・エリックは淡々と応え、真正面のレイバーグを見据えた。
　夕刻。セシルが西の里から姿を消したあと、ダン・エリックは自ら武装を解除し、尋問を受けることになった。ダン・エリックの前にレイバーグとセルマ、そしてハーディが並び、その後ろにエリィとアイク。棒術使いの背後には、彼が不穏な動きを見せたらいつでも動けるよう、数人の魔法使いが控えている。
「ほかに訊きたいことはないか？」
「ねえさ……セシルの、魔物との融合は解くことができるんですか？」
　ダン・エリックはしばしセルマを見つめ、やがてゆっくりと口を開いた。
「難しいだろうな。融合を解くには、高度な魔法と莫大な魔力が必要だ」
　予想はしていたが、やはりそのような言葉を聞かされるのは辛かった。セルマは顔をうつむけ、いまだこちらに向いているダン・エリックの視線を逸らした。
「では、セシルがどのような魔物と融合しているかはわかるかね」
　レイバーグの声が聞こえる。
「それはお前のほうが詳しいのではないか」
　短い応えに、レイバーグは苦笑した。
「いくら私だって、魔物についてそれほど詳しく知っているわけではないわい」
　ダン・エリックは老魔法使いに目を向けたが、すぐにその視線を外した。
「俺も、詳しいことは知らん。だが、あれほどの魔力を持った人間の心をねじ伏せることができるのだから、魔物の中でも強力な部類には入るだろう」
　やれやれだな。ハーディがため息をついた。
「白銀の魔法使いに古代魔法使いの遺産。それに今度は魔物かよ。えらい騒ぎになったもんだ」
「できれば、そうなる前に片をつけたかったのだがね」
　やはりため息まじりにレイバーグが応える。重苦しい空気があたりを包み、少しの間、場は沈黙に包まれた。
「あの、いいですか」
　セルマが口を開くと、やはりダン・エリックはじっと彼女を見つめた。その表情からは、どんな感情も見て取ることはできない。
「セシルは、魔人を復活させて何をしようとしているか、知っていますか？」
「知らん」
　ダン・エリックの言葉は素っ気なかった。
「だが、魔物に心を奪われてしまった以上、この国が混乱に陥るのは確実だろう」
　棒術使いは一旦言葉を区切ると、レイバーグへと目を向けた。
「機会は、あと一度だけある。魔人復活の儀式を始めれば、奴は宝珠を手放さなければならなくなる。宝珠が手元になければ、奴の魔法も制限されるはずだ」
　それは確かにその通りだろうが、しかし非常な危険もはらんでいるのではないか。先にセシルが儀式を終えてしまえば魔人は復活し、儀式を始める前にそこに乗り込んでしまえば、無尽蔵の魔力を持った白銀の魔法使いを相手にすることになる。
　うまく時間を合わせるには、迅速かつ慎重な行動が要求される。とすれば、軍を動かすような大がかりなことをするわけにはいかないだろう。
「それで一つ、提案がある」

「提案とは？」
　皆を代表してレイバーグが応えた。
「おれに協力しろ。少なくとも、当面の目的は一緒のはずだ。であれば、戦力は多いほうがいい」
「これはまた思い切った提案だな」
　レイバーグは楽しそうに笑った。
「信用しろとはいわん。何か条件があるのなら、それに従おう。お前たちにとっても悪い話ではないはずだ」
「まあ確かに、お前さんを野放しにしておくよりは、目の届くところにいてもらったほうがありがたくはあるな」
　以前ともに戦ったよしみもあるし、と老魔法使いはハーディへ目を向けた。
「ハーディ、君はどうだね？」
「俺は別段構わねえぜ。寝返りだの裏切りだのってのは、戦場じゃよくある話だからな。俺よりも嬢ちゃんたちはどうなんだ？　仲間や師匠を殺されて、恨み骨髄なんじゃねえのか？」
　ハーディが応え、後方に立っている二人に目を向けると、まずエリィが口を開いた。
「私も、別に構いません。正直いうと、この人に恨みみたいなのはあんまりないんです。あのときはばたばたしていたし、私の友達も師匠も、みんな無事でしたし」
　エリィは続けてアイクへと目を向けた。アイクは神妙な顔で、
「レイバーグ師がいいとおっしゃるのなら、私は反対はできません」
　くそ真面目だな、あんたは。ハーディが茶化すようにいった。
「で、嬢ちゃん。お前さんはどうなんだ？」
　部屋にいる人間たちの視線が自分のところに集まるのを感じながら、セルマはダン・エリックへと目を向けた。
「私が……」
　大きく息を吸い、吐き出す。
「私たちが追っていたのは、白銀の魔法使いです。この人は彼女の元にいたとはいえ、今は袂を分かっています。であれば、この人と協力するのを拒む理由はないと思います」
「無理はしなくていい。そう簡単に信用されないことは、おれが一番わかっている」
　自分の表情がこわばっているのはわかっていた。しかし、「無理はするな」という言葉が、他ならぬダン・エリックの口から出てきたことに、セルマは少なからぬ驚きを覚えた。
「無理をしているつもりはありません」
　セルマはきっぱりと応えた。
「今は、姉の暴挙を止めることが先決です。であれば、協力すべきだと思います」
「それで、おれが信頼できるのか？」
「安心しな、お前が裏切ったときは、俺が後ろからぶった切ってやらあ」
　ダン・エリックの問いに、ハーディが陽気に応えた。
「それでいいんだろ、嬢ちゃん？」
　はい。セルマはうなずいた。
「では、決まりだな。出発は明日の早朝。疲れも残っているとは思うが、踏ん張ってくれ」
　レイバーグはうなずいて立ち上がった。

　白銀の魔法使いセシルを追うのは、レイバーグら四人にダン・エリックとアイクを加えた六人となった。

また万が一の事態に備え、国軍に連絡をするための伝令が、早々に出発していた。
　出発の準備を整えて、皆で少々遅めの夕食をとる。その後、誰と話しをする気にもなれず、セルマは無言で部屋へひきこもった。
　姉は今何をしているのか。姉を止めるには、もはや力を持ってするしかないのか。ほかに何か手段はないのか。いくら考えても答えの出ない問いを、セルマは発し続けた。
　大きなため息をつくと、部屋のドアを控えめに叩く音が聞こえた。
「セルマさん、いいですか？」
　扉越しに、治療術師の少女の声が届く。
「エリィ？　どうしたの？」
　声をかけて立ち上がる。扉を開けると、不安げな顔を浮かべた少女がそこに立っていた。エリィはセルマの顔を見ると、こわばった表情をわずかにゆるめ、小さく息をついた。
「大丈夫ですか？」
　その問いの意味がわからず、セルマは「え？」と声を返した。
「食事のあと、すごく恐い顔をしてたから。セルマさん、色々と無理していませんか？」
　セルマは微笑みをつくった。
「大丈夫よ。そんなに無理はしてないから」
「でも、今日はいっぺんにいろんなことがありすぎたし。自覚はなくても、かなり参っている、ってことだってありますよ」
「ほんとに大丈夫」
　エリィの心遣いがうれしかった。セルマの表情は自然とゆるむ。
「大変っていったら、みんなだっていろいろと大変なんだし。やっぱりみんな、どこかで無理はしているはずだから」
　そうですか。エリィは小さく息をついた。
「でも、本当に無理はしないでくださいね。治療術は人の身体を癒すことはできるけど、壊れてしまった心は、取り戻すことはできないんですよ」
「大丈夫だってば」
　エリィの表情はひどく真剣だったが、逆にそれがセルマの気持ちを楽にしてくれた。もう一度微笑んで、口を開く。
「私だって、魔法使いの端くれなんだから。そんなに簡単にどうかなってしまうような訓練は、受けていないわ」
「それはそうでしょうけど」
　エリィはなおも心残りがある、といった様子ながらも、彼女の言葉を受け入れたようだった。何かを考えているふうで、少女は少しの間セルマを見つめたまま黙っていたが、やがて意を決したように「あの」と口を開いた。
「セルマさんは、お姉さんをどうしたいんですか？」
「どう、っていうのは？」
　唐突な問いに少し戸惑って、セルマは首をかしげた。
「このままお姉さんと戦って私たちが勝てば、お姉さんは間違いなく死んでしまいますよね。セルマさんは、それでいいんですか？」
　真剣な眼差し。少女はまっすぐにセルマの目を見つめていた。
「それは……」

　なんと応えればいいのか。わずかな逡巡の後、セルマは思い切って口を開いた。
「それは、できることならなんとかして姉さんを説得して、姉さんに帰ってきてもらいたいわ。姉さんが宝珠を奪ったことも、あんな姿になったことも、何か理由があってのことだ、って思いたいし」
　姉は敵だ。強大な力を持った、倒すべき敵だ。そう割り切ることができず、姉を信じたいと思っている自分がいる。姉に帰ってきてもらい、また元の平和な暮らしを営みたいと思っている自分がいる。
　セルマは静かに、自分の思いを語った。
　エリィは彼女をじっと見つめていたが、やがて「よかった」と微笑んだ。
「私、ちょっと心配だったんです。セルマさんがお姉さんのこと、本気で割り切っていたら、って。たった二人の家族が本気でいがみあうなんて、悲しすぎるじゃないですか」
　ほっと息をついて、エリィは目線を廊下の奥へと移した。
「セルマさんの想いがあれば、きっとお姉さんだってわかってくれますよ、ね、アイクさん？」
　少女につられてそちらに目を向けたセルマは、唐突に出てきた名前に面食らい、そして少女の視線の先、物陰から姿を現した突飛な柄の服を着た魔法使いに、もう一度驚かされた。
「アイクさんも、セルマさんのこと、心配していたんですよ」
　エリィの言葉を聞きながら、セルマはこちらへと歩み寄ってくるアイクを見つめていた。アイクはセルマの視線を微妙に逸らしながら、やがて二人の近くで立ち止まる。
「ありがとう、心配してくれて」
　少し迷ってから、セルマは口を開いた。アイクはやはり彼女とは視線を外したまま、「気にするな」と短く応えた。
「ひとつ、思いついたことがある」
　続けてアイクはいった。
「推測の上に推測を重ねた話だから、そのあたりのことも踏まえて、話を聞いてほしい」
　彼の言葉は慎重だった。セルマはその言葉を十分に吟味して、「ええ」とうなずいた。
「まず、白銀の魔法使いの心変りなのだけれども、俺には、あの人の普段の言動から、そういうものに手を出すようには見えなかった」
　長年ともに暮らしてきた姉である。セルマはアイクの言葉に同意した。
「だから、俺はあの人が魔物と融合したのが、直接の原因ではないかと思うんだ。魔物と融合したために、その意識が魔物に操られ、あの人はあんなことをしたのではないかと」
　セルマは、アイクが何をいいたいのかに気付いた。
「姉さんと魔物の融合を解けば、姉さんは元に戻ると？」
「まあ、推測だ」
　アイクは短く応えた。
「ダン・エリックも、融合を解くのは難しいが不可能ではないといっていた。だとすれば、あの人を救うことができるもしれない。確率は低いが、やってみる価値はあると思う」
「レイバーグ師は、あんまり乗り気ではなさそうでしたけどね」
　横からエリィが付け足す。それは確かにそうだろう。ただでさえ強大な魔力を得ている白銀の魔法使いを相手にしなければならないのだ。彼女と魔物との融合を解くなどと、そのような悠長なことをしている暇などあろうはずもない。
　それでも、万にひとつでも可能性があるのなら、それに賭けてみたかった。
「レイバーグ師の了解はとってある。ただ、師はこれに関しては何の協力もしないそうだし、それで師の足を引っ張るようなことだけはするなと念を押された」

「アイク」
　セルマは大柄な魔法使いの顔を見つめた。
「ありがとう。わざわざそんなことまで」
「気にするな。俺も、あの人に恩があってな。できることなら、あの人に元に戻ってもらいたいんだ」
　アイクはやはり、彼女の視線を逸らして応えた。その頬が少し紅潮しているのは、セルマの気のせいだろうか。
　くすりと、エリィが笑うのが聞こえた。
「そうしたら、セルマさん。さっそくですけど、図書館にいきませんか。何か、そういう魔法について書かれた文献があるかもしれないし」
　そうね。セルマはうなずき、三人はその足で里の図書館に向かった。幸い図書館は大きな被害は受けておらず、司書もまた文献の貸出しに快く応じてくれた。時間もそれほどあるわけでもなかったので、三人はそれぞれが「これは」と思うものを一冊ずつ借り受けた。
　――姉さん。
　分厚い本を両腕で抱きかかえるようにして歩きながら、セルマは姉へと思いを馳せた。姉と魔物を分離させれば、姉は元に戻ってくれるのか。
　それ以前の問題として、本当に自分の魔法で姉と魔物を分離できるのか。
　いくつもの不安が頭の中を去来するが、今はアイクがもたらしてくれた可能性に賭けてみるしかない。
「お姉さん、助けられるといいですね」
　エリィの言葉に、セルマはさまざまな思いとともに、うなずいた。

第四話　得たもの、そして失ったもの

　姉を追って始まった旅は、途中で彼女を追い越して迎え撃つための旅となり、そして再び、その背中を追い求めることとなった。
　やはりセルマたちよりも一日ほど先行する白銀の魔女は、その痕跡を残しておらず、旅立ち当初と同様に彼女に追い付きつつあるのか、引き離されているのかもわからない、もどかしい日々が続いた。
　その合間に、セルマたちは西の魔法使いの里から借り受けた書物の研究を進めていたが、成果ははかばかしくはなかった。
　深刻な表情で顔を突き合わせているセルマたちを見かねたのか、ハーディが一度、レイバーグに「ちったあ手伝ってやったらどうだ」と声をかけたが、老魔法使いは首を横に振った。
「なんの協力もしないといったからな。それに、残念だがそちら方面の魔法の知識は、セルマたちと大して変わらんのだ。私が協力したところで、突き合わせる頭が一つ増えるだけでしかないよ」
　セルマはダン・エリックにも相談してみたが、棒術使いもまた淡々と応えた。
「俺は、魔法のことは知識として知っているにすぎん。魔法を構築し、発現させるのはお前たち魔法使いの仕事だ」
　旅を続ける六人の口数は、決して多くはなかった。セルマは日中も姉を救うための魔法のことで頭がいっぱいだったし、エリィはそんな彼女を気遣ってか、その近くを歩くことが多かった。アイクとダン・エリックもまた、必要がなければ滅多に口を開くことはない。唯一ハーディだけが以前と変わらぬ様子だったが、話し相手がこうも少なければ、やはり口数が少なくもなろう。
　唯一の話し相手であるレイバーグを相手に、ハーディは問うた。
「封魔殿っつったっけ？　じいさんはそこに行ったことはあるのか？」
「二、三度な。サイフェルトの封印を守るのも、この国の魔法使いの使命だからな」
　なるほどねえ。戦士はうなずいた。
「じゃあ、魔人の封印の解き方なんかも知ってるのか？」
「ああ。魔人を封じ込めた祭壇の両脇に、宝珠をはめ込む台座があってな。そこに宝珠をはめて、然るべき手順で儀式を行うと、宝珠の魔力が魔人の元に戻って、魔人が復活する、という寸法だ。ついでにいっとくが、儀式の詳しい方法は限られた者にしか伝えてはいかんということになっているから、ここで話すわけにはいかんぞ」
　先手を打たれた格好になったハーディは、つまらなそうに舌打ちしたが、すぐに違う疑問が浮かんだようだった。
「じゃあよ、その儀式ってのは、始めたらすぐに終わるようなもんなのか？　儀式に時間がかかるようなら、その隙をついて宝珠を奪うなり、白銀野郎をぶちのめすなりできるんじゃねえのか？」
　二人の会話を聞くともなしに聞いていたセルマも、その問いにはっとして、二人のほうへと目を向けた。
「さて、どうかな」
　老魔法使いは首をかしげると、唐突にちらりとダン・エリックを見やった。ダン・エリックもまたレイバーグを一瞥し、ハーディへと目を向ける。
「儀式そのものには、さほど時間はかからないと聞いている。お前のいうように、儀式の隙を狙ってセシルを襲うのは難しいだろうな。だが、魔人が宝珠の魔力をすべて取り込むには、小一時間ほどはかかるはずだ。その間にどちらか片方でも宝珠を台座から外してしまえば魔人の復活は阻止できるだろう」
「てことは、その一時間が勝負、ってこったな」

「まあ、そういうことになるかな」
　話すべきことを話して再び沈黙したダン・エリックに代わって、レイバーグがうなずいた。
　セルマは、黙々と歩き続ける棒術使いへと目を向けた。この男が何者であるかを詮索するのはやめることにした。出自を知る者は誰もいなかったし、本人に尋ねても応えは返ってこない。
　けれども、魔法使いの間でも秘されていることを知っているほどの男が、なぜ姉を救うことに関しては、何も教えてくれないのか。
　純粋に知らない、という可能性ももちろんあるが、どうしてもセルマには、そうは思えなかった。
　あるいは、知ってはいるがもはや手遅れで、それゆえに彼は口を閉ざしているのか。しかし、それならそれで、この男ならば「手遅れだ」とはっきりというだろう。
　いずれにせよ、なにかしら答えを知っているのなら、それを教えてほしいというのは、彼女の切実な願いだった。

　やがてセルマたちは、フェルト山の麓に広がる樹海へと足を踏み入れた。土地の者でも滅多に足を踏み入れることがないという樹海の奥には無論道などあろうはずもなく、歩くだけでも相当に骨が折れる。
　しかし、収穫もあった。そんな鬱蒼とした森の中で、まだ新しい野営のあとが見つかったのである。さらにハーディが周辺を調べにいくと、一方向に向かって木の枝がところどころ折れ、下生えにも踏み荒された形跡が残っていたという。
「どうなんだ、じいさん。俺たち以外に、こんな酔狂をするのはそうはいねえと思うが」
　うむ。レイバーグはうなずいた。
「方角も合っているし、この跡からして野営しているのはごく少ない人数だろう。間違いあるまい」
「にしても、不用心だな。野営のあとくらい始末していきゃいいのに」
「その必要もないのだろうさ」
　レイバーグはセシルが向かっていった方を見据え、呟くように応えた。
「私たちに追い付かれても、真正面からぶつかれば勝てる自信はあるのだろう」
　いや。老魔法使いは、何かを思いついた様子で言葉を訂正した。
「むしろ、追い付いてほしいのかもしれんぞ。そうすれば、厄介な敵を先に排除できるのだからな」
　その予測が当たっているのだろうか。白銀の魔法使いとの距離は確実に詰まりつつあった。数日後には、そこを発ってからまだいくらも時間が経っていないとおぼしい、ぬくもりの残る炭化した木片を、ダン・エリックが発見した。
　――姉さん。何を考えているの。
　姉の意図が掴めなかった。師の言葉の通り、わざと追い付かれて自分たちを始末しようという魂胆だったら、もっと他にやりようはあるだろう。しかし、こうして火の始末もそこそこに出発するというのは、先を急いでいるということではないのか。
　そうなると、今度は徐々に距離が詰まってきている、という事実に辻褄があわなくなってくる。姉のほうが身軽なのだから、その距離は引き離されるべきだろう。
　姉が、何の考えもなしにそのような思わせぶりなことをするとは思えなかった。姉は何をしようとしているのだろう。
　いくら考えたところで答えなど出るはずもなかった。
「どっちにしたって俺たちにできるのは、白銀を追いかけることだけだろ」
　物思いに沈むセルマを引き戻したのは、ハーディの言葉だった。

――そうだ。今の私にできることは、姉さんを追い、姉さんを助ける方法を見つけ出すことだけなんだから。
今は、あれこれと思い悩んでいる時ではない。今自分ができることに、全力で当たる。それだけだ。
――姉さん、私は姉さんを……。
救ってみせる。セルマは決意を新たにした。

さらに数日が過ぎた。もう数日もすれば封魔殿に到着できるだろう、ということだったが、未だにセルマたちは、姉と魔物を分離する方法を見つけることができずにいた。
夕食を終えるとセルマとアイク、そしてエリィで集まって議論をするのが日課になっていたが、さすがに手詰まりの感が強い。ここ何日かは、持参した書物を無言でくくるだけの、無為な時間が流れるばかりだった。
携えてきた文献は、どこに何が書かれているかを思い出せるほどに読み込んだ。エリィとアイクの持ってきた書物にも目を通してみたが、結果は思わしいものではなかった。
――もう、だめなのだろうか。
大きくため息をついて、セルマは天を仰いだ。
何をどうやっても、魔法を構築することはできないのだろうか。だからこそ、師も、ダン・エリックも何も教えてくれないのだろうか。
もう一度ため息をついて視線を動かすと、剣の手入れをしているハーディと目が合った。
「はかばかしくねえみてえだな」
はい、とうなずくと、ハーディは視線を剣へと戻した。
「手詰まりになった時は、一歩退いて大局を眺めてみろ、なんて言葉もあるぜ」
「はあ……」
煮え切らない返事を返して、ハーディを見つめる。戦士は、剣の手入れを再開した。
「俺は魔法のことは専門外だから、印象だけでものをいわせてもらうけどな。嬢ちゃんたちは、小手先の技術論だけを話し合っているんじゃないのか？　……いや、もうそういう細かい技術がどうこう、っていう段階にまでなっているんだったら俺の勘違いだから、聞かなかったことにしてくれ。ただ、俺が嬢ちゃんたちの話を聞いている限りだと、大きな方向も見えないうちから、細かいところに話がいっているみたいな気がしたからよ」
セルマはアイクとエリィへと目を向けた。二人も同じようなことを感じたようで、三人の視線がほぼ同時に交錯する。
「ありがとうございます」
いうと同時に、セルマは手元の書物を開いた。ページをくくって、目的の箇所を探し出す。一番最初に検討はしてみたものの、すぐに致命的な欠陥がわかってしまった箇所だった。とりあえず、その欠陥には目をつむって、魔法を構築していく。
考慮すべき要素が多すぎて、頭の中では魔法を構築するのが困難になってきた。荷物のすみに入れておいた紙と筆記具を取り出し、魔力構成を記していく。
「何かわかったんですか？」
エリィがセルマの手元をのぞき込んだ。
「ちょっと待ってて」
猛烈な勢いで書物を開いては内容を確認し、試行錯誤を繰り返して魔力の構成を構築していく。エリィ

とアイクは無論のこと、この場にいるすべての者の視線が自分に注がれていることに気づく間もないまま、セルマは作業に没頭した。
　やがて。
　――できた……の？
　半信半疑のまま、セルマはもう一度その魔法を検討してみた。魔力の構成、発現条件、その効果。
　本当にこれで合っているのか。疑いを捨て切れぬまま、セルマは紙に記された魔力構成を、改めて眺めてみた。
　確かにそれは、人体と、それに融合している異物とを分離する魔法だった。
　魔法は非常に複雑で、致命的な欠陥は結局修正することはできなかった。しかしそれでも、目の前の紙に記されている魔法は、彼女が求めていたものに間違いない。
　大きく息をついて初めて、セルマは周囲の者が皆、自分を注視しているこことに気づいた。
「できたのか、セルマ？」
　勢い込んで尋ねるアイクに、ええ、ととまどい気味に返事をして、セルマは紙を渡した。アイクの目が紙の上を往復し、やがてその表情に驚愕の色が浮かぶ。視線だけで紙が破れてしまうのではないかと思うほどに、アイクは長々と紙を見つづけた。
「よく、これだけ複雑な魔法を構築できたな」
　アイクは小さく息をついて、セルマへと目を向けた。エリィがアイクの横に移動して、彼の持つ紙を覗き込む。
「この時間で、こんな複雑な魔法を作っちゃったんですか？」
　大げさに驚いたエリィの声は、意外に大きかった。
「じゃあこれで、お姉さんを助けてあげることができるんですね？」
　期待に満ちた目でこちらを見つめるエリィに、セルマは小さく苦笑して、首を横に振った。
「残念だけど、一つだけ、問題があるのよ」
「魔力が足りないのだろう？」
　問うたのはダン・エリックだった。セルマは「はい」とうなずきながら、棒術使いがこちらへ歩み寄ってくるのを見つめた。ダン・エリックはセルマの横を通り過ぎると、アイクの持っている紙をひょいとつまみ上げた。
「でも、もう少し魔法の構成を工夫すれば、私たちでも使えるくらいには……」
「無理だな」
　ダン・エリックはセルマの言葉を一言で切って捨てた。そしてセルマの書いた魔力構成を一瞥すると、小さくうなずいた。
「理想的な構成だ。だが、逆にいえばこの魔法は、これ以上手を加えようがない、ということでもある。ここから何かを引けば、魔法は思っている効果をあげることはできないし、何かを足せば、余計に魔力が必要になるだけだ」
　セルマは黙って、その言葉を聞いていた。
「ほかに方法は……」
「ない」
　ダン・エリックの言葉は容赦なかった。セルマは黙って棒術使いの顔を見つめたが、その表情には一片の迷いもない。
「あの、その魔法って、どのくらい魔力が必要なんですか？」
　おずおずと、エリィが口を開いた。

「ここにいる魔法使いの魔力を全部集めてもまだ足りないくらいだ」
　むっつりとアイクが応える。エリィはまた大仰に驚いてみせ、
「それじゃあ、その魔法は使えない、ってことじゃないですか」
「まあ、端的にいってしまえばそういうことだな」
　アイクがそれに同意してうなずいた。
「せっかくセシルさんを助けられる魔法ができたのに、それじゃあんまりじゃないですか。なんとかならないんですか？」
「なんともならないのだよ、残念ながらな」
　それまでずっとおし黙っていたレイバーグが、うっそりと口を開いた。おそらくは、老魔法使いも最初からそのことを知っていたのだろう。だからこそ「何の協力もしない」とセルマたちを突き放したのだ。
「無尽蔵の魔力があった旧代の魔法使いならともかく、今の私たちでは、その魔法を使うことはできんのだよ」
　何を応えることもできない。ダン・エリックは紙をアイクに返し、セルマへと目を向ける。セルマはその視線を受け止めながら、もう一度、その事実を噛みしめた。
　――私たちでは、この魔法を使うことはできない。
　もう、ほかに方法はないのだろうか。姉を救うことは、できなくなったのだろうか。
　エリィとアイク、そしてダン・エリックと師の視線が、こちらに向いている。唯一ハーディだけが、我関せずと、剣の手入れを続けていた。
　やがてダン・エリックがアイクのそばを離れ、レイバーグもまたセルマから目を離す。
　セルマは何をすることもできず、アイクの持つ紙を見つめていたが、やがて。
「俺は、魔法のことはよく知らねえけどよ」
　ハーディがぽつりといった。
「嬢ちゃんたちが追ってる宝珠ってのは、じいさんのいう、無尽蔵の魔力があるんじゃなかったのか？」
　セルマはハーディへと目を向けた。戦士は変わらず、剣の手入れを続けている。
「どうせ俺たちは、儀式の最中にあいつから宝珠をちょろまかさねえといけねえんだろ？　だったらそいつを使って、なんとかできねえのか？」
「できんことはないだろうが、危険だぞ」
　レイバーグが短く応えた。
「巨大な魔力は、それを制御する人間にも負担がかかる。制御しきれないほどに大きな魔力は、術者の命を奪いかねん。それになにより」
　レイバーグは小さく息をついて、ハーディ、そしてセルマへと目を移していった。
「そう簡単に、白銀の魔法使いが宝珠を渡してくれると思っているのかね？」
「それはそうだろうけどな。それでも、うまくいく可能性がねえわけじゃねえんだろ？」
「それは確かにそうだが」
　レイバーグは言葉を濁した。
「ならよ、おれは、嬢ちゃんに協力するぜ」
　ようやく戦士は剣から目を離すと、セルマに向けてにっと笑った。
「せっかくいいところまで来たんだ。魔力が足りねえってだけでチャンスをフイにしたんじゃ、嬢ちゃんだって寝覚めがわりいだろうしな。同じ失敗するんでも、やるだけやって失敗したほうが、後腐れねえだろ？」
「ハーディさん」

　セルマは戦士をじっと見つめた。
「ありがとうございます」
「おう、末代まで感謝しろよ」
　ハーディは豪快に笑って、寡黙な棒術使いへと目を向けた。
「もしお前が土壇場で俺たちを裏切ろうとか考えてねえんだったら、協力してくれねえか？」
「いいだろう」
　ダン・エリックは即答した。話が早いじゃねえか。ハーディは呟くと、再びセルマへと視線を移す。
「て、ことだ。どうせじいさんは白銀野郎の相手で忙しくなるだろうから、俺たちは俺たちで勝手にやらせてもらおうぜ」
　勝手にせい。どうなってもわしゃ知らんからな。レイバーグはむくれ声を出してぷいと視線を逸らし、エリィがくすりと笑った。
　師の声が本気で怒っているようにも思えて、セルマは不安げに呼びかけた。
「師匠」
「わかっとるわい」
　レイバーグはそっぽを向いたまま、先ほどと同じ調子で応えた。
「セシルの相手をして、奴の気を引いておけばいいんだろう？」
　いってから、老魔法使いは何かを思いついたようだった。
「ついでにいっておけばな。融合が進み過ぎていれば、魔物との分離はそのままその者の命を奪うことにもなる。魔物との融合は、時間が経てば経つほど進行する。この先順調にセシルに追い付けたとして、セシルと魔物の分離ができるかどうかは、微妙なところだろう。それでもいいのだな？」
　セルマは、師の顔を見つめた。師は彼女に鋭い視線を投げかけている。
　その言葉を噛みしめ、吟味し、やがてセルマは力強くうなずいた。
「それでも構いません。姉さんを救える可能性があるのなら、それに賭けてみようと思います」
　どうなっても知らんからな。レイバーグはため息混じりに、もう一度繰り返した。
　それから、やけに静かに時間が過ぎていった。
　ハーディは剣の手入れを再開し、アイクは西の里から借り受けた魔法書に目を通している。レイバーグは少し離れたところに座って瞑目し、ダン・エリックはやや離れたところで、棒術の型の訓練を始めていた。
　エリィとセルマは、並んで焚火の前に座り、押し黙ったまま火の番をしていた。
　薪がはぜ、炎が揺らめく。その炎の向こうに、セルマは姉の姿を見ていた。優しかった姉。優秀な魔法使いだった姉。そして……。
「お姉さん、助けましょうね」
　エリィが、火の中へ薪を放りこみながらいった。一瞬だけ炎が大きく姿を変え、姉の姿をかき消す。
「ええ」
　セルマはうなずいた。

そして、その日が訪れた。何事もなければ、夕刻には封魔殿に到着するだろう。
姉との距離も迫っていた。運がよければ、封魔殿に着く前に姉の姿を捉えることができるかもしれない。
思うところは様々だったろうが、「これですべてが終わる」という認識だけは共通していたのだろう。皆が一様に、早朝から目を覚ましていた。
黙々と食事を取り、荷物をまとめ、歩き出す。二時間ほど歩いたところで野営のあとが見つかったが、簡単に検分だけをして、セルマたちは再び歩を進めた。
やはり、セシルも先を急いでいるのだろう。白銀の魔女が移動した痕跡は多々残されていたが、彼女に追いつくまでには至らなかった。
やがて、森が唐突に途切れた。
ろくに草も生えていない広場がセルマの眼前に現れる。その中央には、巨大な一個の岩がそびえていた。
「あれが、封魔殿だ」
岩塊を見つめながら、レイバーグがいった。
それは、単に魔人サイフェルトを封じた祭壇を安置する建物という役割を持っているだけではなかった。それは一個の巨大な岩を魔法でくりぬいて作られており、魔人が復活した際には、一番最初の防壁ともなるのである。
一つしかない出入口には幾重にも魔人よけの魔法がかけられ、岩塊そのものにもまた、強度を増し、風化を防ぐ魔法がかけられている。
「ゆくぞ」
厳かに老魔法使いが宣言し、一歩を踏み出した。
土はこの一帯だけひどく乾燥していた。レイバーグが歩を進めるたびに土埃が舞い、じゃりじゃりと音がする。
セルマがすぐそのあとに続いた。土はやはり乾いた音を立て、同時に彼女は、周辺に満ちている、いやな気配に気付かされた。
空気がねっとりと肌にまとわりつき、ざわざわとした胸苦しさを覚える。この場には自分たち以外にはいないはずなのに、誰かからの敵意に満ちた視線を感じるような気がする。
セルマは思わず立ち止まり、周囲を伺ってしまった。
アイクとエリィ、そしてハーディさえもが、充満している邪悪な気配を感じとったのか、セルマ同様に、不安げな、おぼつかない表情を浮かべて周囲を見回していた。
「気にするな。ここに満ちているのは、サイフェルトの残滓でしかない」
レイバーグが立ち止まり、こちらを振り返った。老魔法使いはすぐに踵を返すと再びを進め、セルマは「はい」と返して、そのあとを追う。
やがて六人は、封魔殿唯一の入口へたどり着いた。岩塊にうがたれた穴は、人一人がようやく通ることのできる程度の幅と高さしかない。
その穴と同じサイズの通路が、奥へ向かってまっすぐに延びていた。通路には、先客によって灯されたとおぼしき、魔法の明かりが光っている。
通路は五十メートルほど続き、その終点にはわずかに濃緑色に光を反射する、黒い金属の扉があった。
通路を抜け、扉を開ける。
そこには無意味とも思えるほどに広大な空間があった。広さはゆうに百メートル四方、天井までの高さも三十メートルあまり。その空間をどうやって照らしているのか、ごく小さな文字で書かれた書物も読めそうなほどに、充分な光で満たされている。
その部屋……部屋と呼ぶには、そこは少々広大に過ぎたが……の壁も床も、今しがた通り抜けた扉と同

じ金属が一面に張られていた。
　中央に、長さ二十メートル、高さ五メートルほどの、小山のような灰色の物体が見える。その物体は、巨大な獣を模した石細工のようであった。小山のように思えたのはその獣の胴体で、獣は上から強い力で押さえ付けられたのか、四肢を投げ出し、頭を向こう側に向けた姿勢をとっている。
　その表面はごつごつした鱗とも刺ともつかないようなもので覆われており、岩をも砕けそうなほどに発達した四肢の先には、一撃で肉を裂き、骨をも切断してしまいそうな鉤爪がのびている。
　――これが……。
　魔人サイフェルトであった。
　魔法使いたちとの壮絶な戦いのさなか、魔人はその姿を巨大な獣へと変えた。さらに続いた戦いの果てに、魔人は持てる魔力をすべて宝珠に奪われ、石と化したという。その伝承の通りの姿が、セルマの目の前にあった。
　そして、石化した魔人のすぐそばには、高さ一メートル、幅十メートルほどの祭壇が設えられていた。その両端には祭壇よりも五十センチあまり高い、直径三十センチほどの金属の柱が立てられている。それぞれの柱の上、向かって右には淡い青色、左手には薄桃色の光を放つ、こぶし大の石が鎮座していた。
　その祭壇の手前数メートル。セルマたちの真正面に。
　彼女が立っていた。
　右手には白い籠手。左手は剥き出しになった暗青色の魔物の腕。漆黒の髪は短く切り揃えられ、妹との血のつながりを感じさせる端正な顔には、何の感情も浮かんでいない。
　白銀の魔女は、静かにセルマたちを見つめていた。
「姉さん！」
　こらえ切れなくなってセルマは叫んだ。セシルは、彼女にごく小さな笑みを返した。
「もう、あれこれいうのはやめましょう、セルマ。宝珠の魔力が魔人の元へ戻るのが早いか、それともあなたたちが二つの宝珠のどちらかをここから取り外すのが早いか、それだけよ」
「姉さん！」
　はからずも、姉を呼ぶ彼女の声が始まりとなった。セシルの腕から雷撃が放たれ、レイバーグとアイクの防御魔法がそれよりも一瞬早く発現する。雷撃は防御魔法によって打ち消され、直後、ハーディとダン・エリックが走り出す。
「行きましょう」
「行くぞ」
　エリィとアイクが同時に声をかけた。もはや迷っている時間はない。セルマは二人にうなずきかけると、オムニの宝珠を目指して走り出した。
　戦士たちは二手に別れた。ハーディが左から、ダン・エリックは右から、それぞれ大きく迂回してセシルの元へと向かう。
　レイバーグが無数の魔法の矢を放ったが、それらは全て、目標に届く前にかき消えた。
　セシルがハーディへ魔法を放つ。ハーディは横に飛んで攻撃を躱そうとしたが、それは雷撃や炎など、物理的な力を伴うものではなかった。戦士は白い束縛の帯に絡めとられ、身動きがとれなくなってしまった。
　状況を見て取ったレイバーグが束縛の魔法を打ち消そうとしたが、レイバーグの魔力を持ってしても、その魔法は容易に打ち破ることはできなかった。
　セシルは無力化されたハーディから、ダン・エリックへと標的を変えた。光の矢、火球、雷撃と続けざまに魔法が放たれる。ダン・エリックもそれらをすべて撃ち落とすことはできず、雷撃を右の肩に受けてよろめいた。

　その間に、セルマたちはオムニの宝珠へと肉薄していた。宝珠が設置されている金属柱は、手を伸ばせば届きそうなほどにまで近付いている。
　――これさえ手に入れれば。
　セルマは自分の背丈とさほど変わらない高さのところにある宝珠へと、手を伸ばした。しかし、宝珠に指が触れるのと同時に、指先から全身へと激痛が走る。反射的に手を引っ込めると、今度は宝珠を中心に広がる衝撃波が彼女を襲った。悲鳴をあげる間もなく数メートルも跳ね飛ばされる。金属の床に背中をしたたかに打ちつけ、セルマは激しく咳込んだ。
「セルマさん！」
　エリィが駆け寄ってくる。少女の治療魔法によって身体が心地よい熱に包まれるのを感じながら、アイクが呻くように呟くのが聞こえた。
「防御魔法か」
　あらかじめセシルがそのような手段を講じておくことを考慮に入れておくべきだった。痛みの引いたセルマは身体を起こし、青く輝く宝珠を見つめた。巧みに隠蔽はされているものの、注意深く観察すれば、宝珠を覆っている魔法の膜が見える。
「アイク、解呪を」
　声をかけ、セルマは杖を宝珠へ向けた。
　しかし、白銀の称号は伊達ではない。二人がかりの解呪でもその防御魔法は揺らぎもしない。これを解除できるのは、レイバーグの魔法かダン・エリックの破魔の金属棒しかないだろう。
　セルマはダン・エリックへと目を向けた。直後、セシルの波状攻撃によって、ダン・エリックの手から棒が弾き飛ばされる。金属棒は乾いた音を立て、セルマたちと棒術使いとの、ちょうど中間点に落ちた。さらに何発かの魔法を受け、棒術使いは血しぶきをあげて倒れる。
　まだ息のあるダン・エリックにとどめを刺すことなく、セシルはいま一人の戦士へと目を向けた。
　ハーディはいまだ魔力の紐によってからめとられていた。頼みの綱のレイバーグもまた、魔法のことごとくが無力化させられ、防戦一方となっている。魔物との融合のためだろうか。宝珠を手離しているにもかかわらず、セシルの魔力は衰えを見せない。
　何度目かのレイバーグの魔法によって、ようやくハーディの戒めが解かれる。しかし同時に、戦士を雷撃が襲った。戦士は身体をよじって魔法を躱そうとしたものの、それだけで回避できるようなものでもない。激しい雷撃を浴び、ハーディもまたもんどり打って倒れた。
　レイバーグが魔法を放ったが、それは防御障壁によって無効化された。セシルの反撃を受け、レイバーグも防御魔法を展開したが、魔法の全てを防ぎ切ることができない。レイバーグの身体のそこここに切り傷が刻まれていく。
　分が悪い。
　このままでは、姉を救うどころか、こちらが姉によって一方的にやられるだけになってしまう。
　もはやなす術はないのか。セルマは歯がみして、熾烈な魔法合戦を繰り広げる師と姉とを見つめた。
「セルマ」
　アイクがぽつりと口を開いた。
「俺に、ありったけの防御魔法をかけてくれ」
　アイクの視線は、使い手の手から離れてしまった金属棒へと注がれている。彼の意図に、セルマはすぐに気づいた。
「無茶だわ、アイク。危険すぎる」
「どっちにしろこのままではどうにもならないのは、きみもわかっているだろう。無茶の一つもしなけれ

ば、この状況をひっくり返すことはできない」
「なら私が……」
「東の里を旅立つ前ならともかく、今はきみのほうが魔力は上だ。いざとなったときには、きみが最後の砦になる。急げ、状況は、決していいとはいえない」
　アイクの言葉は静かだったが、一点を見つめるその目は、何の反論も受け付けそうにない。セルマの援護がなくとも飛び出してしまいそうな様子のアイクに、彼女はついに折れた。
「わかった。でも本当に、無茶なことはしないでね」
　うなずいて、思い付く限りの防御魔法をアイクにかけていく。その上からアイク自身も防御魔法をかけ、エリィへと目を向けた。
「エリィ、一番強力な治療魔法を用意して待っていてくれ」
　はい。少女は杖を握りしめ、神妙な顔でうなずいた。最後に、奇抜な柄の服をまとった魔法使いは、セルマに微笑みかける。
「あの人を、助けてやってくれ」
　アイクが走り出し、セシルはそれに敏感に反応した。炎、雷撃、魔法の矢。束縛魔法に石化魔法。とにかくあらゆる魔法がアイクを襲った。セルマも魔法が届く限り防御魔法をかけ続けたが、その程度で白銀の魔女の魔法を防ぎ切れるはずもない。たちまちのうちにアイクの身体には無数の傷が刻まれる。しかし彼は、それをものともせずに走り続け、ついに金属棒の元へと到達した。アイクはそれを拾い上げ、今度はセルマへ向けて駆け出す。
　ほどなくして、彼にかけられた防御魔法がその役を果たさなくなった。足元に魔法の矢の直撃を受け、アイクは前のめりに倒れる。
「アイク！」
　叫ぶのと同時に、アイクは起き上がった。魔法は届くか届かないかといった距離だったが、セルマは惜しみなく、アイクに向けて防御魔法をかけ続けた。アイク自身も防御魔法を使ったようで、続くセシルからの雷撃魔法は大した効果を上げることはなかった。
　アイクは再び走り出し、セルマはアイクに防御魔法をかけ続ける。
　そして。
　アイクがセルマたちの元に帰ってくるのと、その背に衝撃波がぶつかるのとは同時だった。アイクは血反吐を吐きながら床に沈み、その手から破魔の金属でできた棒がこぼれ落ちる。
　かん高い音とともに、棒は床に転がった。
　さしものセシルも魔法の乱発で息切れを起こしたのか、数瞬だけ、苛烈な魔法の雨がやむ。
　その数瞬が、最大の、そして最後の好機だった。
　セルマは足元に白銀の杖を置き、金属棒に飛びついた。見た目以上に重いその棒を両手で持ち、宝珠を……宝珠を覆っている防御魔法を……力の限り打ち据える。
　防御魔法は破魔の金属による一撃を受け、一瞬にして消滅した。勢い余ってセルマは宝珠をも打ち据えてしまったが、旧代の魔法使いの遺産は、その程度でどうにかなるほど脆くはなかった。
　セルマは棒を投げ捨てた。右手で宝珠を鷲掴みにすると、身体を屈め、左手で足元の杖を拾い上げる。宝珠はセルマが握った瞬間から、尋常ではない量の魔力を供給しはじめていた。
　その魔力のごく一部を使って、防御魔法を展開する。
　直後、セシルの魔法が彼女を襲った。しかし、姉の魔法は障壁を貫くことすらできずに消滅した。
　状況を把握した姉の行動は早かった。素早く踵を返すと、残る一つの宝珠へと向けて駆け出す。その意図を察知したセルマは、姉へ向けて束縛魔法を放った。魔法は、防御魔法をやすやすと打ち破って姉を絡

め取る。
　ごくわずかな時間で魔法を解除したのはさすがというべきだったが、しかしそれも、宝珠の魔力を得たセルマにはかなうべくもない。
　立て続けに姉が魔法を放ってくるが、その全ては、先ほど展開した魔法障壁が受け止める。
　その隙をついて、レイバーグがもう一つの宝珠へと駆けていくのが、セルマの視界に入っていた。
「姉さん！」
　セルマは姉を呼ばわった。宝珠の魔力を使い、何度も頭の中で訓練した魔法を構成する。
　莫大な魔力の供給を受け、白銀の杖から強大な魔力の光が放たれる。
　セシルが防御障壁を展開したが、光は障壁をいともたやすく突き破った。新たな魔法を発現させる暇もなく、光は白銀の魔女を包み込む。
　姉の口から、けたたましい絶叫が放たれた。
　セシルはその場に倒れると、そうすれば苦痛から逃れられるとでもいうかのように、激しく床上を転げ回る。
　――姉さん。
　セルマは、のたうち回る姉の姿を見つめていた。姉がこの苦しみから開放された時。それが姉を救える時だと信じて、セルマは祈るような気持ちでその様子を見守った。
　やがて体力が尽きてきたのか、セシルのあげる絶叫がか細くなり、身体の動きもまた小さくなってゆく。
　ついに、セシルは床に伏せったまま動かなくなった。同時に、魔法の光が彼女を中心に収束をはじめ、その身体に吸い込まれていく。そして。
　唐突に、セシルの身体が跳ねた。
　陸に上げられた魚のように、セシルの身体が反り返り、幾度も跳ね上がる。その度に彼女の身体は激しく床に叩きつけられ、ついには肌が裂け、鮮血が吹き出す。
　一体、何が起きているのか。
　セルマは、姉のその姿を、黙って見ていることしかできなかった。
　やがてセシルは身動きをやめた。四肢を力なく広げて床上に伏せった姿は、命の炎が尽きたようにも見える。
　静寂が、あたりを満たす。
　エリィが、セルマの横に立った。
「魔法は、効いたんでしょうか」
　わからない。セルマは首を振った。構成した魔法は完璧だった。これが失敗だったとすれば、あとはもう、どうしようもないだろう。
　レイバーグが、セシルの様子を伺いながらも、ゆっくりとジアスの宝珠の元へと歩み寄っていく。万が一ということもある。老魔法使いの判断は間違ってはいない。
　それは、唐突に訪れた。
　セシルの左腕が高々と持ちあがる。セシルに意識の戻った様子はなく、腕は自らの意志を持っているかのようにくねくねとうねりながら、天井へ向かって突き出される。
　ほどなくしてセルマは、その腕が本当に意志を持っているのだということを、否応なしに思い知らされた。
　腕は宙を目指して上昇を続け、ついにその左半身もが持ち上がりはじめる。やがてセシルは右腕を下にして、横向きに寝ころんだ姿勢で左腕だけを差し上げた状態になったが、それでもまだ左腕の上昇は止まらなかった。

セシルの上半身がゆっくりと持ち上がってゆき、そして。
めりめりと音を立て、セシルの左半身から、右半身が剥がれ落ちた。左腕から肩、左胸と腹部の一部だけがそのまま宙に浮き続け、上半身の右側と首から上、そして下半身が床に転がり落ちる。
宙を舞う左半身から、血液ともちぎれた肉片ともつかない物体がまき散らされる。それらはどう見ても人間のものではない、暗青色に染まっていた。
――魔物との融合が、進みすぎていたんだ。
セルマは歯がみして、宙に浮く姉の左腕を見つめた。左半身……心臓を失って生きていられる人間などいない。その下に横たわっている姉の生命がなくなっているのは明白だった。
セルマは大きく息をつくと、あてどなさそうに漂う姉の左腕へ向けて魔法を放った。妖しげにくねくねとうごめいていた魔物は、塵一つ残さずに消滅する。それを見届けてから、セルマは隣に立つエリィへと視線を移した。
「エリィ、みんなの治療を」
はいとうなずいて、少女はまず、すぐそばに倒れているアイクへと歩み寄った。すでに手遅れなのはセルマにもわかったが、それでも少女は最後の可能性を探るかのように、アイクの遺体を検分する。
やがてエリィはため息混じりに顔を上げ、セルマに向けて首を横に振った。セルマがうなずきを返すと、少女はアイクの身なりと姿勢を整えて、ダン・エリックの元へと駆け寄っていった。
そうしている間に、その向こうで倒れていたハーディが自力で起き上がった。ハーディがこちらへ歩み寄ってくるのを確認して、左半身を失った姉の元へ向かう。
――姉さん……。
姉は、ひどく穏やかな表情をしていた。その身体をそっと横たえ、着衣を整えると、開かれたままになっている目を閉じる。
セルマは、床に片膝をついた姿勢で、姉の顔を見つめた。
――本当にこうするしかなかったの？　姉さんがどんな目的で魔人の封印を解こうと思ったのかはわからないけど、本当に、そんなやり方しかなかったの？
セルマは大きく息をついた。
姉を救う。セルマにとっては最も重要な目的を果たすことはできなかったが、魔人の復活の阻止という、もっと大きな視点での目的は達せられた。今は、それを喜ぶべきだろう。
「セルマさん」
振り返ると、エリィがすぐそばに立っていた。その後ろに、傷の癒えたダン・エリックが、破魔の棒を持って立っている。ほどなくしてハーディも、セルマの元に到着した。
「終わったんだな」
戦士が、白銀の魔女の遺体を見下ろし、小さな声でいった。セルマは「ええ」とうなずいて、ゆっくりと立ち上がる。
「あとは、二つの宝珠を里に戻せば、すべて終わりです」
セルマは、右手に握った宝珠に目を向けた。宝珠はまだ、莫大な魔力を彼女に供給し続けている。これほどの魔力があれば、その力だけで一国……いや、使い方次第では世界……を支配することも可能だろう。強大な力、などというものにはさして興味のなかったセルマも、しかしこれほどに常軌を逸した力を手にすれば、それを我がものにしたいという甘美な誘惑に屈してしまいそうになる。
これは危険すぎる。セルマははっきりと、それを感じていた。
「まあ、その、なんだ」
珍しくハーディが、かける言葉に困っているようだった。

「残念な結果にはなっちまったけど、嬢ちゃんはよくやったよ」
　彼女を励ましているのだろう。戦士は、セルマの背中を叩いた。
「だからよ、このことを忘れろとはいわねえけど、いつまでもくよくよしてんじゃねえぞ」
　ことさら陽気にいう戦士の心遣いがありがたかった。セルマは「はい」とうなずき、戦士の顔を見つめた。
「長い間、御協力、ありがとうございました」
「ま、任務だからな」
　さらりと応えたハーディに微笑みを返し、セルマはダン・エリックへと目を向けた。
「ありがとうございました。あなたのおかげで……」
　寡黙な棒術使いは、「気にするな」とセルマの言葉を遮った。
「まだ本当の意味でお前の旅が終わったわけではないだろう。礼をいって回るのは、それからでも遅くあるまい」
　そうですね。うなずいて、セルマは治療術師の少女へと目を向ける。
「エリィも、本当にありがとう。いろいろと大変だったでしょう」
　とんでもない。少女は破顔した。
「楽しかったですよ。里の中ではできない経験もいろいろとしたし、みなさんと知り合うこともできたし」
　少女の顔は、けれどもすぐに引き締まった。その目が横たわる白銀の魔女の元へゆき、言葉の調子が暗いものになる。
「あとは、お姉さんを助けてあげられて、みんなが生き延びることができれば、もっと良かったんですけどね」
　そうね。セルマはうなずいて息をつき、少し離れたところに横たわる、同郷の魔法使いへと目を向けた。
　――アイク、あなたにもね。ありがとう。
　思いを送って、皆の方へと目を向け直す。
「それじゃあ……」
　口を開くのと同時に。

　高らかな笑いが、広大な室内を満たした。
　皆の目が、一斉に声の主へと向かう。いったい何がそれほどにおかしいのか、声の主はセルマたちの視線に気づいた様子もなく、大声をあげて笑い続けていた。
「なんだ、あのじいさん。白銀野郎の魔法で、頭がやられちまったのか」
　ハーディがそのように思うのも無理はない。セルマもまた、師のそのような尋常ならざる笑い声を聞いたのは初めてだった。
「師匠」
　言葉を口にしかけて、セルマは師の左手に握られているものに気付いた。
　ジアスの宝珠。
　西の里に保管されていた薄桃色の光を放つ球体が、老魔法使いの手にしっかりと握りしめられている。
　ようやくセルマたちの視線に気付いたのか、レイバーグは馬鹿笑いをやめると、他人を見下し、馬鹿にしたような、下卑た笑みを浮かべた。
「見事だったぞ、セルマ。さすがはあの女の妹だ。おまえは自分のことを三流の魔法使いだと思っていたようだが、私はそんなことはないとわかっていたよ」
　師の言葉の端々にある刺を、セルマは敏感に感じとっていた。姉を「あの女」と呼んだ瞬間、その表情には怨念めいたものまでが浮かんでいた。
　セルマは師を見つめた。レイバーグはくつくつと笑うと、
「いいことを教えてあげよう、セルマ。この旅の本当の目的は、白銀の魔法使いを倒すことでも、魔人の復活を阻止することでもなかったのだよ」
「おいじいさん、そりゃあいったいどういう意味だ？」
　状況の変化にいち早く気付いたのはハーディだった。眼光鋭く老魔法使いを睨みつける。
「決まっているじゃないか」
　レイバーグは楽しそうに応えた。
「私が最強の力を手に入れる、そのためだよ」
「なんだと？」
「いや、長かったよ、実際。あれはもう何十年も前、私が白銀の称号授与の審査を受けたときだ。私が白銀の称号を得られなかった理由を知っているかね？　『白銀を名乗るには、野心的すぎる』ばかばかしいとは思わんかね？　それから私は、ずっとその野心をしまって、大勢の魔法使いのため、そして万民のために魔法をふるい続けた。しかし、審査に失敗した白銀の称号だけは、どれほどに努力しても、掴むことはできなかった」
「そしてお前は、宝珠と出会った」
「そのとおりだ、ダン・エリック。いや、驚いたよ。まだこの世にこれほどのものが存在していたのだからな。これさえあれば、白銀などという名がなくとも、誰もが私を最強の魔法使いとして認めるだろう」
　そのために、レイバーグは十年以上にも渡って周到な準備を重ねた。充分な素養のある者を捜し、魔法使いとして育てる。やがて成長したその魔法使いをそれと気付かせぬよう操って、宝珠を持ち出させる。
　唯一の誤算が、素養を認めたその少女が、魔法使いとして目覚しい成長を遂げてしまったことだった。聡明で落ち着いた魔法使いとなったセシルは、いくらレイバーグが煽り立てても、宝珠に対して特別な野心を抱くことはなかった。
「色々と考えた末に、私はようやく一つのアイディアを思いついた。その魔法使いに魔物を取り憑かせればいい。そうすれば、魔物が宿主を操って、宝珠を外に持ち出してくれるだろう、とね。あいつに魔物を取り憑かせるのは簡単なことだったよ。もともと、好奇心は強い女だったからね。魔物の召喚術のことを少し

教えただけで、あいつはすぐに飛びついてきた」
　そしてセシルは魔物の召喚実験を行った。失敗したかに思われたその実験は、実は成功していたのだ。しかし、召喚魔法はレイバーグによって巧みに構成をすり替えられ、セシルは自分でも気付かぬうちに、その身体に魔物を巣食わせた。
「あとは、きみも知っての通りだよ、セルマ。あいつの中で魔物は徐々に成長し、そして目論見どおりにあいつを操って東の里から宝珠を奪った。あとは、うまく負けたふりをしながら、あいつが二つ目の宝珠を奪うのを待って、頃合を見て二つの宝珠を手に入れようと、そういう算段だったのだよ。まあ、ありがたいことにどいつもこいつも、見事に私の手の中で踊ってくれたものだよ」
　もうひとしきり笑って、レイバーグはセルマに向けて右手を差し出した。
「さあセルマ。おとなしく宝珠を渡せば、命だけは助けてやろう」
「渡すんじゃねえぞ、セルマ」
「宝珠は渡すな、セルマ」
　ハーディとダン・エリック、二人の戦士の声が重なる。二人はほぼ同時にセルマの前に進み出て、武器を構えた。
「あの男にこのような力を持たせれば、この国どころか、世界が滅ぶ」
「ひどいいいぐさだな、ダン・エリック」
　レイバーグが楽しげに笑った。
「それが、かつて共に戦った仲間のいう言葉か？」
「だからこそ、貴様の野心が世界を滅ぼすといっている」
　ダン・エリックは厳しい視線をレイバーグに向けた。しかし、老魔法使いに怯んだ様子はない。ダン・エリックの視線を涼しい顔で受け流し、棒術使いからハーディ、エリィ、そしてセルマと、順に目を向けていく。
「師匠。本当に師匠が、姉さんを？」
　レイバーグはにやにやと笑った。
「その通りだよ、セルマ。残念ながらな。……それで？　私を討つのかね？　私を討てるのかね？　今さっき、きみが姉にそうしたように、この私も」
　できるわけがない。レイバーグの目がそういっている。セルマは怯み、迷いながらも、杖を構えた。
「無理はするな。奴はおれがやる。お前は援護をしてくれればいい」
「そうだぜ。それでなくたって嬢ちゃんは動揺してんだ。奴とまともに張り合えるわけがねえ。防御魔法でじいさんの魔法を打ち消してもらえば、後はなんとでもならあ」
「セルマさん。強力な魔法の乱用は身体に負担がかかります。お二人のいうとおり、ここは」
　三人から三様に説得され、セルマはついに折れた。
「わかりました。お二人に任せます」
「よっしゃ！」
　叫ぶなり、ハーディが飛び出す。続けてダン・エリックも老魔法使いをめがけて走り出した。
「それが答えか、セルマ！」
　レイバーグは叫び、杖を振るう。それよりもわずかに早く、セルマの魔法が発現した。周辺のあらゆる魔法を無効化する、魔力中和魔法。魔法使いにとって致命的ともいえる魔法によって、レイバーグの魔法は発現すらすることなく消滅した。老魔法使いの表情に驚きの色が走る。
　その間に、二人の戦士は一気に距離を詰めていった。二人はほとんど同時に老魔法使いの元にたどり着き、手に持った武器を一閃する。

金属質な音が二つ、立て続けに鳴った。
人間を打ち据え、その身体に刃をつきたてたのならば、鳴るはずのない音が。
セルマは、有り得ない光景を目の当りにした。戦士二人の渾身の一撃を、老魔法使いがその腕で受け止めている。ダン・エリックの棒を左手で掴み、ハーディの剣を右腕で受ける。本来ならば切断されてしかるべき右腕には、その刃がわずかに食い込んでいるだけだった。
有り得ない光景はさらに続いた。七十歳を越す老人が、屈強な戦士を相手に力負けしていない。どころか、ダン・エリックが両腕で支えている棒を左手一本で振り回し、それをもぎとった。ダン・エリックは体勢が崩れる前に棒を手放して間合いを取り、数瞬遅れて、ハーディも剣を引いて後ろに下がる。
レイバーグは左手の棒を無造作に放り投げた。棒は風を切りながら回転して飛んでゆき、広大な室内の壁にぶつかって、床に転がった。
老魔法使いはにやりと笑ってセルマを見やり、静かに口を開いた。
「これほどわずかな間に、そんな魔法まで使えるようになってしまうとはな。きみの才能には恐れ入るよ、セルマ。だが、魔法の選択を誤ったね。私を倒すつもりなら、戦士の刃ではなく、きみ自身の魔法をもってすべきだったのだよ」
レイバーグの腕が、身体が、脚が。
筋肉と呼ぶには異様すぎるほどに盛り上がる。四肢が伸び、太さを増していく肉体を包み切れなくなった衣服が、その縫い目から音を立てて裂けていく。肌が青黒く、金属質な鱗のようなものに覆われ、その背には肌と同じ色をした翼が開いた。
「まも……魔人？」
セルマの後ろで、エリィが呻く。セルマはその声を聞きながら、自分の倍ほどの背丈になった師の顔を見つめた。
「その通りだよ、エリィ。旧代の魔法使いではない我々が、より大きな力を得ようと思えば、こうするのが一番手っ取り早いのだよ」
師は、姉に魔物の召喚術のことを教え、魔物を取り憑かせたのは自分だといった。そのようなことができるのならば、魔力強化のため、自分自身と魔物を融合させることも可能だろう。
「師匠」
セルマは、悲痛な声で師を呼んだ。
「どうして、私たちを騙したままにしてくれなかったのですか？　宝珠を手にした時点で私たちの不意を打てば、私は師匠のことを信じたまま死ねたのに」
「さあ、どうしてかな。もしかしたら、お前のその悲しげな顔を見たかったからなのかもしれんぞ」
師の面影の残る魔人が、嗜虐的な笑みを見せる。
「さあ、セルマ。もう一度だけいうぞ。お前の持っている宝珠を、私に渡すのだ」
セルマはじっと、師の顔を見つめた。
「セルマさん」
後ろから、エリィが不安げに声をかけてくる。セルマはちらりとそちらに目をやった。
「大丈夫。なんとかなるわ」
根拠もなければ自信もなかった。しかし、今ここで、状況を変えることができるのは自分だけなのだ。
ハーディの剣は、魔人に傷一つあたえることができなかった。
ダン・エリックの破魔の棒は、手の届かないところにある。
治療術師であるエリィに、状況を変えるだけの魔法が使えようはずもない。
セルマは、大きく息を吸った。

「師匠！」
　呼ばわると同時に、魔力中和魔法を解く。
「何のつもりだ？　この私と、魔法合戦でもしようというのかね？」
　魔人はせせら笑った。セルマはその顔を見据えたまま、杖を構える。同時に、魔人の周囲に不気味な輝きを放つ魔力の球体が数個出現した。
　セルマは、宝珠から溢れてくる魔力を杖へと導いた。魔法を放つと、魔人の周囲に浮く球体がすべて消滅する。
「おもしろい。ならば私も、遠慮はせんぞ」
　魔人がにやりと笑った。何の予備動作もなしに右手を突き出すと、その指先から幾条もの光線が放たれる。
　セルマは防御魔法を展開したが、光線を防ぎ切ることはできなかった。威力を弱められたとはいえ、それでもなお強力な魔法が彼女の肌を焼く。
　やがて魔人からの攻撃がやんだ。その隙をついてセルマは防御魔法を解き、雷撃を放った。魔法は魔人を直撃したが、さして効果をあげた様子もない。それでもセルマは、思いつく限りの魔法を魔人に向けて放ち続けた。
　それに同調して、ハーディが剣を振るう。しかし、その剣は先ほどと同様、魔人に傷一つつけることができない。
　魔人は、近寄ってくる小動物を払いのけるかのように、ハーディへ向けて脚を振り回した。強烈な蹴りを浴び、戦士は数メートルも吹き飛ぶ。その勢いのまま、魔人はダン・エリックをも蹴り飛ばそうとしたが、丸腰になった棒術使いは、巧みにそれを避けた。
　エリィが倒れたままになっているハーディへと駆け寄る。少女の治療魔法で戦士の傷は癒えたものの、戦士とともに魔人の蹴りを浴びた剣は、中ほどからほぼ直角に折れ曲がっていた。
　レイバーグが攻撃へ転じる。展開された防御魔法を突き破り、魔人の炎がセルマを襲った。直撃こそ免れたものの、服のあちこちは燃え、火傷がそこここにできる。身体中が痛みを訴えるが、セルマは歯を食いしばって魔人を見据えた。
「万事休すだな、セルマ」
　余裕たっぷりに、レイバーグはいった。
「宝珠を手にしたところで、魔人と人間では基礎になる魔力が違いすぎる。お前は所詮人の身。魔人の力を得ている私にはかなわんのだよ。さあ、おとなしく宝珠を渡せ。そうすれば、命は助けてやる」
　一歩、魔人がセルマに向けて足を踏み出したその時。
「詰めが甘いのは、弟子も師も同じだな」
　いい放ったのは、ダン・エリックだった。
　レイバーグが足を止めた。ゆっくりと、武器を失った棒術使いへと目を向ける。
「この期に及んで負け惜しみかね、ダン・エリック」
　ダン・エリックは、魔人の顔を見つめた。
「貴様はさっき、なにもかもが自分の手の中で踊っていた、といったな。だがあえて、その手の中で踊っている人間がいたとしたら、どうする」
　魔人は目を見開いたが、すぐに表情を取り繕った。
「だとしたらどうだというのだね。セシルとお前が私の目的を知っていたとして、しかしセシルはもうこの世にはいない。お前もまた、武器を失って丸裸ではないか」
　レイバーグは嘲笑した。

「お前らには、もはや何をすることもできんのだよ」
「それが詰めが甘いといっている」
　ダン・エリックは無表情に応えた。なんだと。魔人の表情に、今度は明らかな動揺が走る。ダン・エリックは、人差指を立てた右手を、静かに天に向けて差し上げた。
「白銀の称号を持つ魔法使いが、何の準備もせずにむざむざと殺されるのを待っていたと思うのか」
　ダン・エリックの宣言は厳かだった。
　天に向かって差しのべられた指が、ゆっくりとセルマの頭上を指し示す。その指の動きを追いながら、セルマはそこに、白銀色に輝く魔力の光を見た。
「姉さん……」
　呟きがもれる。光はゆっくりと、セルマの元へと降りてきた。
『ごめんね、セルマ。こんな姿を、あなたには見せたくなかったけど』
「姉さん、本当に姉さんなの？」
　身体の痛みも忘れ、セルマは白銀色の光に問うた。
『ごめんね。私はあなたからたくさんのものを奪ってしまった。そしてまた、あなたに辛い役目を押しつけようとしている。それでもまだ、あなたは私を姉と呼んでくれるの？』
「姉さんは、どんなことがあっても姉さんだわ」
　懐かしい、穏やかな口調。顔のない姉が、小さく微笑んだような気がした。そこにいたのは、彼女のよく知っている姉だった。
『ありがとう、セルマ。本当はもっとゆっくりと話をしてあげたいけれど、私には、あまり時間がないの。今はあの人を……師匠を止めなければ』
　はい。セルマはうなずいた。
「師匠を、説得する方法はあるの？」
『説得できていれば、こんな事態にならなくてすんだでしょうね』
　セシルは悲しげに応えた。
『自分の野心のために何十年も自分を殺し続けることができる人よ。いまさら私たちが説得をしたところで、聞いてはくれないでしょうね』
「それじゃあ」
『ええ。私たちにできるのは、師匠を力づくで止めることだけ』
　セルマは魔人と化した師の顔を見上げた。
　このような事態は予想していなかったのか、その表情には狼狽の色があった。
　――師匠。
　セルマは大きく息を吐くと、うなずいた。
「わかったわ、姉さん。どうすればいい？」
『マークの籠手を』
　指示に従い、横たわる姉の遺体に飛びつく。残されている右腕から白い籠手を外し、自分の腕にはめる。宝珠を右手に持ち、左手には白銀の杖。セルマはもう一つ大きな呼吸をして、魔人へと向き直った。
「セシル、いまさら貴様が現れたところで、この状況を変えることなどできぬわ。貴様はそこで、妹が殺される様を見ているがいい」
　魔人が吠えた。セルマの姿を見て、こちらもまた腹を括ったのだろう。
『師匠。あなたのその力、もっと違う方向に使うこともできたでしょう。そのような力を求めなくとも、歴史に名を残せるだけのことはできたでしょう』

「生憎だな、セシル。お前とはどれほど話し尽くそうが、意見が交わることはないだろうよ」
　セシルの最後の説得も一蹴し、レイバーグは白銀の光へ向けて光線を放つ。しかしそれは、セルマの展開した魔法によってあらぬ方へと弾かれた。
　さすがに旧代の遺産、というべきだった。発動できる魔法がより強力になるのは当然だったが、その利用効率も、杖などとは比べものにならない。同じだけの魔力を使った魔法でも、その威力が三割ほども増している。
「小癪な！」
　再び魔人が吠えた。次から次へと強大な魔法が繰り出され、セルマは一方的な防戦を余儀なくされた。おし寄せる魔法を受け止め切れず、いくつかがセルマに命中する。
『セルマ、こらえて』
　姉の声がセルマに届く。ただ力に任せて魔法を乱発すれば、いかに無尽蔵の魔力があっても、それを扱う側が息切れを起こす。相手が魔人であろうとも、それは同じはずだった。
　魔法障壁を維持しながら反撃の機会を窺うセルマの視界の端で、動くものがあった。
　ダン・エリック。
　棒術使いは、壁際に転がる武器を目指して走っていた。レイバーグが、それに気付いている様子はない。魔人の魔法を受け止めながら、セルマは魔人がそちらに気付かぬよう祈った。
　これほど多くの魔法を使い続けてもまだ、攻撃が途切れる様子がない。こちらが展開しているのは防御魔法一つとはいえ、手傷を負った生身の人間では、その維持にも限界がある。
　徐々に、防御魔法を突き抜け、彼女の元に届く魔法が多くなりつつあった。いまだ致命的なものはないとはいえ、このままではいずれ彼女の生死にかかわるような傷を負うことになるだろう。
　ダン・エリックを気にかける余裕も失われ、セルマはただひたすら、魔人の猛攻を防ぎ続ける。

　魔人は、この状況に勢いづいたようだった。
「いかに強大な魔力を得ようと、しょせんは人間。どこまでそれが持つ？」
　セルマの右腕が、内側からずきずきと痛みを発しはじめていた。扱い慣れない籠手に、人間が扱うには大きすぎる魔力。それらが彼女の身体に影響を及ぼしはじめていた。新たにわき上がってくる痛みをこらえながら、彼女は防御魔法を展開し続ける。
『ごめんね、セルマ。もう少しだけがんばって』
　彼女の身体に起きている異変に、姉も気付いたようだった。しかしそれに応えていられるだけの余裕がない。魔人の攻撃は衰えを見せず、それを防ぐセルマの腕は徐々に痛みを増してゆく。
　――姉さん、ごめんなさい。もう、駄目かも。
　一瞬だけ、集中が途切れた。ごくわずかな間だけ魔法障壁がゆるみ、その障壁を打ち破って魔人の魔法がセルマを襲う。悲鳴とともに、直撃を受けた彼女の身体が吹きとばされた。数メートルほど先で背中を打ちつけて倒れると、それまで彼女が立っていたところに魔人の魔法が降り注ぐ。偶然に助けられて致命傷は回避できたものの、状況がより絶望的になってしまっただけに過ぎなかった。
「これで終わりだな、セルマ！」
　魔人の高笑いが響いた。その右手に巨大な火球が生まれる。火球はセルマの背丈ほどにまで脹れあがり、無防備になった彼女へと放たれた。
　防御魔法の展開が間に合わない。
　――姉さん、ごめんなさい。
　押し寄せる熱気を感じながら、セルマはもう一度姉に謝った。巨大な火の玉は眼前に迫り、もはやそれに対処する術はない。ずきずきと痛む右腕を感じながら、セルマは己の死を意識した。
『あきらめないで、セルマ』
　姉の声と同時に、唐突に火球が真っ二つになった。セルマの身体を飲み込んで余りある炎の塊が、息を吹きかけられたろうそくの火のようにかき消える。
　何が起きたのかわからない。
　セルマは呆然と、目の前に立っているダン・エリックの背中を呆然と見つめた。
　――ダン・エリック？
　棒術使いは、その武器をしっかりと握りしめている。ようやくセルマは状況を認識し、同時に、魔人からの魔法が途切れたことにも気付いた。
「おまえの姉は、最後の最後まで、あきらめるということはしなかったぞ」
　セルマに背を向けたまま、棒術使いはいった。
「ダン・エリック、貴様！」
　魔人が咆哮し、ダン・エリックめがけて走り出す。棒術使いも巨大な相手に臆することなく、それを迎え撃つべく駆け出した。直後、セルマの元へハーディが駆け寄る。
「セルマ、魔法で武器を作れねえか？　あの野郎、一太刀でもいいから浴びせてやらねえと気がすまねえ」
　セルマは杖へと魔力を導いた。ハーディの剣が根元から折れ、その代わりに青白い魔法の刃が伸びる。
「これなら、魔人の肌も貫けるはずです」
「よっしゃあ！」
　セルマの言葉に、戦士は嬉々として魔人へと向かった。左右から二人の戦士に揺さぶられ、さしもの魔人も動きが鈍る。
「セルマさん、治療を」
　声がかかると同時に、彼女の身体を心地よい熱が満たしていった。外傷の痛みが引く中、しかし右腕の

内部からやってくる痛みだけは衰えることがない。
「ありがとう、エリィ」
　宝珠を握っている右手の感覚がない。それでも宝珠は、莫大な力を彼女へ送り込み続けていた。セルマは、魔人との肉弾戦を続けている二人の戦士へと目を向ける。
　――もう少しだけ、持ちこたえて。
　自分の右腕にいい聞かせる。
　ハーディが、魔人の腕の一撃を受けた。戦士はかろうじてのところでそれを躱したが、続けざまにもう片方の腕が彼を襲う。体勢の崩れた戦士はそれをどうすることもできない。
　魔人の腕がハーディをとらえたその瞬間、セルマの魔法が発現した。魔人の右腕、肘から下が一瞬にして消滅し、戦士を襲うはずの一撃がかき消える。
　痛みを感じないのだろうか。魔人はセルマへと怒りに満ちた目を向けた。
「セルマ、やりおったな！」
　魔人の声が響く。レイバーグはセルマへ向けて魔法を放ったが、それはダン・エリックが発現直後に打ち落とした。
「師匠！」
　セルマもまた、大声で師を呼んだ。右腕は肘から下の感覚がなくなり、それとともに痛みが上腕部にまで達していた。
『セルマ、今こそ』
　姉の声が届く。セルマの頭の中に、一つの魔法の構成が閃いた。
　即座に魔法の発現を試みたものの、痛みを訴える右手が魔力の流れをかき乱すのか、籠手からの魔法の発動ができない。
　――姉さん。私に力を！
　セルマは宝珠から供給される魔力を、姉が残してくれた白銀の杖へと導いた。
「ハーディさん、ダン・エリック、下がって！」
　叫ぶと同時に、魔力を開放する。
　セルマの杖から紫色の光……究極の破壊魔法……が放たれた。
「ぬううううおおおおお！」
　絶叫を上げ、魔人は防御魔法を展開した。魔法障壁に受け止められ、紫色の光線は魔人の手前でまばゆい光となって消滅する。
　セルマはありったけの魔力を杖へと導いて破壊魔法を放ち続けたが、魔人の防御魔法もまた、頑強にそれを受け止める。
　純粋な力比べだった。防御魔法を貫けばセルマが、破壊魔法を受け止め切れば魔人が勝利する。
　一歩も譲らぬ魔法勝負は長い間続いた。セルマの額には大量の汗が吹き出し、右腕は悲鳴をあげ続ける。対するレイバーグもまた、最前までの余裕は見られず、むしろ苦悶の表情さえ浮かべていた。
　永劫に続くかと思われた魔法のせめぎあいは、ひどく唐突に終わった。
　魔人の展開していた防御魔法が何の前触れもなしに消滅する。
「ぬおっ!?」
　魔人に狼狽の表情が浮かぶ。
　直後、セルマの破壊魔法が無防備になった魔人を貫いた。あらゆるものを破壊する紫色の光は、頑強な魔人の身体をもたやすく破壊していた。
　魔人の胴体に巨大な穴が開く。

――師匠……。
　セルマは最後の力を振り絞り、破壊魔法のエネルギーを、魔人の身体へと集中させた。魔人の身体が紫色の炎に包まれ、その口から悲鳴とも怒号ともつかない絶叫がほとばしる。
　やがて。
「セえええええ……ルうううううう……マあああああ」
　魔人が、セルマの名を呼んだような気がした。
　直後、セルマの魔法もまた、唐突に消滅した。宝珠からの魔力の供給が途絶え、魔法が維持できなくなったのだ。
　ぜいぜいと荒い息をつきながら、セルマは魔人を見つめていた。気力体力ともに限界で、もはやそこに立っているだけで精一杯だった。魔人がもう一撃を放つ余力を残していれば、もはやセルマに対抗するすべはない。
　一歩、魔人がセルマへと足を進めた。身体に穴を開けられ、魔法の炎に焼かれてもなお、魔人は生き続けていた。
　魔人の、一本だけ残された腕がセルマへ向けて突き出される。
　また一歩、魔人がセルマへと近づく。
　ゆっくりと、しかし確実に、魔人はセルマへと足を進め続けた。
　そして、魔人の腕がセルマの身体を捕らえようと、ひときわ長く伸ばされた。
　直後。
　地響きとともに、レイバーグの身体が地に沈んだ。
　紫色の炎に焼かれてもなお耐え続けた頑強な肉体も、ついに破壊魔法に屈し、跡形もなく消失する。
　魔人の左腕だけが、この世に執念を残すかのように残されていたが、程なくしてそれも力尽きた。
　その左腕が存在していた場所に、薄桃色の輝きを放つ宝珠が、静かにたたずんでいた。宝玉は魔人を粉砕した究極の破壊魔法にも耐えてみせたが、やがてその輝きが薄くなっていく。
『いくら無尽蔵に見えても、物質に封じ込められた魔力には容量があるわ。師匠は魔人の身体の維持にも魔力を使っていたみたいだから、余計に消耗が早かったのね』
　姉が、静かにいった。
　ふと気付いて、セルマも自分の右手の宝珠を見た。こちらもまた、その輝きが急速に失われつつあった。長い時間にわたって莫大な魔力を必要とする魔法を維持し続けたのだ。魔力が失なわれるのも当然だった。
「この魔力は、回復しないの？」
『私にはわからないわ。もともとは魔人の魔力だから、もしかしたら何百年、何千年かしたら、回復するのかもしれないけど』
　それでは少なくとも当分の間は、魔人の復活はない、ということか。セルマは大きく息をついた。
『セルマ、よくがんばったわね』
「姉さんと、みんなのおかげです」
　姉の労いに、セルマは短く応えた。
「ハーディさんやエリィ、それにダン・エリックにアイク。みんながいたから」
『そうね』
　白銀の光が、微笑んだような気がした。
『セルマ。残念だけど、時間だわ。私はそろそろ、行かないと』
「待って、姉さん！」
　セルマは姉を引き留めようとしたが、それが無理なことは承知していた。現在の姉は、魔法によって思

念の残滓を引き留めているにすぎず、魔力が尽きれば姉は消滅する。今のセルマには、その魔法を維持できるほどの魔力は残されていなかった。
『セルマ。私はあなたからたくさんのものを奪ってしまった。いまさら許してくれとはいえないし、たとえあなたが私を許してくれても、たくさんの人が私を恨んでいるでしょう。でも、一つだけ覚えておいてほしいの。私は、いつでもあなたを見守っているから』
「はい」
　セルマはうなずいた。
『この旅で知り合った仲間たちを大切に。ダン・エリックは、あなたが間違った方向に進まない限り、いつでもあなたの味方になってくれるはずよ』
「はい」
『それからもう一つ。こんなものが罪滅ぼしになるとは思わないけれど』
　白銀の光が、静かにセルマを包む。同時に、セルマの頭の中に、姉がこれまで得てきた知識や、様々な魔法の構築方法が流れ込んでくる。そしてもう一つ。姉の部屋の一隅に、小さな隠し戸棚が作られていることも。
『隠し戸棚の中の書物には、私のこれまで研究を全部まとめておいてあるわ。それから、私の杖は、あなたが使いなさい。今日、今から、あなたが白銀の魔法使いよ』
「姉さん……」
　姉の思念の残滓が、ゆっくりとセルマから離れていくのを、セルマは見つめた。やがて姉の姿がぼんやりと明滅をはじめ、そのときが近いことを告げる。
『あなたは、白銀の名を称するにふさわしい力を身につけたわ。あとは、その魔力を正しいことに使って。師匠のような人を、増やさないためにも』
「わかりました」
　セルマがうなずくと、白銀の輝きは一瞬大きく揺らぎ、消滅した。

　しばらくの間、セルマはぼんやりと白銀の光があった虚空を見つめていた。
　やがて小さく息をつくと、その後ろに集まって、彼女を見守っていた三人を振り返る。
「セルマさん、大丈夫ですか？」
　ええ、とうなずいてから、セルマは右の上腕から肩にかけての痛みを思い出した。痛みはずいぶんと引きはしたものの、上腕の中ほどから指先まで、まったく感覚がない。その上、肘から先を動かすこともできなくなっていた。
「右手が動かないの。ちょっと見てもらえる？」
　肩を回して腕を持ち上げてから、セルマは籠手の先から出ている指が、石膏細工のように真っ白になっていることに気付いた。同じことに気付いたのだろう。エリィが息を飲む。
「まさか、これって」
　エリィは慌てた様子で、セルマの腕から籠手を外しにかかった。輝きを失った宝珠を慎重に掌から外し、ゆっくりと籠手を外す。エリィは険しい目つきで、セルマの服の袖をめくりあげて、腕を露出させた。
「やっぱり……」
　エリィは小さく息をついて、首を左右に振った。
「魔法の使いすぎです。それでなくても大きな魔力が負担になっているのに、その上籠手を使ってさらに大きな魔力を引き出していたから、その負荷に身体が耐えられなかったんです。話に聞いたことはあるけど、

今の魔法使いは、ここまで大きな魔法は使えないから見ることはないだろう、っていわれてました」
　セルマの腕は、上腕の中ほど、ちょうど感覚がなくなっている部分から、純白の石のようになっていた。
「それで、どうにかなるのか？」
　ハーディの問いに、エリィは首を横に振った。
「こうなってしまえば、もうどんな治療魔法も効かないんです。腕そのものが死んでしまってますから。それに、このままにしておくと、ここからまた石化が進んでしまうおそれもあるから……」
　切り落とすしかないですね。
　エリィは静かにいった。
「ほんとかよ？　ほんとにどうにもならねえのか？」
「あんな無茶な魔法の使い方をして、腕一本ですんでいるほうが奇跡みたいなものなんです。もう、どうしようもないんですよ」
　重ねて問うたハーディに、エリィは切なげに応えた。
　少しの間、場が沈黙に支配される。
「いいわ、エリィ。やってちょうだい」
　やがてセルマは、明るくいった。
「他に選択肢はないんだし、このまま動かない腕をぶら下げていても邪魔なだけだしね」
　少女はセルマをじっと見つめ、やがて「はい」とうなずいた。そしてハーディにセルマの右腕を支えるように指示すると、杖をセルマの腕の石化部分との境目に当てた。
「少し、痛いですよ」
　声をかけ、エリィは息を吐いた。
　少女の魔法が発現し、腕に激しい痛みが走る。
　セルマが悲鳴をあげて身体をよじると、右腕が境目よりも少し上で切断された。ずきずきとした痛みが残ったが、我慢できないほどでもない。エリィの魔法が優秀なのだろう。腕の切断面は切断と同時にきれいにふさがれていた。
　エリィはセルマに近付き、腕の切断面を検分した。
「石化がこれ以上進む心配はなさそうですね。切ったところ、痛みますか？」
「ちょっと、ずきずきと。でも、我慢できないほどではないわ」
「痛みは、もうしばらく残ると思いますが、今日のうちには引いてくると思います。他に痛むところはないですか」
　セルマは「大丈夫」とうなずいて、少女へと目を向けた。エリィは、彼女から目を逸らすように、顔をうつむける。
「ごめんなさい、もっといい方法があればよかったんですけど」
「気にしないで。私は大丈夫だから」
　セルマは努めて明るく応えた。
「でも、セルマさんだけが色々と失くしてしまって。ほんとに大丈夫ですか？」
「大丈夫よ。私は、まだ生きているんだもの。腕の一本くらいなくたって、どうとでもなるわ」
　セルマは微笑んだ。そして、先ほどからずっと気になっている疑問を口にした。
「ねえ、エリィ。私の髪って、これも魔法の使いすぎの影響なのかな？」
　弾かれたように、少女の顔が持ちあがる。少女はじっとセルマの顔を見つめた。
「たぶん、そうだと思います」
「じゃあ、ずっと、これもこのまま？」

「たぶん」
　申し訳なさそうにエリィはうなずいた。
「でも、その髪もよく似合ってますよ。本当に、伝説の中の白銀の魔法使いみたいで」

エピローグ

　彼女は、里の入口に立っていた。
　昇りはじめたばかりの朝日が、彼女の銀色の髪と白銀の杖を照らす。
　セルマの旅の終点は、始まりの場所でもあった東の魔法使いの里だった。二つの宝珠とマークの籠手は、それぞれが元の場所へと戻され、再び里の魔法使いたちの監視下に置かれることになった。帰還の途上でハーディはセルマたちと別れ、軍に帰っていった。風の噂では、治療の甲斐なく死亡してしまった隊長の後任に選ばれたという。
　事件そのものは、他の魔法使いたちの動揺を考慮して、歪曲されることになった。
　最後の戦いにおいて、レイバーグとセシルが互いに宝珠を持っての魔法合戦となった。レイバーグはセシルに倒されたものの、セルマが宝珠を得、セシルを倒した、とされたのである。
　周囲の者はおおむねセルマに同情的だった。そして、この旅で魔法使いとして目覚しい成長を遂げた彼女は、姉の言葉の通り、白銀の魔法使いの名を継ぐことになった。無論、反対意見もあるにはあったが、魔法使いとしての技量、そしてこの旅によって人間としても成長を遂げた点が評価されたという。
　そして彼女は、里の復興を待たず、新しい旅に出る決意をした。彼女を里に引き止めようとする声もあったが、セルマの決意は固かった。

　柔らかな風が吹いた。
　風は彼女の髪と、右の袖とを揺らす。
　彼女の隣には、二つの人影があった。姉の遺言に従って、彼女の護衛を買って出たダン・エリックと、「世界を旅して、見聞を広げてみたい」といったエリィ。
　セルマは、静かな里の景色を、じっと見つめていた。
　姉の影を追って、この場所から一つの旅が始まった。
　……あまり、過去を振り返るのはよそう。セルマは思った。これから私は、広い世界へ、未来へと向けて旅立つのだから。
　セルマは早朝の澄み切った空気を、大きく吸い込んだ。
「さあ、いきましょう」
　はい。エリィが応え、ダン・エリックがうなずく。
　セルマは、最初の一歩を、ゆっくりと踏みしめた。

白銀の魔女

http://p.booklog.jp/book/72211

著者：中富虹輔

著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/ynakatomi/profile

感想はこちらのコメントへ

http://p.booklog.jp/book/72211

ブクログ本棚へ入れる

http://booklog.jp/item/3/72211

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）

運営会社：株式会社ブクログ